

宝満山遺跡

太宰府市の文化財 第12集

太宰府市教育委員会

宝満山遺跡

——太宰府市の文化財 第12集——

平成元年

太宰府市教育委員会

宝満山遺跡

九州電力株式会社特別高圧送電線
——「220 kV 福岡線新設工事」に伴う——
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年

太宰府市教育委員会



太宰府天満宮第2次調査地点から宝満山を望む。



宝満山遠望（右側の集落が内山）



内山の集落と南谷の農地



内山・南谷・北谷（手前の集落が内山）



第3・4次調査地点と愛岳山（手前が第4次調査地点）



第5次調査地点と太宰府市街遠望。



金銅製菩薩立像（保存処理後）



同（保存処理前）

序

宝満山は太宰府の北東に聳える霊峰であります。古くから神の降臨する山として崇拝され、今も多くのの人々から愛されています。

この長い歴史をもつ霊峰に、各時代の文化遺産が眠っていることは早くから知られており、昭和35、36年には「宝満山文化総合調査会」による発掘調査を含めた宝満山文化の学術調査研究が実施され、大きな成果を収めていることを御存知の方も多いと思います。今回我々の実施しましたものは、調査の性格すら異なるものの宝満山における発掘調査といたしましては、先の学術調査に続くものであります。ここにその調査の概要を報告書として上梓することができましたので、今後の学術研究や郷土史研究等に活用して頂ければと願っております。と同時に、多くの方々が本書を利用され宝満山文化にとどまらず、多くの文化遺産に対して御理解を深めていただければ幸いに存じます。

発掘調査を実施するにあたりまして、御理解、御協力いただきました九州電力株式会社の関係諸氏、調査全般に亘って御指導、御協力をいただきました太宰府天満宮小西信二氏、金銅製仏像の保存修復研究を実施していただきました東京国立文化財研究所の諸先生方、更に、技師と共に現地での作業に汗を流されました作業員の方々に、厚く御礼申し上げる次第であります。

太宰府市教育委員会

教育長 藤 壽 人

例 言

1. 本書は九州電力株式会社福岡支店が実施する特別高圧送電線 220kV 福岡線新設工事に先がけて太宰府市教育委員会が実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は太宰府市教育委員会が行なった。調査関係者は第Ⅱ章に記した。
3. 今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第Ⅱ座標系を基準とし、水準は T. P を基準としている。個別の遺構実測のためには主として磁化を用いているので「M. N.」の表示をすることにした。
4. 遺構実測図及び遺構写真は、山本信夫・狭川真一・緒方俊輔、遺構の空中写真は、(有)イナトミ、遺跡周辺の航空写真及び第3、4、7次の遺構全体図はアジア航測(株)、宝満山の地上写真は狭川、遺物実測図は、山田富美・山村信榮・狭川、遺物写真はフォトハウスおか（代表岡紀久夫）が行なった。
5. 出土遺物のうち金銅製菩薩立像の保存修復は東京国立文化財研究所（所長濱田隆）にお願いした。（第Ⅳ章）
6. 調査及び整理に関して次の方々から御指導、御教示を受けた。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）
馬淵久夫 青木繁夫 平尾良光 石川陸郎 三宅久雄 井上一念 橋本弘次（東京国立文化財研究所）八尋和泉 横田義章 森田 勉 赤司善彦（九州歴史資料館） 小西信二（太宰府天満宮文化研究所）常松幹夫（福岡市教育委員会）
7. 本書の執筆は、狭川・山田・山村が行ない目次に記した。第Ⅳ章については、東京国立文化財研究所からいただいた受託研究報告のうち、本遺跡に関する部分を抜き出し掲載した。
8. 本書の編集は、狭川が担当した。

目 次

I. 遺跡周辺の概要	(狭川真一)	2
II. 調査経過	(狭川)	6
III. 調査の概要		9
(1) 第1次調査		9
①調査	(狭川)	9
②出土遺物	(山田富美)	9
(2) 第2次調査		10
①調査	(狭川)	10
②出土遺物	(土器は山田、石器は山村信榮)	10
(3) 第3次調査		12
①遺構	(狭川)	12
②出土遺物	(山田)	16
③小 結	(狭川)	17
(4) 第4次調査		18
①調査	(狭川)	18
②遺構	(狭川)	20
③出土遺物	(山田)	22
④小 結		30
遺構と層位の年代	(山田)	30
調査地の検討	(狭川)	30
金銅製菩薩立像の出土	(狭川)	31
(5) 第5次調査		33
①調査	(狭川)	33
②遺構	(狭川)	33
③出土遺物	(山田)	36
④小 結	(狭川)	36
(6) 第6次調査		37
①調査	(狭川)	37
②出土遺物	(山田)	37
(7) 第7次調査		38

①遺 構	(狭川)	38
②出土遺物	(山田)	46
③小 結	(狭川)	46
(8) 鉄塔 No. 26地点の調査	(狭川)	48
(9) 鉄塔 No. 32地点の調査	(狭川)	48
(10) 鉄塔 No. 33地点の調査	(狭川)	48
(11) 鉄塔 No. 34地点の調査	(狭川)	48
IV. 金銅製菩薩立像の保存修復研究	(東京国立文化財研究所)	50
1. はじめに		50
2. 品質形状および保存状態		50
3. 材質調査		51
4. 原料産地推定		51
5. 保存修復		52
6. おわりに		52
V. 結 語	(狭川)	53
VI. おわりに	(狭川)	54
付 表 1	(山田作製)	55
付 表 2	(山田作製)	57



Fig. 1 太宰府市周辺主要遺跡分布図 (1/50000 建設省国土地理院発行『太宰府』『日田市』)

- | | | | | | |
|----------------|-----------------|-------------|--------------|--------------|------------|
| 1. 宝満山遺跡 | 2. 大野城跡 | 3. 岩屋城跡 | 4. 原山無量寺跡 | 5. 浦城跡 | 6. 安楽寺跡 |
| 7. 太宰府天満宮境内地道跡 | 8. 馬場道跡 | 9. 新町道跡 | 10. 推定金光寺跡 | 11. 国分瓦窯跡 | 12. 筑前国分寺跡 |
| 13. 陣ノ尾遺跡 | 14. 筑前国分尼寺跡 | 15. 国分千足町道跡 | 16. 御笠軍団印出土地 | 17. 遼賀軍団印出土地 | 18. 大宰府跡 |
| 19. 観世音寺 | 20. 大宰府条坊跡(推定域) | 21. 君ヶ畑道跡 | 22. 鉾ノ浦道跡 | 23. 結ヶ浦火葬墓 | 24. 般若寺跡 |
| 25. 市ノ上道跡 | 26. 剣塚古墳 | 27. 杉塚廃寺 | 28. 唐人塚遺跡 | 29. 塔原廃寺 | 30. 樋田山遺跡 |
| 31. 峯畑遺跡 | 32. 峰火葬墓 | 33. 修理田遺跡 | 34. 米嚙火葬墓 | 35. 通り浦遺跡 | 36. カケ塚遺跡 |
| 37. 野黒坂遺跡 | 38. 武蔵寺 | 39. 原口古墳 | 40. 吉ヶ浦道跡 | 41. 今王古墳群 | 42. 宮浦浦古墳群 |
| 43. 下高尾古墳 | 44. 五条道跡 | 45. 吉ヶ浦4号墳 | 46. 六本松道跡 | 47. 六本松古墳 | 48. 塚口古墳群 |
| 49. 御笠地区遺跡群 | 50. 六度古墳 | 51. 尺ヶ浦古墳 | 52. 大谷古墳 | 53. 星隈古墳 | 54. 阿志岐古墳群 |

I. 遺跡周辺の概要

宝満山は古来から信仰の絶えない霊峰である。玉依姫が示現したといわれる標高829.6mのこの山は北に仏頂山、頭巾山、三郡山、砥石山が続き、東南に大根地山、古処山を望むことができる。また南西側の山麓には現在の太宰府市街地が広がっている。山容は山岳信仰の対象となるにふさわしい姿であり、この山にまつわるさまざまな伝承、伝説はそれを物語っている。

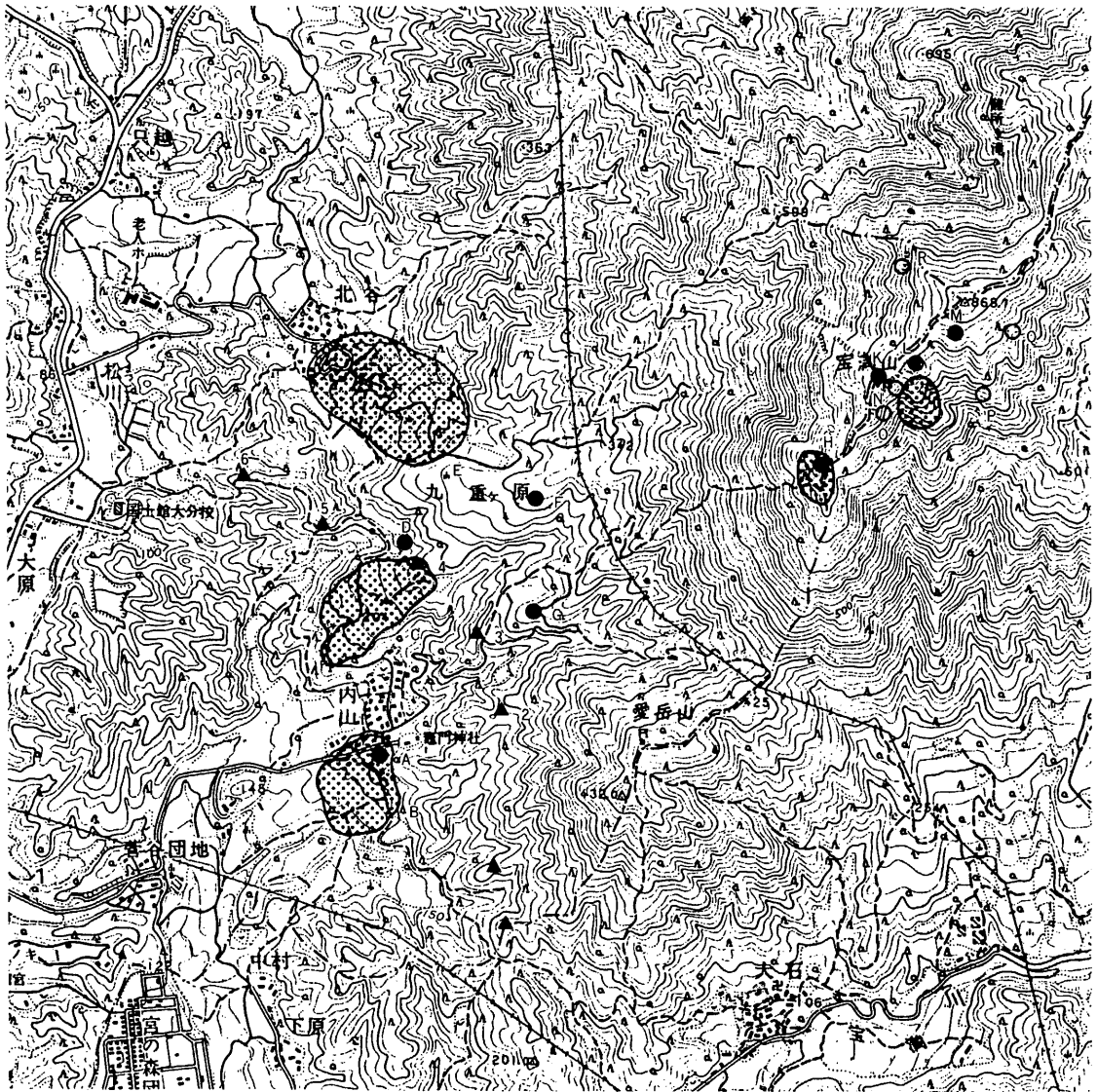


Fig. 2 宝満山主要遺跡分布図(1/25000 建設省国土地理院発行『太宰府』)

- | | | | | |
|--------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 ~ 7 各次調査地点 | A 下宮礎石群 | B 應門山寺推定地 | C 南谷坊跡推定地 | D 中堂跡 |
| | E 北谷坊跡推定地 | F 有智山城空堀 | G 妙見礎石群 | H 文保二年磨崖仏 |
| | I 中宮跡及び坊跡 | J 上宮坊跡 | K 上宮跡 | L 座主坊跡 |
| | M 十三仏碑 | N 法城窟 | O 堀城跡 | P 剣ノ窟 |
| | Q 普地の窟 | R 釜蓋窟 | | |

またそれだけでなく遺跡の上からも明らかにその様相はしのばれ、山の随所に磨崖碑や板碑、石仏、礎石群、石垣などを今も見る事ができる。

宝満山の歴史については、すでにいくつかの論考が発表され、各時代を通じて様々な山の移り変わりを知ることができる⁽¹⁾。その詳細については各論考に譲ることとして、本稿では遺跡、なかでもその調査や出土遺物を概観することによって宝満山遺跡の考古学上の姿を簡単に知ることから始めたいと思う。

宝満山中には頂上に竈門神社上宮、その下方に中宮跡、山麓の内山集落入口に同神社下宮が鎮座している。この三者を結ぶ道は今、登山者達にとって格好の登山道となっているのでまずこの道を登山してみたい (Fig. 2)。

下宮入口で鳥居や石段のある南側に礎石列が並んでいる (Fig. 3)。七間五間の総柱礎石建物遺構で、露出した岩盤を加工し礎石とするものもある。奈良時代に創建され平安時代後期以降に再建されたと推定されている。下宮境内には梵字を薬研彫りする自然石板碑や多重石塔の残欠などが見出される。

登山道と各所で交叉しながら進む林道が一の鳥居までつけられているが、この林道の切り通しには随所に炭・灰を混入する穴の断面がみられ、遺構の存在を予想させる。一の鳥居までに至る途中に本谷池、南谷池があるが、これと林道に挟まれた丘陵上に妙見祠礎石群がある。近年発見されたものであるが、三間四面の礎石群で四周には三重の石列を巡らした立派な基壇の存在が推定されている。

一の鳥居から先に進み中宮跡までの道の左右は浄行坊、大谷坊、柴門坊などの坊跡が点々と続いている。中宮跡をすぎると文保二年(1318) 銘の大梵字磨崖仏 (Fig. 4)、その対岩にも同

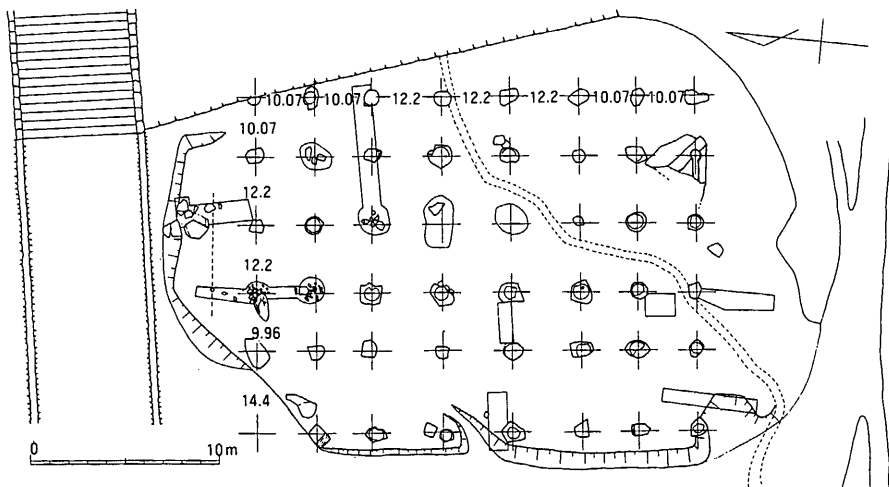


Fig. 3 竈門神社下宮礎石建物跡(『宝満山の地宝』より)

様の梵字仏の形跡が遺っている。ここから上宮への途中には竈門岩とされている霊岩がある。また楞伽院への道をたどれば、仲谷坊、東院坊など多数の坊跡が展開し、福城窟、法城窟などの霊窟がいくつかみられる。

一の鳥居までもどり、羅漢沢と呼ばれる谷を越えると有智山城跡がある。現在は空堀を残すだけであるが、当時の様子を窺うことができる。ここから太宰府の平野を遠望することのできる九重原までの間は、山中とは言えかなり平坦な空間が広がり、遺跡の存在を窺わせる。

この九重原から北谷の集落までの間には根本中堂の跡と呼ばれる地点があるが、今それをしのぶものは何も残っていない。

このように一般に知られた登山道周辺だけでも、多くの遺跡がまだ地中に眠っている。

さて、この文化財の宝庫に初めて発掘調査をはじめとする学術調査の手が及んだのは昭和35年である。宝満山



Fig. 4 文保二年銘磨崖梵字仏

文化総合調査会が主催して実施したもので、その考古学的な成果は近年公にされ、宝満山研究のよりどころとなっている⁽²⁾。この折の考古学的調査では法城窟と上宮背後の岩棚祭祀遺物の堆積層、下宮礎石群の測量及び部分調査を実施し、併せて周辺の採集遺物、伝世遺品なども調査されている。

この調査で宝満山に遺る遺跡が奈良時代まで遡れると共に、奈良三彩や皇朝十二銭の出土は、沖ノ島や大飛鳥などの祭祀遺跡と共通するものであり、律令制下における国家的祭祀の行なわれていたことが推量される。

平安時代後半には経塚が多く造営されている。金銅製菩薩形立像を共伴したとされる宝満山経塚は其中でも著明なものの一つである。

中世を知る資料では、仏手や仏具、懸仏やその付属品が多数発見されており、この山における仏教の活発な活動が推定されると共に修験道の色彩も強められている。

こうした豊富な文化遺産を有する山も、明治の排仏毀釈の折に多くの被害を受けることにな

る。『筑前続風土記』などに記されるうちのいくつかの碑文や種子は、無残にも削り取られ、今は見ることが出来ない。中宮跡に残る磨崖碑の破損もこのころのものとされている。さらに太平洋戦争を前後する混乱した時代には、個人の利益の為に遺跡を荒らす者も多かったと言われ、経塚の多くはこの折に失われていったのである。こうした行為は今も時折見られると言う。

近年に至り、宝満山の遺物採集地点が公にされた⁽³⁾。これを見ると、山上はもちろん、特に山麓付近には遺跡の存在を窺わせるに足る資料が多く採集されていることに気付く。先の学術調査や採集地点の報告は、宝満山のほとんど全てが遺跡として認識されるものであることを明らかにし、奈良時代以降では文献資料と併せて、この山が祭祀や修験道をはじめとする多くの学術研究に寄与できる貴重な文化財の宝庫であることが理解できるのである。これに加え、近年多くの登山愛好家らがこの山をおとずれ、緑にふれしたしむ姿をみる時、一日も早く緑と文化財をあわせた保存・保護の措置がとられるべきであると痛感するのである。

註

- (1)小田富士雄「古代に於ける筑前竈門山寺の活動」『史迹と美術』31-10 1961 後に『九州考古学研究 歴史時代篇』（学生社）所収
中野幡能『筑前国宝満山信仰史の研究』1980（太宰府天満宮文化研究所）
森 弘子「宝満宮の祭祀」『太宰府古文化論叢 下巻』1983（吉川弘文館）他
- (2)小田富士雄他『宝満山の地宝―宝満山の遺跡と遺物―』1977（太宰府天満宮文化研究所）
小田富士雄・武末純一『太宰府・宝満山の初期祭祀―『宝満山の地宝』拾遺―』1983（財団法人 太宰府顕彰会）
- (3)小西信二『宝満山及び竈門神社周辺の遺跡分布調査報告書』1984（財団法人 太宰府顕彰会）

Ⅱ．調査経過

九州電力株式会社福岡支店から特別高圧送電線「220kV 福岡線新設工事」(鉄塔10ヶ所建設)に伴う埋蔵文化財調査の事前協議について太宰府市教育委員会に依頼があったのは、昭和57年5月であった。これを受けて市教育委員会文化財係では過去の分布調査と現地踏査などから、鉄塔建設予定地点 (Fig. 5) 全てが文化財包蔵地に含まれる可能性が高いと判断し、試掘調査実施後、遺構の確認に伴い本調査を実施する旨を、昭和61年3月に書面で回答した。

その後、試掘調査の契約を締結したのち、昭和61年5月12日から8月2日まで現地調査を実施し、遺構の確認された3地点 (No. 28、29、30) について本調査を実施する旨を通知した。

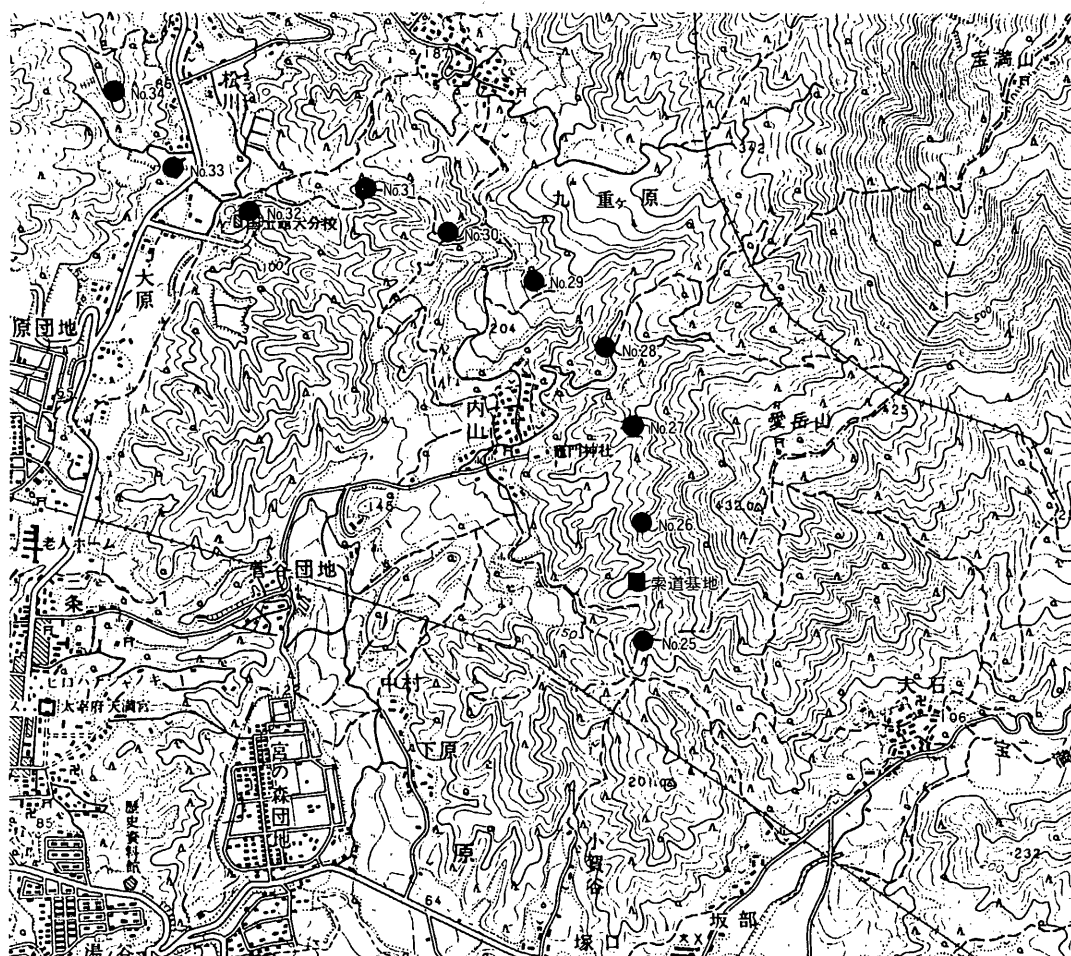


Fig. 5 鉄塔番号及び位置図

(1:25000 建設省国土地理院発行『太宰府』『二日市』)

本調査に伴う契約締結ののち、同年 8 月 4 日から本調査にとりかかった。

同年11月に至り、当初の計画案に造成計画のなかった鉄塔建設用索道基地で造成が実施されていることを知った市教育委員会は緊急に現地へおもむき、遺構の存在することを確認するに至った。この旨を緊急に通知、急遽本調査実施の協議書を提出し、本調査の契約締結後、同年11月14日から30日まで現地調査を実施した。

昭和61年度の事業（事務処理を含む）は内山地区を中心に昭和63年3月31日をもって終了したが、松川地区に残る鉄塔3基については、昭和62年4月に事前協議がなされ、同年7月に試掘調査の契約を締結、7月28日から8月29日にかけて現地調査を実施した。松川地区については遺構の発見がなかったため、本調査は見あわせた。

出土遺物の整理、報告書作成の事業については、昭和62年7月に契約を締結し、以降随時整理業務にとりかかったが、市教育委員会側の事情もあり、整理等すべてが完了したのは、昭和64年3月であった。

上記全ての事業費については九州電力株式会社の原因者負担として実施した。

なお、第4次調査地点から出土した金銅製菩薩立像については錆化が進行し、応急に保存処置をする必要があったため、本市出土品の他1点と共に昭和62年度の受託研究（研究題目－太宰府市出土金属製品の保存修復研究－）として東京国立文化財研究所に受け入れていただくこととした。これに伴う研究契約は昭和62年8月27日に締結し、同日から昭和63年3月31日までを研究期間とし、諸種の研究を実施していただくと共に同年5月12日にその研究報告を提出していただいた。第Ⅳ章にそのうちの金銅製菩薩立像に関する部分を掲載させていただいた。

また、鉄塔建設ルートのうち鉄塔番号 No. 25～34の10基が太宰府市に該当し、試掘を含めた現地作業を実施した地点については便宜上、各々調査次数を与えて実施することとした（Tab. 1）。宝満山についてはすでに第Ⅰ章で述べたように昭和35・36年に第1～3次の学術調査が行なわれているが、市行政が独自に実施する事業であることから大宰府史跡と大宰府条坊跡とを別けて次数化している例のあるとおり、市側独自で次数化することとした。

鉄塔番号	遺跡名及び調査次数	調査の状況
No. 25	宝満山遺跡群第1次調査	試掘のみ
No. 26	———	踏査及び立会
No. 27	宝満山遺跡群第2次調査	試掘のみ
No. 28	宝満山遺跡群第3次調査	本調査
No. 29	宝満山遺跡群第4次調査	本調査
No. 30	宝満山遺跡群第5次調査	本調査
No. 31	宝満山遺跡群第6次調査	試掘のみ
No. 32	———	踏査のみ
No. 33	———	試掘のみ
No. 34	———	試掘のみ
索道基地	宝満山遺跡群第7次調査	本調査

調査及び整理関係者は以下のとおり。

Tab. 1 宝満山遺跡各次調査と鉄塔番号

調査主体 太宰府市教育委員会

統 括 教育長 陶山直次郎

教育長 藤 壽人（昭和60年3月14日～）

教育部長 西山 義則（昭和63年12月～）

庶 務 社会教育課長 西山 義則

社会教育課長 花田 勝彦（昭和59年10月～）

社会教育課長 関岡 勉（昭和62年12月～）

文化財係長 黒板 力

文化財係長 鬼木富士夫（昭和61年4月～）

文化財係主事 岡部 大治

文化財係主事 白水 伸司（昭和62年4月～）

調査担当 文化財係技師 山本 信夫

文化財係技師 狭川 真一（昭和58年4月～）

文化財係技師 緒方 俊輔（昭和61年4月～）

（嘱託） 山村 信榮（昭和62年9月～）

調査参加者（順不同、敬称略）

藤原 重登	田中 平助	八柳健之助	竹林 義之	栗林 義行
大庭与四郎	大庭日佐彦	山下 真樹	鳥飼 孝照	今泉 一夫
上田 吉信	上田 博史	三上 智久	佐藤 正光	長尾 吉男
田部 澄博	楠林トミキ	楠林 照代	楠林 静香	鳥飼ツヤ子
財津ヒトミ	山下 澤子	渡辺ひとみ	松崎イセ子	松崎スミエ
松田 信子	花園美千子	竹林 照子	萩尾カネ子	萩尾マキ子
萩尾須磨子	大庭 照子	田中テル子	中島ウメノ	中島タキノ
中島タカ子	松島 順子	白水いせの	萩尾万寿子	平田 ソヨ
田原智恵子	高原改良子	中嶋はじめ	徳永モモエ	平島 優子
江島スミエ	白木ハルミ	大迫フミ子	吉田 正子	（以上発掘調査作業員）
永見 秀徳	藤城 泰	瀬口 真司（奈良大学学生）	松田造園土木	

整理参加者

山田 富美	狭川 麻子	城戸 康利（以上補助員）		
原野 正子	吉田 勝子	米川 治子	大西佐智子	横山美津子
岩下 恵子	田崎 笙子（以上整理作業員）			

Ⅲ. 調査の概要

(1)第 1 次調査

愛岳山から南東方向に派生する丘陵の一つで、筑紫野市との市境近くに調査地点がある。地番は太宰府市大字内山字ジル谷1154-24、開発対称面積は1,742㎡で昭和61年5月12日から15日まで現地調査を実施した。調査は山本が担当した。

①調 査

開発予定地に7本の試掘トレンチを設定し人力による作業を実施したが、表土中から若干の遺物を検出した他には遺構は検出されなかった。

②出土遺物

表土層出土土器 (Fig. 7、付表1)

須恵器

坏 a (1) 底部はヘラ切りまま未調整。

坏 c (2) 体部は直立ぎみ。内外面とも横ナデ調整を施す。

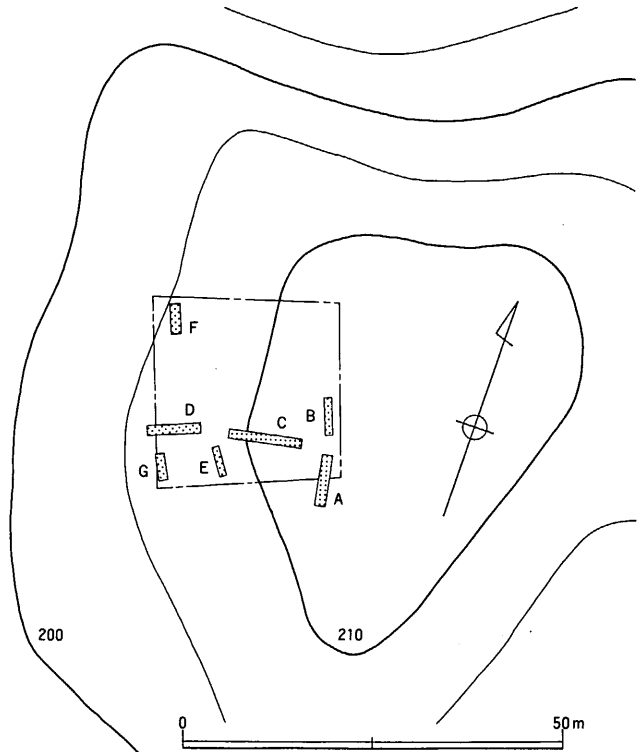


Fig. 6 第1次調査トレンチ配置図

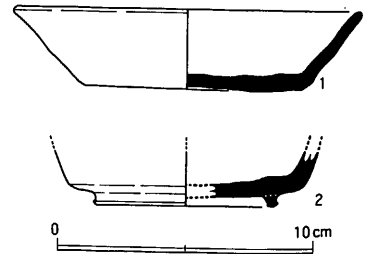


Fig. 7 第1次調査出土土器実測図

(2)第2次調査

愛岳山から西へ派生する丘陵の一つで、竈門神社下宮の後背地にあたる。立地の上からも遺構の存在する可能性が十分に窺えたため昭和61年6月13日から7月3日まで試掘調査を実施した。地番は太宰府市大字内山字本谷793-44、開発対称面積は1,658㎡である。調査は山本・緒方が担当した。

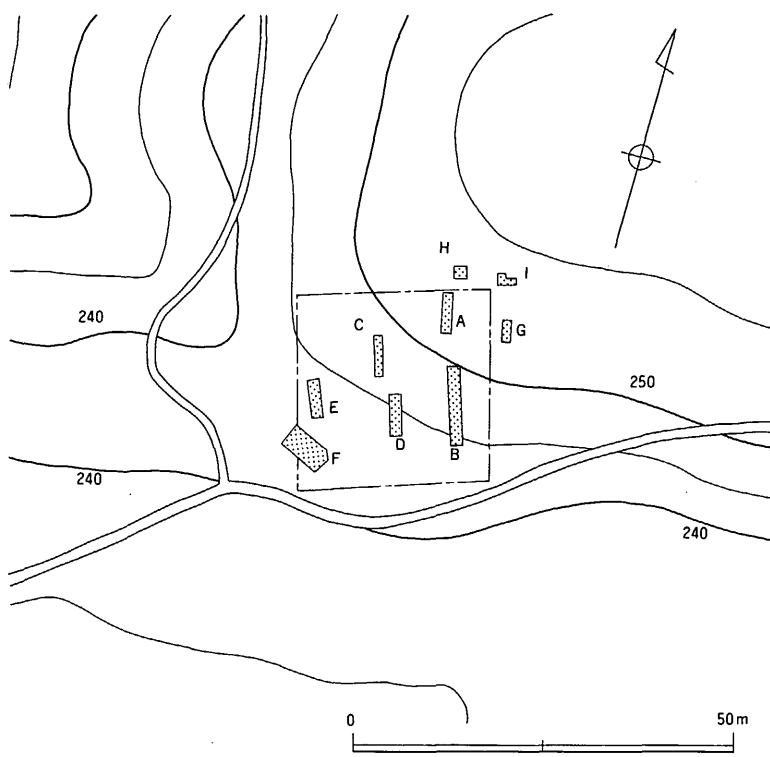
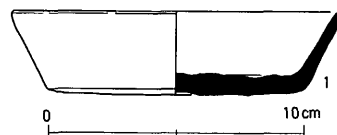


Fig. 8 第2次調査トレンチ配置図

①調査

開発予定地に9か

所のトレンチを設定し実施した。各トレンチとも表土直下で交互に堆積する状況を呈する黄灰色土があり、その下に暗茶色土、茶色土と堆積している。黄灰色土以下には若干の遺物が検出されたが、顕著な遺構は認められなかった。



②出土遺物

須恵器 (Fig. 9、付表1)

坏a (1) 底部はヘラ切後ハケ目調整される。V~Ⅵ期。Gトレンチ黄灰色土層出土。

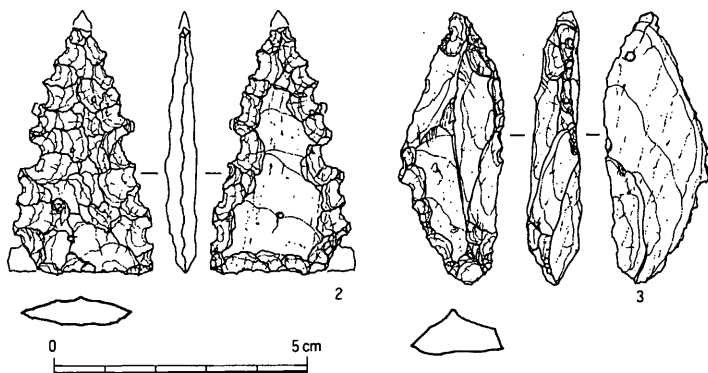


Fig. 9 第2次調査出土遺物実測図(1は1/3 2、3は2/3)

銅銭

表土層より寛永通宝が2点出土している。

金属製品

Dトレンチ暗茶色土層より鉄銭が1点出土している。直径2.5cm。銭名は錆のため不明。

石器 (Fig. 9、Pla. 14)

ナイフ形石器 (3) 安山岩の背面縦方向に稜のある横長剥片を素材とし、左右両縁辺の半分にブランディングを施している。刃部と思われる部分に明瞭な使用痕はない。A T以降の所産と思われる。法量は $5.3 \times 2.1 \times 1.1$ cm。Fトレンチ暗茶色土層出土。

石鏃 (2) やや大きめの安山岩の縦長剥片を素材とし、背面には両側縁辺より入念な剥離を施し、剥離面は縁辺部のみに加工している。刃部は鋸歯状にノッチを施す。ノッチの深い部位が刃部中位と基部近くの2箇所の左右に見られる。法量は、 $4.8 + \alpha \times 2.8 + \alpha \times 0.6$ cm。Fトレンチ黄灰色土層出土。

この形態の石鏃の類例は縄文時代前期から後期にかけて西北九州の沿岸部の遺跡に見られる組み合わせ式の石鏃の鏃頭に求められる[※]。

本例は類例中最も内陸の高地から出土しており、該期の沿岸部と内陸部との交渉を示す好例といえよう。

※山崎純男「西北九州漁撈文化の特性〔石製鏃頭（石鏃）を中心に〕」『季刊考古学』第25号1988 等に詳しい。

(3)第3次調査

竈門神社の背後で、宝満山登山道と林道が交叉する地点の一つに本谷池があり、その北側の丘陵上の一地点に調査地がある。地番は太宰府市大字内山字本谷728-8、743-4、762-3、780-24で、開発対象面積は1,381㎡、調査面積は308.1㎡である。試掘調査を含めた調査期間は昭和61年5月15日から8月12日まで、山本、狭川、緒方が担当した。

調査の結果、火葬墓1基、区画溝1基をはじめとする遺構が検出された。火葬墓は丘陵頂部の平坦地に位置するが、その平坦部の周囲は人為的に開削されたとみられる急な段落ちとなっており、丘陵下方で区画溝などの遺構が展開する地点とは比高差が約5mにもおよんでいる。なお報告にあたっては、火葬墓のある地点を上段、区画溝のある地点を下段として便宜上呼称する (Fig. 11、Pla. 1、2)。

①遺構

火葬墓

3ST001 (Fig. 10、Pla. 3)

1.08m×0.83m、深さ0.23mの不整隅丸方形の土壇で、埋土上面には0.5m×0.3mを最大とする石が配される。大きめの石の下方には栗石が若干存在し、根石的な役割をはたしたものである。現存する石の状況から当初は土壇上面の四方向に石を配したものと推定されるが、東側の石は失われている。埋土は3層から成り、中位には炭を多量に含む暗茶灰色土があり、その上に淡茶灰色土がかぶさっている。盛土の有無については確認されなかった。

土壇西側にピットが2基検出され、そのうちの北側のものは、径約0.4m、深さが0.35mで内部に小礫を詰めている。両者の関係は明確でないが、何らかの関連遺構と考えたい。また土壇の北及び北東側には比高差約0.5mの段があり、火葬墓造営に伴い地山を造成し平坦な空間を造り出すための痕跡と判断される (Fig. 11)。

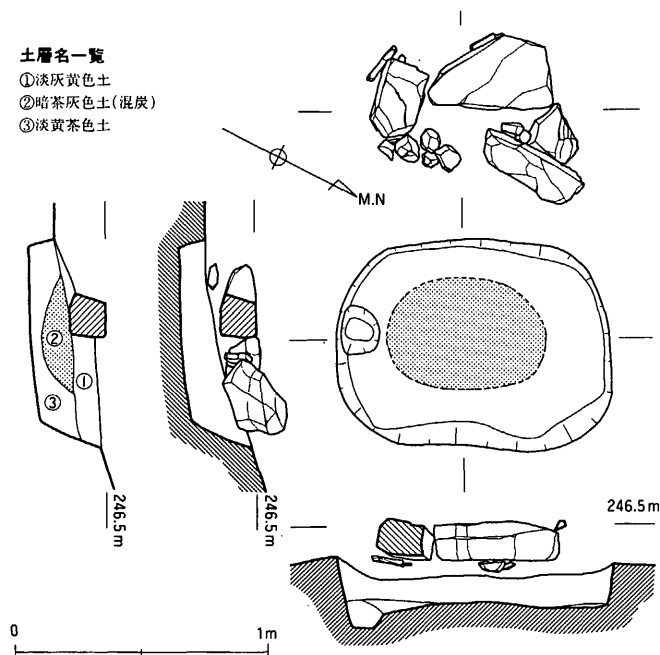


Fig. 10 3ST001実測図(1/30)

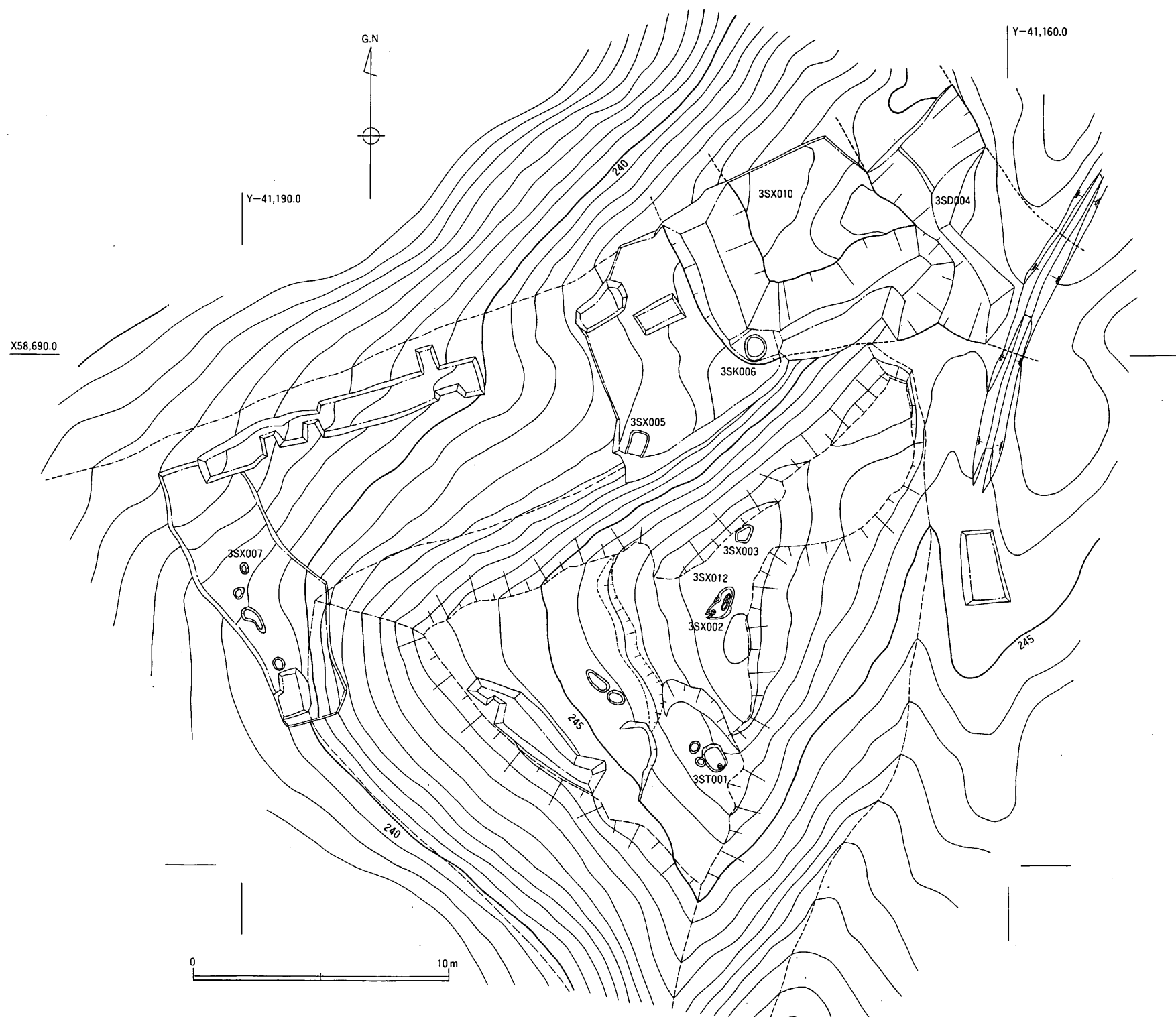


Fig. 11 第3次調査遺構配置図

遺物は、埋土中から古銭1を検出したにとどまる。

区画溝

3 S D 004 (Fig. 11、Pla. 2、4)

丘陵を南北に貫通するように通るものと、それに接続するL字形のものとの2者からなり、両者に囲まれた部分(3 S X 010)は方形台状を呈している。南北に貫通する溝は最大幅4.9m、深さ0.9m、溝底の幅0.1mの緩やかなV字形を呈している。埋土は3層から成るが、水を溜めていた形跡はない。L字形の溝は上部幅3.3m~4.0m、深さ約1.0m、溝底の幅1.0m内外で逆台形状を呈している。南北に貫通する溝との接続部で溝底は立ち上がっている。

埋土中から土師器坏、小皿が多く出土した。

方形台状遺構

3 S X 010 (Fig. 11、Pla. 2)

3 S D 004 に囲まれた方形台状を呈する遺構で、東西6m、南北5m以上、溝底との最大比高差は約1.8mである。遺構上面は凹凸が著しく地山が露出しているのみで、特に顕著な遺構は存在していない。

土塋

3 S K 006 (Fig. 12)

0.92m×0.82m、深さ0.3mの不整円形の土塋である。土塋埋土上面には石が存在するが人為的に配されたものか否か判断し得ない。埋土上位には土師器坏4点があり、うち2点はほぼ正位であった。土塋の性格は不詳。3 S D 004埋土上位から切り込んでいるが、出土した土器の型式は3 S D 004検出のものより古いタイプである。

その他の遺構

3 S X 002 (Fig. 13、Pla. 4)

1.35m×0.7m、深さ0.25m内外の土塋状を呈し、底部には深さの異なる2つのピットが穿たれる。埋土上面には多量の炭が入っていた。同様に若干炭の混じる小土塋3 S X 012を切っている。土塋及びピットの性格は不詳。

これらの主要遺構の他に炭の多く詰まる

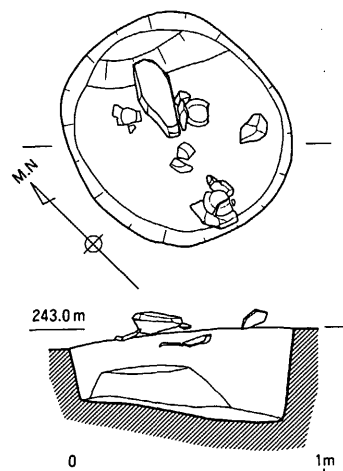


Fig. 12 3SK006実測図

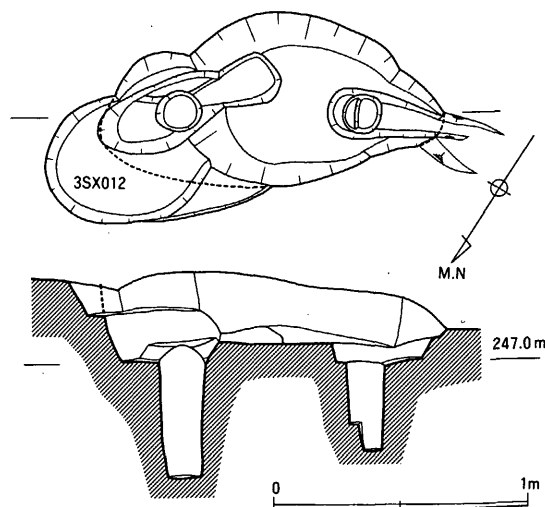


Fig. 13 3SX002実測図(1/3)

ピット 3 S X 003、3 S X 005、3 S X 007を調査区内で検出しているが、性格は不明である。

②出土遺物

3 S T 001埋土中出土土器 (Fig. 14、付表 1)

土師器

坏 a (1・2) 糸切りされる。口径は12.6~12.8cm、器高は2.2~2.9cm、底径は8.0~8.8cm。X X 型。

3 S D 004出土土器 (Fig. 14、付表 1)

土師器

小皿 a (3) 糸切りされる。口径は7.6cm、器高は1.5cm、底径は6.5cm。下層より出土。

坏 a (4・5) 糸切りされる。4の口径は12.6cm、器高は2.2cm、底径は7.8cm。下層より出土。XIX 型。5の口径は13.0cm、器高は3.0cm、底径は9.0cm。上層より出土。5の法量はXVIII~XX型のいずれかに該当するが、下層土師器がXIX型であることから、XIX・XX型に比定できる。

坏 b (6) 糸切りされる。底径は5.2cmと小さく、体部は外上方に開く。西側より出土。16 C以降のものと思われる。

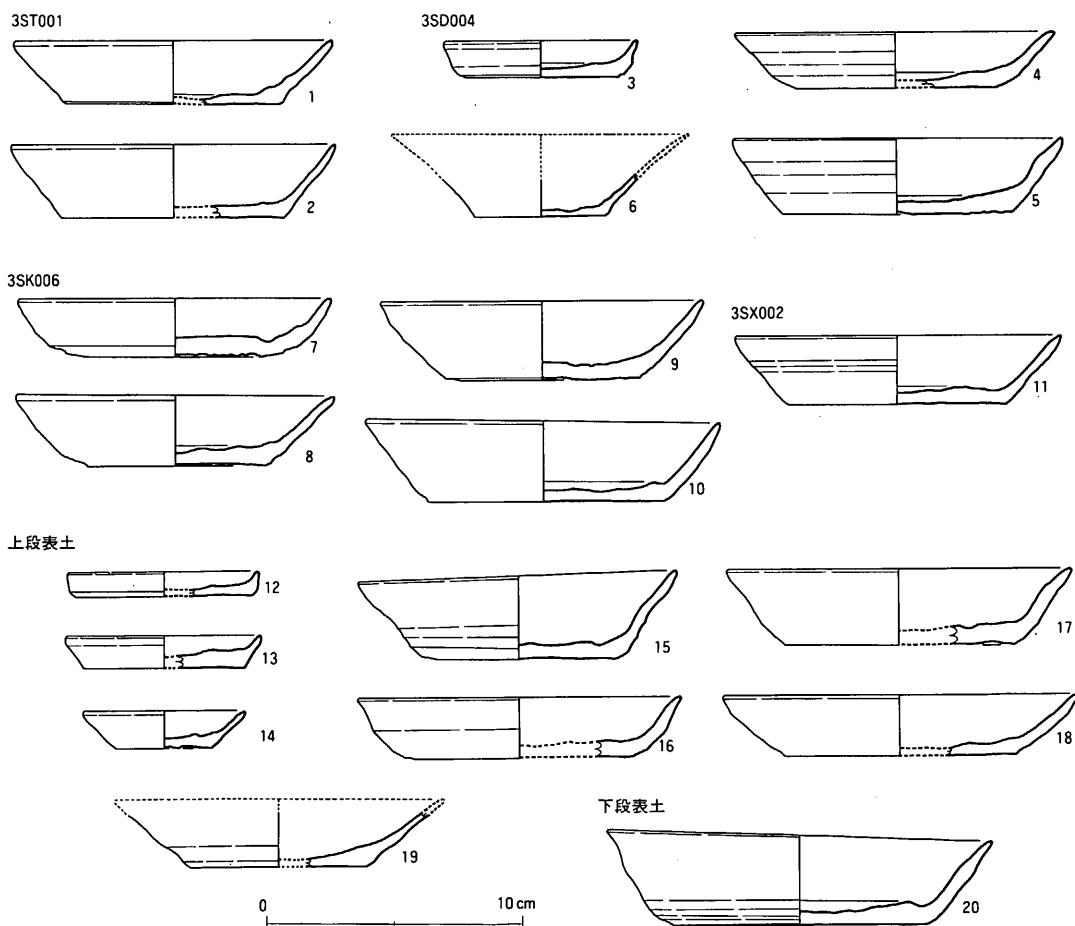


Fig. 14 第3次調査出土土器実測図

3 S K 006上層出土土器 (Fig. 14、附表 1)

土師器

坏 a (7~10) 糸切りされる。口径は12.4~14.0cm、器高は2.3~3.2cm、底径は7.0~10.0cm。XX型。

3 S X 002出土土器 (Fig. 14、附表 1)

土師器

坏 a (11) 糸切りされる。口径は12.8cm、器高は2.7cm、底径は8.6cm。XX型。

上段表土層出土土器 (Fig. 14、附表 1)

土師器

小皿 a (12・13) 糸切りされる。口径は7.6~7.8cm、器高は1.0~1.3cm、底径は6.4~7.4cm。

小皿 b (14) 糸切りされる。口径は6.4cm、器高は1.5cm、底径は3.8cm。

坏 a (15~18) 糸切りされる。口径は12.6~14.0cm、器高は2.4~3.3cm、底径は5.8~9.2cm。

坏 b (19) 糸切りされる。底径は7.0cm、体部は上方に大きく開く。

下段表土層出土土器 (Fig. 14、附表 1)

土師器

大坏 a (20) 糸切りされる。口径は15.2cm、器高は3.6cm、底径は10.2cm。XIX型前後と思われる。

銅銭 (Fig. 15)

合計4点出土している。下段の表土層から景德元宝1点(1)、熙寧元宝1点(2)。3 S D 004

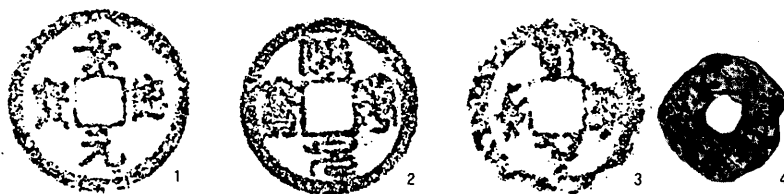


Fig. 15 第3次調査出土銅銭(1/1)

上層から元豐通宝1点(3)、また3 S T 001埋土中から1点(4)出土しているが、表面状態が悪く銭名は不明である。

③小 結

3 S T 001をはじめとする中世墓地の一面を調査したものと推量されるが、検出した遺構の大半は性格を決定し得ていない。特に3 S X 010のような方形台状遺構に墳墓との関連を求めることができるかどうかは現状では判断し得ない。ただ丘陵を分断するように検出された3 S D 004は、この調査地を含む一面とそれより東方の部分(調査区外)とを結界する要素を保有していると思われる。墓域を区画する一つの方法ではないだろうか。類例をまちたい。なお、全ての遺構の造営時期は出土遺物の傾向をみる限りXIX~XX型であり、13世紀後半から14世紀前半にその中心があると判断されるが、3 S D 004は16世紀頃までその姿をわずかながらもとどめていたようである。

(4)第4次調査

内山と北谷の集落の間地点で、現在九重原^{ここのえぼる}と称されるかなり広域にわたって平坦な一画がある。地形図の観察では丘陵頂部を人為的に造成し平坦地を造った可能性が強い。この平坦部分の現在の字は全て南谷と呼ばれる範囲に属し、中世有智山寺の北谷・南谷・内山の三山の一つが存在していた可能性の強い地域である。北谷・内山には現在も集落が存在するが、ここには一軒の家もなく全て水田を中心とする農地である。

調査地はこの平坦地の東北隅付近にあたりすぐ東には丘陵が迫っている。また大岩の露頭もみられる。試掘調査の結果、遺構・遺物の確認があったため、昭和61年8月18日から9月26日まで現地調査を実施した。地番は太宰府市大字内山字南谷214-2、218-2、同字中堂22-3・4、開発対象面積2,126㎡、調査面積499.6㎡である。調査は試掘を山本、本調査を狭川、緒方が担当した。

①調査 (Fig. 16、17、Pla. 5～7)

調査地北側は岩石の露頭のある隆起がありその上面は平坦に近い。遺構はこの岩石露頭部の裾にいくつかみられた。ここで調査区を便宜上A～Dの4区に分けて捉えてみる。岩石露頭部分をA区、岩石露頭の南西部をB区、東南側をC区、これらの地点より南側に少し離れて調査区を設けている範囲をD区と仮称しておく。

A・B区は表土を除去するとすぐに赤褐色粘土質土の地山が顔を出し、随所に岩石が顔を出している。C区は岩石露頭の裾付近ではすぐに地山が露見するが、中程から堆積土が認められる。この堆積は、水田用地造営の為に石垣を施した折のものとみられる茶黒色土が最も新しく、これの下層に地山上に堆積する暗赤褐色土、暗茶黒色土がある。遺構は、上層から切るものと、地山に直接穿たれるものがあるが全て新しい。この地区の地山は徐々にA区からD区に至る緩やかな斜面を呈してい

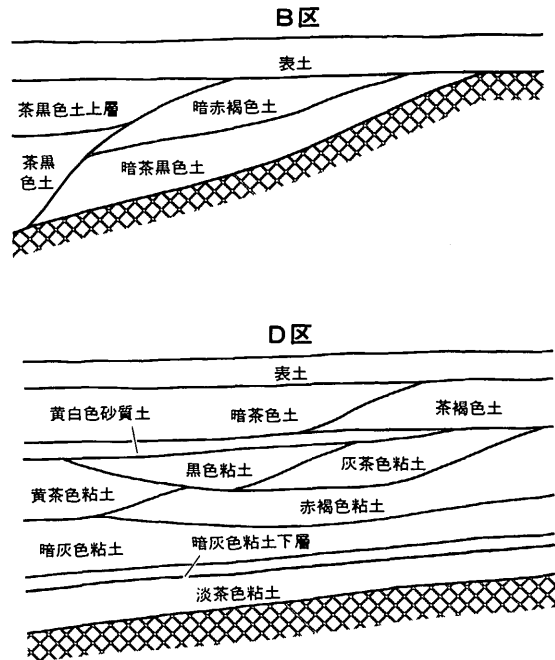


Fig. 16 第4次調査B・D区土層模式図

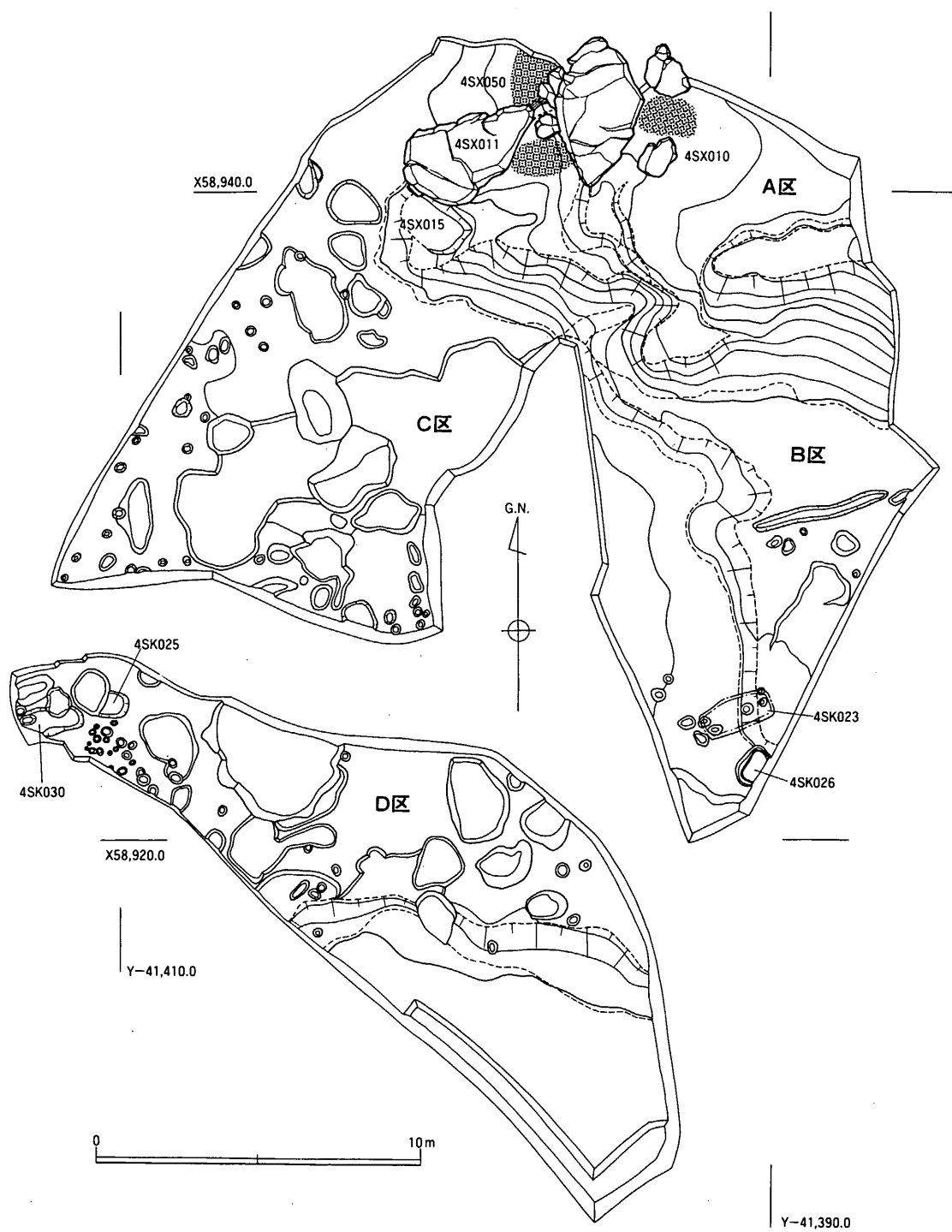


Fig. 17 第4次調査遺構配置図

る。この地山にも岩石が多く露出する。D区は、B区及びC区に近い付近で地山がすぐ露見するが、南に至るにつれ徐々に降り、その上にいく層かの堆積土がみられる。この堆積土中、暗茶色土、茶褐色土、黄白色砂質土は水田造営頃のものともみられ近現代に動かされた堆積とみられる。それ以下の黒色粘土、灰茶色粘土、黄茶色粘土、赤褐色粘土、暗灰色粘土、淡茶色粘土は古代末～中世の遺物を多く含む堆積土である。これらの堆積土の上面からは若干の遺構とみられるピットが切り込んでいたが、堆積土中やそれを除去した地山直上から切り込む遺構は、この範囲に関しては検出されていない。遺構図中にみえる大きな土壙上に図化されるものは農地耕作時に大石を動かそうとして掘り窪めたものらしい。

なお主要な遺構は大石群周辺とD区北西付近に展開する。以下、順をおって報告する。

②遺 構 (Fig. 17)

土壙

4 S K 030

D区北西隅に検出された長さ2.0m以上、幅0.9m、深さ0.15～0.2mの土壙である。土壙西隅にピットがある。また北側の一部には地山の石が被さるように露出している。

4 S K 025

4 S K 030の東に位置する小土壙で西側を失なう。現存する長さは0.8m、幅は0.7m、深さは0.1mである。

4 S K 023

B区で検出した長さ2.3m、幅1.0mの土壙である。暗茶黒色土層上面から切り込むため穿たれた時期は新しい。

4 S K 026

4 S K 023と同一面で検出された新しい土壙である。

その他の遺構

4 S X 010

A区の大石Aとその東側にある大石B・Cに囲まれた空間で、多量の遺物を検出した。検出範囲は南北・東西とも1.2m内外で、下面に人為的な掘削の形跡はない。

4 S X 011

大石A・Dに囲まれた空間部分にある遺物溜りである。下面に人為的な掘削はないが、遺物検出範囲は東西1.8m、南北0.8m内外である。

4 S X 015

大石Dの西南に位置する凹み状の遺構で、東側を一段掘り下げているが、西側は段落ちへと自然につながる。東西2.1m、南北約2.0mの範囲で捉えられる。北東隅部は大石Dの下面にも

ぐり込んでいる。

4 S X 050

大石Dの北側で段落ちの下面にある土器溜りである。明確な遺構としては捉えにくいですが、ほぼ大石Dの下から認められ北側の調査区外に広がるものとみられる。

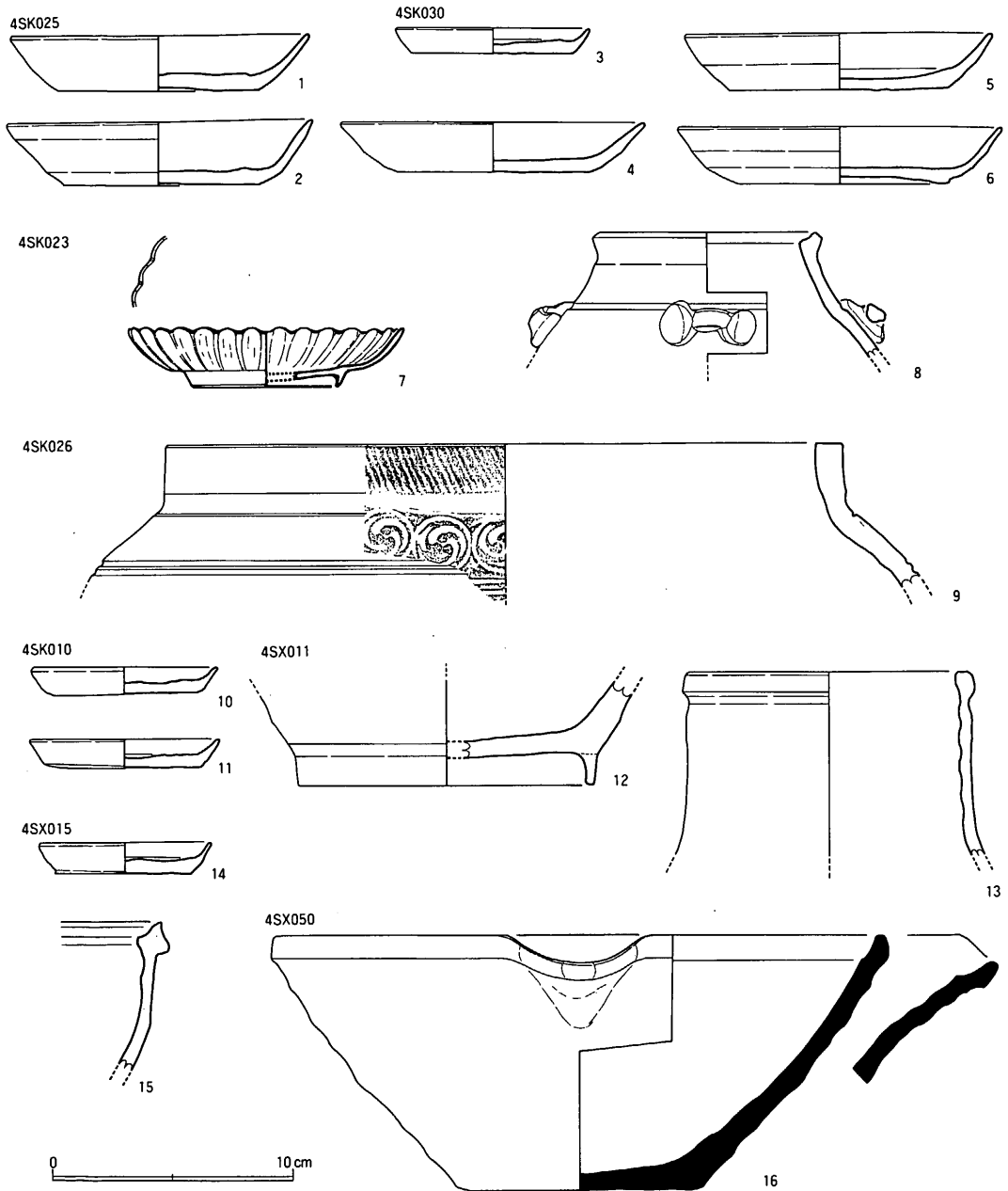


Fig. 18 第4次調査各遺構出土土器実測図

③出土遺物

4 S K 025出土土器 (Fig. 18、付表 1)

土師器

坏 a (1・2) 糸切りされる。口径は12.6～12.8cm。器高は2.7～2.8cm、底径は8.2～8.4cm。XⅦ型⁽¹⁾に属するものと思われる。

4 S K 030出土土器 (Fig. 18、付表 1)

土師器

小皿 a (3) 糸切りされる。口径は8.2～8.6cm、器高は0.9～1.1cm。底径は6.8～7.4cm。

坏 a (4～6) 糸切りされる。口径は12.2～13.6cm、器高は2.1～2.4cm、底径は8.0～9.4cm。XⅦ～XⅨ型と思われる。

4 S K 023出土土器 (Fig. 18、Pla. 14、付表 1)

白磁

皿 (7) 胎土は白色で混入物はなく、きわめて硬質に焼成される。釉は灰青色味をおびた白色を呈する。全面施釉後高台畳付の釉を掻き取る。器壁は薄い。口縁部は細かく輪花を入れ、体部は外面からヘラ状の押圧縦線を入れ、菊花状につくる。

陶器

四耳壺 (8) V類。

4 S K 026出土土器 (Fig. 18)

瓦質土器

鉢 (9) 垂直な口縁部と球形状の体部から成る。口縁部外面はハケ目調整後軽い横ナデが施される。肩部には上位に一条の沈線、下位に二条の沈線が施され、その間に巴文のスタンプがある。内面は横ナデされる。

4 S X 010出土遺物 (Fig. 18、Pla. 20、付表 1)

土師器

小皿 a (10・11) すべて糸切りされる。口径は7.0～9.0cm、器高は0.8～1.3cm、底径は5.0～7.8cm。14C⁽²⁾前後。

金属製品

Pla. 20-f は鉄製の小型鐘状のもので、下方に開く。錆のため明確ではないが、天井部の内面からピン状（断面長方形）のものをさし込んで、それを環状に曲げて吊り手としている。下端部は欠損している。現存高は6.5cm。天井部径は2.0cm。体部の厚さは0.3cm。吊り手の径は1.2×1.0cm。断面の厚さは0.2cm。

4 S X 011出土土器 (Fig. 18、Pla. 14)

陶器

碗 (12) 国産の灰釉山茶碗と思われる。ほとんど灰釉はない。胎土は粗砂と白色粒子を多く含む。

水注 (13) V 1 類⁽³⁾。

4 S X 015出土土器 (Fig. 18、Pla. 14、付表 1)

土師器

小皿 a (14) 糸切りされる。口径は7.2cm。器高は1.3cm。底径は5.7cm。XⅧ～XⅩ型。

陶器

盤 (15) I 2 類。

4 S X 050出土土器 (Fig. 18、付表 1)

須恵質土器

鉢 (16) 東播系の片口。焼成が悪く、黄灰色を呈し軟質である。内面の口縁部下に浅い段がつく。

茶黒色土上層出土土器 (Fig. 19、Pla. 15)

龍泉窯系青磁

碗 (1) I 6 b 類。

青花

皿 (2) 小野 B 群⁽⁴⁾に分類される。全面施釉後、高台畳付の釉を掻き取る。口縁は端反り。外面の文様は、口縁部に一条の圈線、体部に唐草文、高台部に二条の圈線が施される。内面には一条の圈線、見こみに二条の圈線が施され、圈線内には文様の一部がある。この部分は文字の可能性はある。

Pla 15-a は小野 B 群の碗。胎土は白色で、内外面にわずかに青みをおびた釉がかかる。口縁部は端反り。口縁部内面に四方禪文、体部外面上位に一条の圈線、その下に花文を施す。Pla 15-b・c は小野 C 群の碗か皿であろう。b の胎土は白色で、内外面にわずかに青みをおびた釉がかかる。口縁部内面に一条の圈線、外面に波濤文(?)がある。c は b と同様な胎土、釉調で、内面見こみには二条の圈線があり、その内部にも文様がある。体部外面には芭蕉葉文がある。d は小野 B 群の体部で Pla 15-a と同一のものと思われる。

暗赤褐色土層出土土器 (Fig. 19、Pla. 15、付表 1)

白磁

皿 (3) 森田 E 類⁽⁵⁾。胎土は灰白色で、混入物なく堅緻である。釉は青みをおびる白色を呈し、高台部外面付近まで施釉される。器壁は厚い。口縁部は若干内湾し、輪花を細かく入れる。体部内外面には片彫り縦線を入れ菊花状にする。

暗茶黒色土層出土土器 (Fig. 19、Pla. 16・17、付表 1)

土師器

小皿 a (4～6) 糸切りされる。口径は7.0～10.0cm、器高は0.8～1.2cm、底径は5.2～8.4cm。

小皿 c (7) 底部切り離しは横ナデ調整のため不明だが糸切りと思われる。口径は8.6cm、器高は2.9cm、底径は6.6cm。

坏 a (8・9) 糸切りされる。口径は11.8～14.6cm、器高は2.2～2.4cm、底径は7.4～9.4cm。

瓦質土器

鉢 Pla. 16-a は口縁部の一部からみると大型のものと思われる。胎土は砂粒を含み粗い。口縁部を波形につくり、その間に菊花文のスタンプがある。

白磁

碗 (10) VII類。高台部見こみに「+」の墨書がある。

小壺 (11) 胎土は灰白色で、細かい白色粒子や、黒色粒子を含む。釉は灰色味の白色で全体に貫入が入り、体部外面は下半まで施釉される。内面は施釉されない。体部外面は7区分に復

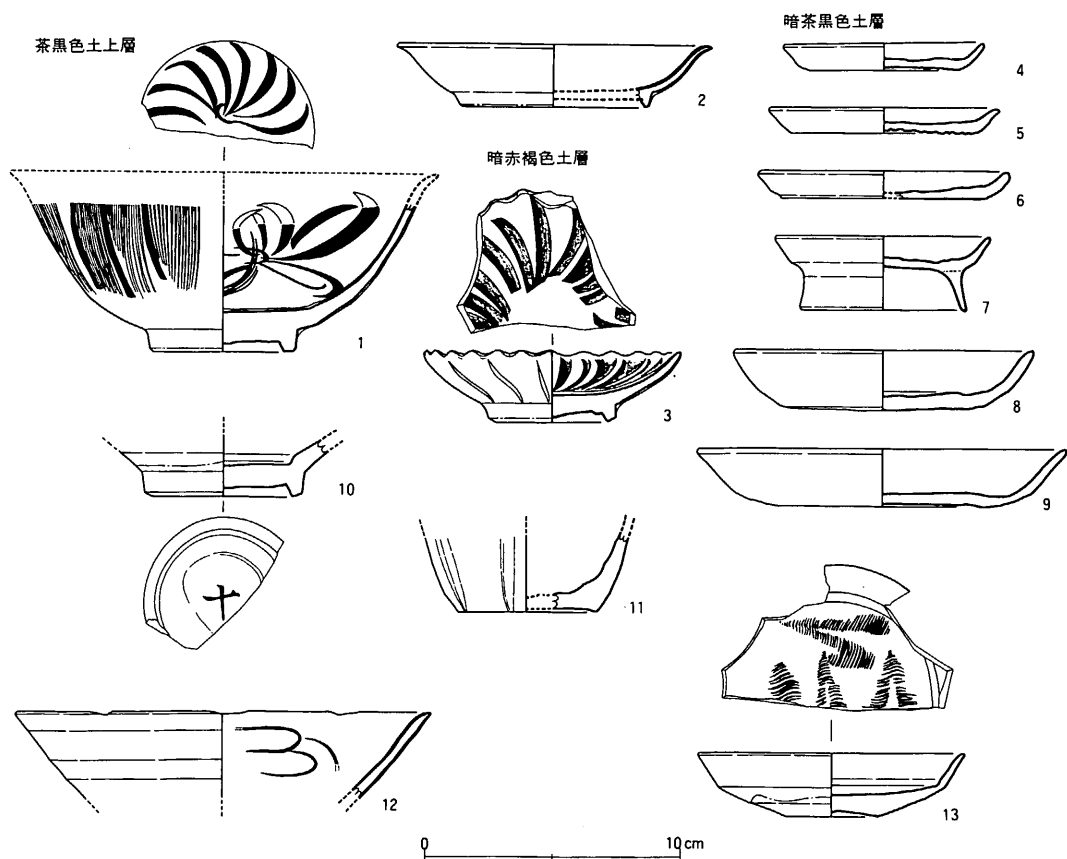


Fig. 19 第4次調査各層出土土器実測図(I)

原されるヘラの押圧縦線がある。胎土・釉調から碗Ⅱ類と同一群と思われる。

碗 (12) の胎土は、灰白色で混入物はなく硬質である。釉は灰緑色味をおび、透明で全体に細かい貫入が入る。体部は直に開く。口縁部には輪花がある。体部内面は細い工具で施文される。器形は白磁のⅦ類に似るが、釉はむしろ青磁的である。

同安窯系青磁

皿 (13) I 1 b 類。

陶器

小碗 Pla. 17-a は黒釉の小碗。胎土は灰色で細かい白色粒子を含む。釉は厚く施釉される。口縁部は若干外反し、体部上位は屈曲する。

水柱 Pla. 17-b はⅤ類の底部。

その他、龍泉窯系青磁碗、白磁碗、近世陶器のすり鉢、大正以降にしかみられない文様をプリントする伊万里焼、鉄製鋤先が出土している。

暗茶色土層出土土器 (Fig. 21、Pla. 17、付表 1)

高麗青磁

碗 (1) I 2 a 類⁽⁶⁾。胎土は淡灰色で白色粒子がわずかに入る。釉は半透明の黄緑色で、口縁部は黄濁化している。全体に細かい貫入が入る。全面施釉後高台畳付は掻きとりされ、赤灰色の発色をなす。畳付には目跡を有し、目跡の周囲は赤紫色に発色する。体部はストレートに外上方にのびる。

黄白色砂質土層出土遺物

金銅製菩薩立像 (Fig. 20、巻頭図版 4)

第Ⅳ章 2 参照

黒色粘土層出土土器 (Fig. 21、付表 1・2)

土師器

小皿 a (2~4) 2~4 は糸切りされる。口径は9.2~10.8cm、器高は0.9~1.2cm、底径は7.0~9.0cm。ⅩⅢ~ⅩⅤ型と思われる。他に、若干ヘラ切りのものもある。

坏 a (5・6) 糸切りされる。5 の口径は15.2cm、器高は2.7cm、底径は8.7cm。ⅩⅤ型。
6 の口径は14.6cm、器高は2.1cm、底径は10.6cm。ⅩⅥ型。

灰茶色粘土層出土遺物 (Fig. 21、Pla. 17、付表 1・2)

土師器

小皿 a (7~9) 7・8 は糸切りされる。9 は磨滅のため切り離しは不明。口径は8.7~11.8cm、器高は1.2~2.1cm、底径は6.0~9.0cm。7・8 はⅩⅢ~ⅩⅥ型と思われる。他にヘラ切りのものもある。

坏 a (10) 10 は糸切りされる。口径は15.0~16.6cm、器高は2.2~3.2cm、底径は11.2~

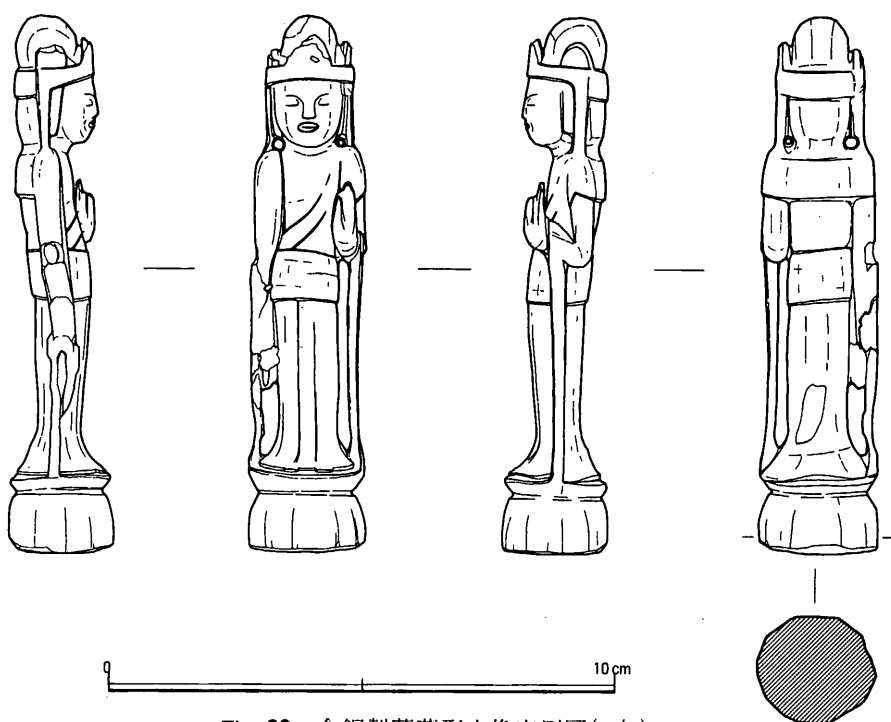


Fig. 20 金銅製菩薩形立像実測図(2/3)

12.0cm。10はXIII～XV型と思われる。他にヘラ切りのものもある。

白磁

皿 (11) VIII 1 類。

石製品 (Fig. 21、Pla. 18)

円形硯 (12) 脚部は本来高いものと思われるが破損したためか、割れ口を横方向に平滑に磨った後、推定4ヶ所に、縦方向に若干凸状に磨って2次加工している。海部から外面にかけては横方向の擦痕（加工痕）がある。外底部にも墨痕らしきものが付着しており、裏面も使用された可能性がある。

黄茶色粘土層出土土器 (Fig. 21、Pla. 18、付表1・2)

土師器

小皿 a (13・14) 13・14はヘラ切りされる。口径は8.2～9.0cm、器高は0.7～1.1cm、底径は6.2～7.6cm。他に糸切りのものもある。

坏 a (15) 15はヘラ切りされる。口径は15.6cm、器高は2.7cm、底径は10.6cm。他に糸切りのものもある。

丸坏 a (16) ヘラ切りされる。体部外面は横ナデ、内面はミガキ b が施される。口径は14.8cm、器高は2.8cm、XII B～XIV型。

白磁

碗 (17) VIII 2 類。

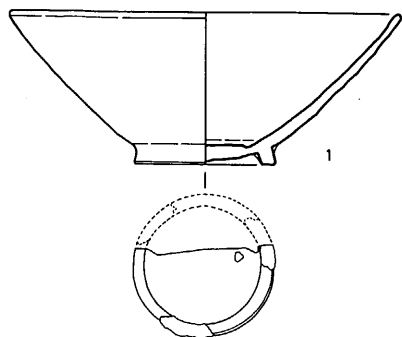
赤褐色粘土層出土土器 (Fig. 21)

白磁

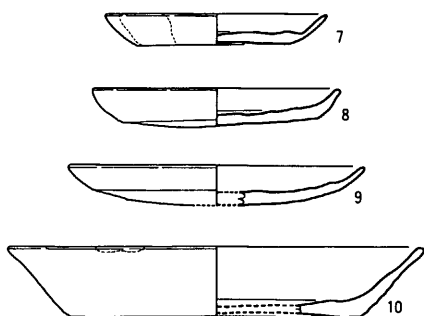
皿 (18) VI 1 a 類。

暗灰色粘土層出土土器 (Fig. 22、Pla. 18・19、附表 1・2)

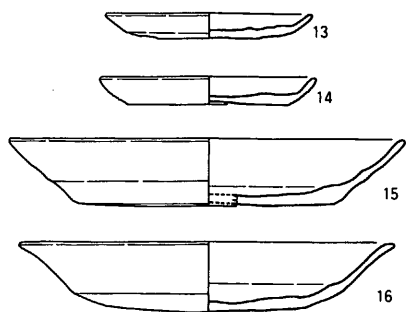
暗茶色土層



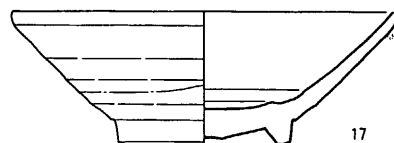
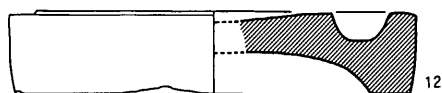
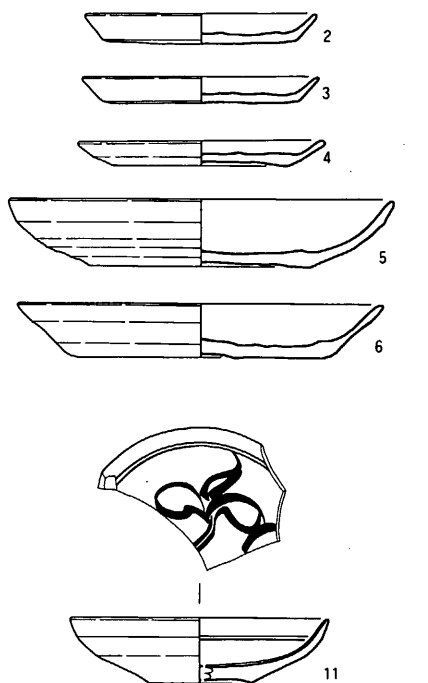
灰茶色粘土層



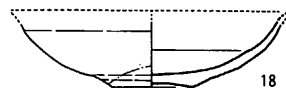
黄茶色粘土層



黑色粘土層



赤褐色粘土層



0 10 cm

Fig. 21 第 4 次調査各層出土遺物実測図(II)

土師器

小皿 a (1~3) ヘラ切りされる。口径は8.4~11.8cm、器高は0.8~1.3cm、底径は6.4~9.2cm、他に糸切りのものが少数ある。全体ではⅩⅡ~ⅩⅢ型のものと思われる。

小碗 c (4) 磨滅のため切り離し、および調整不明。高台は断面三角形を呈し、底部外縁よりやや内側につけられる。口縁部は若干内湾する。口径は9.4cm、器高は2.9cm、底径は5.6cm。

瓦器

(5)は焼成不良の瓦器、小形無高台坏ないし皿の可能性ある。内面にミガキcの痕跡がある。底部切り離しは不明。

瓦質土器

Pla. 18-a は甕か壺の破片であろう。体部外面は平行叩き後、丁寧に叩きを消している。体部内面は弧状の叩きのあと部分的に叩きを消している。底部内面は横ナデされる。体部外面に三条の突帯文を貼りつけた破片がある。

白磁

皿 (6) VI 1 b 類。

高麗青磁

碗 (7) II 1 類。胎土は淡灰色で、白色粒子、黒色粒子が若干含まれ、やや砂味をおびる。釉は青緑色で半透明。全体に貫入が入る。全面に厚く施釉した後、畳付の釉を掻き取る。畳付は赤茶色に発色する。内面の見こみは一段凹む。体部外面は蓮弁文を施す。蓮弁は、弁と弁の間に1本、弁の中に2本の幅広い縦の陰刻を施し、弁を浮き立たせている。

陶器

水柱 (8) Ⅹ類⁽⁷⁾。胎土は暗灰色で、白色粒子、黒色粒子を多く含み粗い。特に白色粒子が目立つ。無釉で、器面は灰色に発色する。器壁の表面は直径1mm程度の凹みが多く、ざらざらしている。底部外面から体部下位まではヘラ削りされる。体部外面の大半は横ナデ調整と思われる。内面は横ナデ調整、内面には乳黄白色の付着物(径3cm程)がある。

(9)は甕Ⅳ類の底部と思われる。

他に、最新のものとして、唐津か李朝の瓶子が1片、高台部畳付の釉を掻き取る青磁1片が出土している。

暗灰色粘土下層出土土器 (Fig. 22、Pla. 19、付表1・2)

土師器

小皿 a (10) ヘラ切りされる。口径は9.2~9.6cm、器高は1.0~1.2cm、底径は7.0~7.4cm。

丸坏 a (11) ヘラ切りされる。口径は14.6cm、器高は3.0cm。

白磁

皿 (12) II 類。

その他、龍泉窯系青磁碗Ⅰ5b、緑釉の盤が出土している。

表土層出土土器 (Fig. 22、Pla. 19・20、附表1・2)

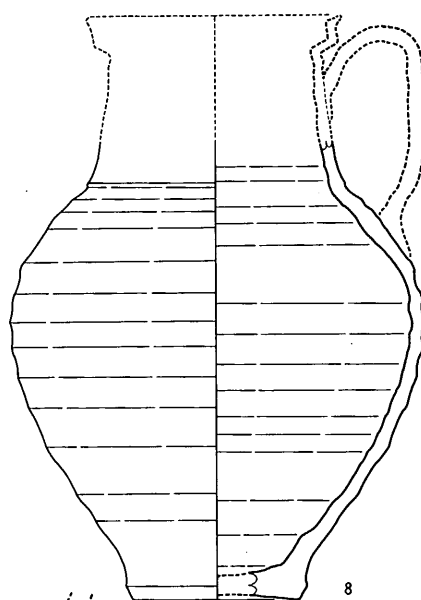
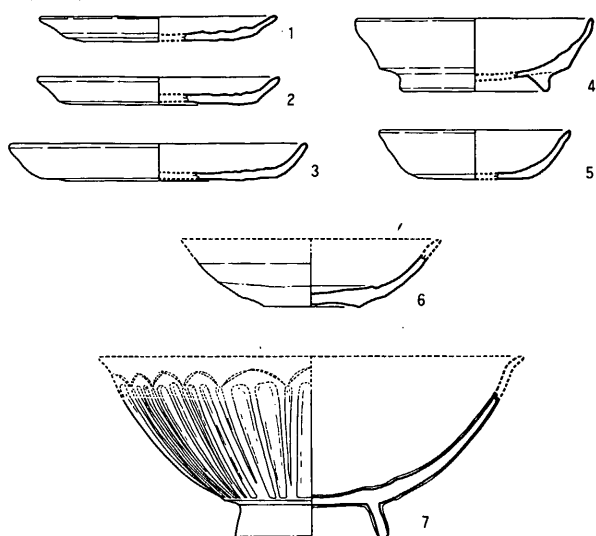
白磁

皿 (13) 胎土はやや灰色味をおびる白色で細かい黑色粒子を若干含む。釉色は青灰色味をおびた白色で不透明。Ⅸ類に似る。釉は体部下半まで厚めに施釉される。厚さにむらがある。内面見こみには段がつく。

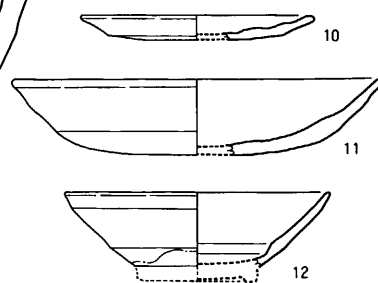
青花

以下にあげるのはすべて明代のものと思われる。

暗灰色粘土層



暗灰色粘土下層



表土



0 10 cm

Fig. 22 第4次調査各層出土遺物実測図(Ⅲ)

Pla. 20-a の胎土は白色で内外面に灰青色味の釉がかけられる。口縁部内面には四方櫛文、外面には梅月文 (?) が描かれる。直口縁をなす。Pla. 20-b ~ e は Pla. 20-a と同じ胎土、釉調をもつ。d は内外面に細かい貫入が入る。b は口縁部内外面に二条の圈線が入り、外面の圈線の下には文様がある。c は口縁部内面に一条の圈線があり、その下に文様がある。外面にも文様がある。d は体部片である。内面に一条の圈線を描き、その上に文様がある。外面は唐草文と思われる。e は体部の破片である。破片の範囲では外面に文様はなく、内面に花文状のものがある。

④小 結

遺構と層位の年代

層位と遺物を検討すると次のような年代観が得られる。

まず、発掘区域の最下層である淡茶色粘土層の出土遺物は少なく決め手を欠くが、土師器に糸切りのものや、白磁皿の XI 類と思われるものがあり、12c 前半に推定されえる。次にその上層の暗灰色粘土下層の土師器は、XIII ~ XIV 型で、12c 前半 ~ 中葉に比定可能であるが、龍泉窯系青磁碗 I 5 b や、緑釉陶器の盤は土師器よりも新しい 13c 代を示す。暗灰色粘土層は新しい陶磁器を含むが上層からの混入の可能性もある。これらのものを除外すると、暗灰色粘土層から黒色粘土層の土師器は、XIII ~ XIV 型で、陶磁器も暗灰色粘土下層より新しい傾向はみられず、13c 以降の推積と考えられる。

4 S K 030 の土師器は XVIII ~ XIX 型と考えられ、13c 後半 ~ 14c 初の遺構である。次に 4 S X 010 の土師器は XVIII ~ XIX 型に限定でき、共伴の常滑の甕からみても 14c 前後の遺構と推定される。

その他、暗茶色土層、茶褐色土層は 14c 前後のものが多いが、近世の陶磁器を含む。上段最下層の暗茶黒色土層には近代のものまで含まれる。その上層の暗赤褐色土層、茶黒色土層、茶黒色土上層は、近代以降の推積層であるし、暗茶黒色土層で検出された 4 S K 023、4 S K 026 は近代のものである。

調査地の検討

第 4 次調査地点は、南谷の台地のほぼ東北隅の一角にあたる。この南谷の地を含めた山麓の歴史についてはいくらかの記録や伝承があり、その一端を知ることができた。以下にその概略を記してみる⁽⁸⁾。

宝満山一帯にあった大山寺(竈門山寺)は、平安時代末頃には完全に宮寺化していたとみられ、衆徒神人は南谷・北谷・内山に居住していた。これらの名称は単に「村」という集合体ではなく、僧坊集団を含めての宗教的意味を多く含んだ名称であると考えられている。これらの坊は衆徒方 300 坊、行者方 70 坊の計 370 坊にも及んだと言われる。

大山寺の活動の活発化は承平3年(933)證覚が宝塔を造立したあたりからみられ、長保5年(1003)の頃には、両部大法を授ける程の学僧を抱えていたようである。こうした隆盛の中大山寺が天台末寺であったところから内山には学侶坊、南谷・北谷には各々戒行坊、布教坊があったものと推定され、これらが中世の或る時に解体して伝承されるような衆徒方、行者方の2つの組織ができていったものと考えられている。

中世に至っても山岳修験の活動は活発で現存する文保2年(1318)造立の磨崖板碑銘にみえる「法眼幸栄十六度」は南谷妙心坊の住侶幸栄が十六度の入峰を記念して造立したものと推定されている。

しかし、鎌倉末期頃には大山寺衆徒が闘争を続けると共に、14世紀中頃には寺の名の代わりに有智山城の名称が一般化している。おそらくこの頃に現存する空堀が作られたものとみられる。その後、延元元年(1336)には有智山寺は戦乱により決定的な破壊を受け衰退の一途をたどることになる。宗教的法灯を示すものも少なくなり、往時の勢いは消えたようになってしまう。さらに弘治3年(1557)には大友義鎮の検地が行なわれ、内山・南谷・北谷・中堂の四ヶ所の寺院僧坊に課税し堂社を破壊し、その地を田と改変していたようであり、僧等も永禄元年(1558)には山上に登り山麓付近には坊はなくなったと伝えられる。その後は近世に至り様々な復興を遂げるが、全て山中においてのこととみられ、山麓のなかでも南谷周辺はあまり復興されなかったようである。

こうした歴史の流れの中に、今回の調査の所見をあてはめてみると、丘陵を改変した時期が淡茶色粘土層の示す12世紀前半以前に求められ、大山寺が最も活発な活動をしているころにあたる。その後の堆積層の示す時期(13世紀代)もやはり南谷を含めた一帯が山麓における衆徒活動の舞台でもあった。遺跡は14世紀に至ってもなく一端途絶え、近代の水田造営まで再び整地は実施されていない。これらの所見からみると所謂南北朝期頃のこの地にはすでに生活の息遣いは窺えない。

調査区が南谷の平坦地の最深部にあたり、且つ調査区の面積が狭いところから、にわかには判断されないが、今次の調査結果は宝満山に残されたいくつかの史料の語るところに近い所見を得ることができたものとみられ、今後の調査の重要性を窺わせるものとなったと言えよう。

金銅製菩薩立像の出土

出土状況は近世以降と考えられる堆積土中に包含された形であり、特に意義あるものとすることはできないが、宝満山麓において検出されたということではこの仏像の存在する意義は大きいと思われる。

宝満山は古代末頃から山岳修験の場として活発な動きを示しているが、他の山岳修験信仰の場をみると、やはり金銅仏の存在が目につくのである。

例えば、奈良県大峯山寺の金峯山頂出土の蔵王権現立像は著名であり、石川県林西寺蔵の十

一面観音立像は白山妙理大権現の本地仏として造像されている⁽⁹⁾。同じ白山の転法輪窟からも十一面観音像が発見されている⁽¹⁰⁾。これらは修験信仰に伴う本地仏であることが多く、平安時代後半頃の作とされる金銅仏が多い。

次に本像が経塚造営に伴うものであった可能性も推定し得る。第Ⅰ章にも記したとおり宝満山から過去に経塚が多数発見されているだけでなく、仏像を共伴している例も知られている。宝満山以外でも伯耆一宮経塚からは観音菩薩立像、千手観音菩薩立像が伴出し、鞍馬寺経塚からは三尊仏や宝塔、那智経塚は菩薩半跏像をはじめとする多くの仏像が伴出している⁽⁹⁾。経塚伴出の仏像の中には経塚造営よりも遙かに古いと推定されるものもあり、本像が白鳳期と推定されるとは言え、宝満山の一つの経塚に伴っていた可能性は充分に考え得るところである。今回の菩薩立像がこの地に埋没するまでの経緯は分からないが、南谷の地が造成される以前にはこの付近に経塚が存在していた可能性も考えておかねばならないと思う。

註

- (1)山本信夫 「太宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』1988（日本中世土器研究会）
- (2)c は Century（世紀）の略。以下同様に使用。
- (3)『条坊Ⅱ』、『条坊Ⅲ』を参照。
- (4)小野正敏 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No. 2』1982（日本貿易陶磁研究会）
- (5)森田勉 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 No. 2』1982（日本貿易陶磁研究会）
- (6)山本信夫 「日本における初期高麗青磁について」『貿易陶磁研究 No. 5』1985（日本貿易陶磁研究会）
- (7)『条坊Ⅱ・Ⅲ』以降に分類したもので分類番号を追加する。
- (8)中野播能『筑前国宝満山信仰史の研究』1980（太宰府天満宮文化研究所）を参考として記している。
- (9)鷲塚泰光「金銅仏」『日本の美術』251号 1987（至文堂）
- (10)青木豊他『白山山頂学術調査報告』1988（國學院大學考古学史料館白山山頂学術調査団）

(5)第5次調査

第4次調査を実施した通称九重原^{このえぼる}の台地から谷を一つ隔てた丘陵の一部で、この付近では最も高い地点に調査地がある。

地番は太宰府市大字太宰府字冷林^{ひえべす}268-273で、開発対象面積1859m²、調査面積が173.9m²である。試掘調査をふくめた調査期間は昭和61年6月10日から7月30日までで、山本、狭川、緒方が担当した。

①調査 (Fig. 23、Pla. 8)

調査の結果、火葬施設とみられる焼土壙3基、土壙(墓)1基他を検出した。これらの遺構は丘陵頂部を避けるように頂部からやや降った海拔208.0m付近に集中して検出されている。また、第6次調査地に至る山道の拡幅工事に際して切り通し断面に火葬土壙3基を発見し、保存し得ない2基について調査した。これらも第5次調査として扱い、ここで報告する。

②遺構

火葬土壙 (Fig. 24、Pla. 9)

5ST001

長さ1.00m、幅0.75m、深さ0.33m内外の不整円形土壙である。埋土は2層から成り下層は多量の炭や灰で形成されている。壁は土壙の東壁と南壁に焼痕を遺している。焼痕は土壙中位以上にのみ認められ、下半及び底部にはない。

5ST003

長さ1.17m、幅0.75m、深さ0.2m内外の不整隅丸方形土壙である。土壙西側の一部は土砂の流出で失われている。埋土は2層から成り下層は炭・灰の堆積層である。焼壁は土壙の東側から南側にかけて遺存していた。焼痕は土壙中位以上にみられ、下半及び底部には存在しない。

5ST006

長さ1.17m、幅0.95m、深さ0.3mの不整隅丸方形土壙である。埋土は3層から成り、最下層は炭・灰の堆積層であり、中層にも若干の炭が混入している。基本的には他の火葬土壙と変わりはない。焼壁は土壙東壁に遺存しているが、大半が剥落している。焼壁は一部土壙下位に達しているが、底部には認められない。

5ST009

上面を道路拡幅時に削られている。長さ1.19m、幅0.85m、深さ0.18m内外の不整形土壙である。埋土は2層から成り、下層は炭・灰の堆積層である。焼壁は東壁と西壁に認められるが、

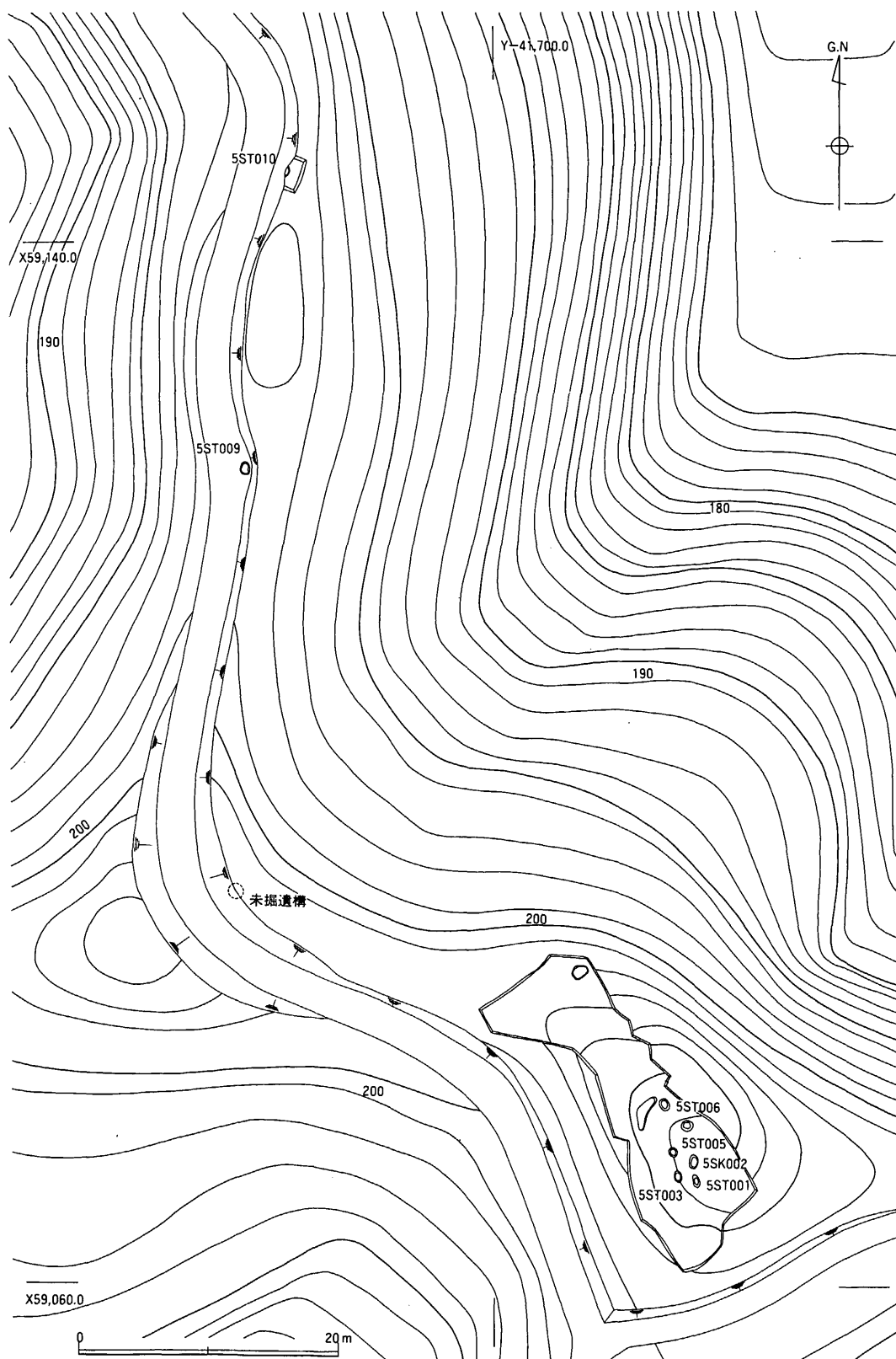


Fig. 23 第5次調査遺構配置図

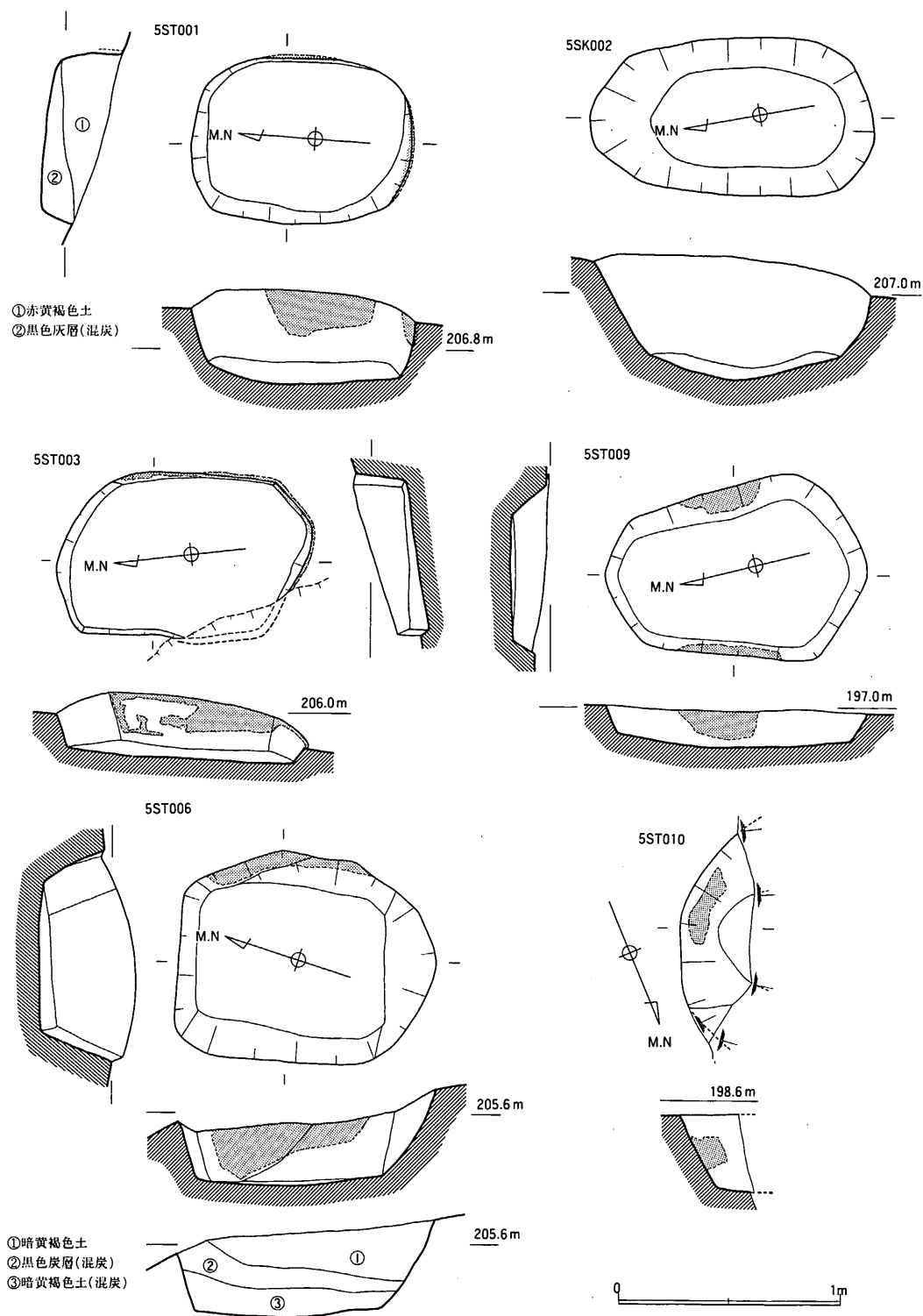


Fig. 24 第5次調査検出遺構実測図

下位及び底部には至っていない。壁面は黄褐色を呈している。

5 S T 010

道路拡幅時に大半を削り取られており、現存する法量は、長さ0.8m、幅0.4m、深さ0.3mである。焼壁は東壁の一部に遺存している。壁面は黄褐色を呈している。

土壇 (Fig. 24、Pla. 9)

5 S K 002

長さ1.28m、幅0.72m、深さ0.5m内外の不整長円形を呈する土壇である。立地から土壇墓ではないかと推定されるが、決定する要素を欠いている。壁は火葬土壇と異なり傾斜は緩やかで、底部も中央がやや深く窪んでいる。埋土中に炭・灰の混入はなく、焼壁も認められない。

③出土遺物

全ての遺構中から遺物の検出はなく、表土中に若干の土師器片を検出するにとどまる。

表土層出土土器 (Fig. 25、付表1)

土師器

坏a 糸切りされる。口径12.4cm、器高2.7cm、底径7.8cm。X IX型。

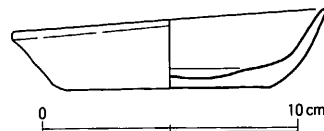


Fig. 25 第5次調査出土土器実測図

④小 結

丘陵頂部に火葬土壇の発見される可能性が少ないことは他の諸遺跡と同様であり、この事実はいくつかの火葬土壇あるいは墳墓の遷地を考える上で重要と言える。また火葬土壇群に混じって土壇墓的な遺構が発見されることもまた諸遺跡の例に等しい。こうした葬送の場の有り方は篠振遺跡の報告書の中で述べたように、墳丘状隆起の存在が場の選定の鍵となっているようである。このことからすると同一の尾根上にいくつかの隆起を観察することのできるこの第5次調査地点周辺は、こうした葬送の場として最適の位置にあったものと理解される。道路拡幅によって発見された3基の火葬土壇もこうした群を形成し、地形図上にもみられる墳丘状隆起をとりまいていたものの一つではなかったであろうか。今後の調査の課題でもある。

(6)第6次調査

第5次調査地点から現在の国土館大学グラウンドの北に続く尾根の一地点である。開発地は尾根線から北へわずかに傾斜を降った所までである。地番は、太宰府市大字太宰府字冷^{ひよ}林^{べす}268-272。開発対象面積は1,418m²、調査期間は昭和61年6月5日から11日までである。調査は、山本が担当した。

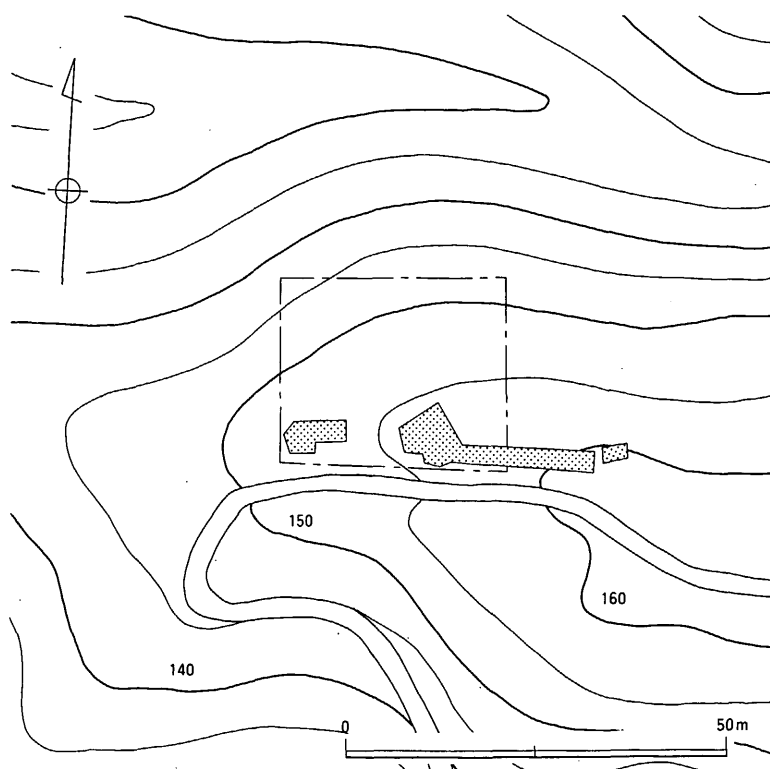


Fig. 26 第6次調査トレンチ配置図

①調査 (Fig. 26)

調査地は北側斜面がかなり急であるところから試掘トレンチを尾根筋にしたがって2ヶ所に設定した。表土中から若干の遺物を検出した他は遺構の発見はなかった。

②出土遺物

表土層出土土器 (Fig. 27、付表1)

土師器

碗c (1) 底部外面から体部上位までヘラ削りされる。高台付近は高台貼り付け後横ナデされる。

体部外面上位から内面にかけては磨滅のため不明瞭だがミガキが施されていると思われる。口径は18.4cm、器高は6.0cm、底径は11.0cm。

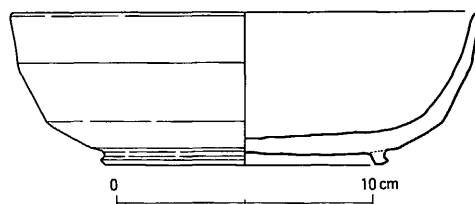


Fig. 27 第6次調査出土土器実測図

(7)第7次調査

第1次調査地点と鉄塔 No. 26地点の中間に位置し、鉄塔建設用の索道基地建造に伴う調査である。調査地は愛岳山から西へ派生する支丘の一つで、周辺の地形と比べて調査地一帯は緩やかな斜面を呈し、且つ丘陵上の幅がかなり広い。一部には平坦部も観察され遺構の存在することは確実と思われた。

調査の結果、火葬土壙10基をはじめとする土壙、ピット等が検出された。調査は昭和61年11月13日から12月2日まで実施し、狭川が担当した。地番は太宰府市大字内山字ジル谷1154-6他である。調査面積は815.5㎡である。

①遺 構 (Fig. 28、Pla. 10・11)

火葬土壙 (Fig. 29～33、Pla. 12・13)

7 S T 003

一部攪乱を受けているが、長さ1.0m、幅0.87m、深さ0.3m内外の隅丸方形土壙である。埋土は最下層が厚さ5cm程の炭・灰で形成され、その上に堆積する埋土中にも、若干の炭や焼土が混入している。焼壁はほぼ全面に確認されているが、西壁及び土壙上位は剥落が著しい。焼痕は底部には至っていない。

7 S T 010

長さ1.05m、幅0.95m、深さ0.45m内外の隅丸方形土壙である。埋土は床面近くに炭・灰の堆積層があり、その下層も炭・焼土を多く混在する層で形成されている。上位の埋土中にも炭が混入している。焼壁は東壁に遺存しない他はよく観察されるが、壁上位は剥落しその為に土壙周囲は段状を呈しているように見える。土壙底部には焼痕はない。

7 S T 014

検出段階で土壙周辺に多量の炭・灰が観察された。今次の調査で検出された火葬土壙中最大のものである。現状では、長さ1.6m、幅1.27mを測るものの四周が剥落しているため当初の規模は若干小さかったものと思われる。埋土は最下層に約5cmの炭・灰の堆積層があるが、それより上位の埋土は焼壁剥落と同時又はそれ以降に堆積したものと思われる。焼壁は上半及び中位の一部を除きよく遺存しているが、土壙底にはない。

7 S T 015

長さ1.05m、幅0.82m、深さ0.1m内外の不整隅丸方形土壙である。埋土は土壙底に炭混じりの淡茶色土が薄く広がり、その上面に厚さ5cm程の炭・灰で形成される層が認められる。焼壁は東半によく遺存している。土壙底は焼けていない。

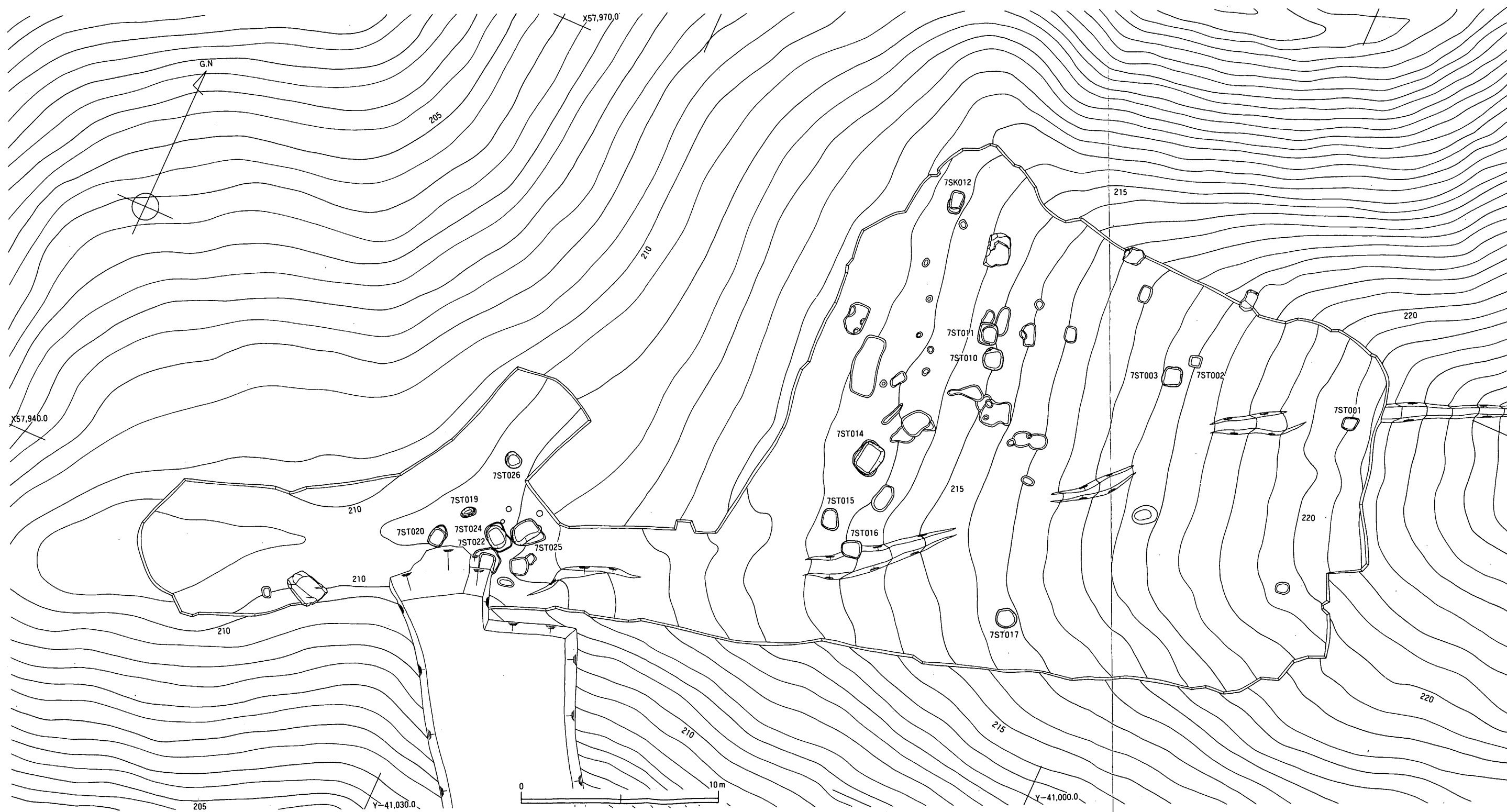


Fig. 28 第7次調査遺構配置図

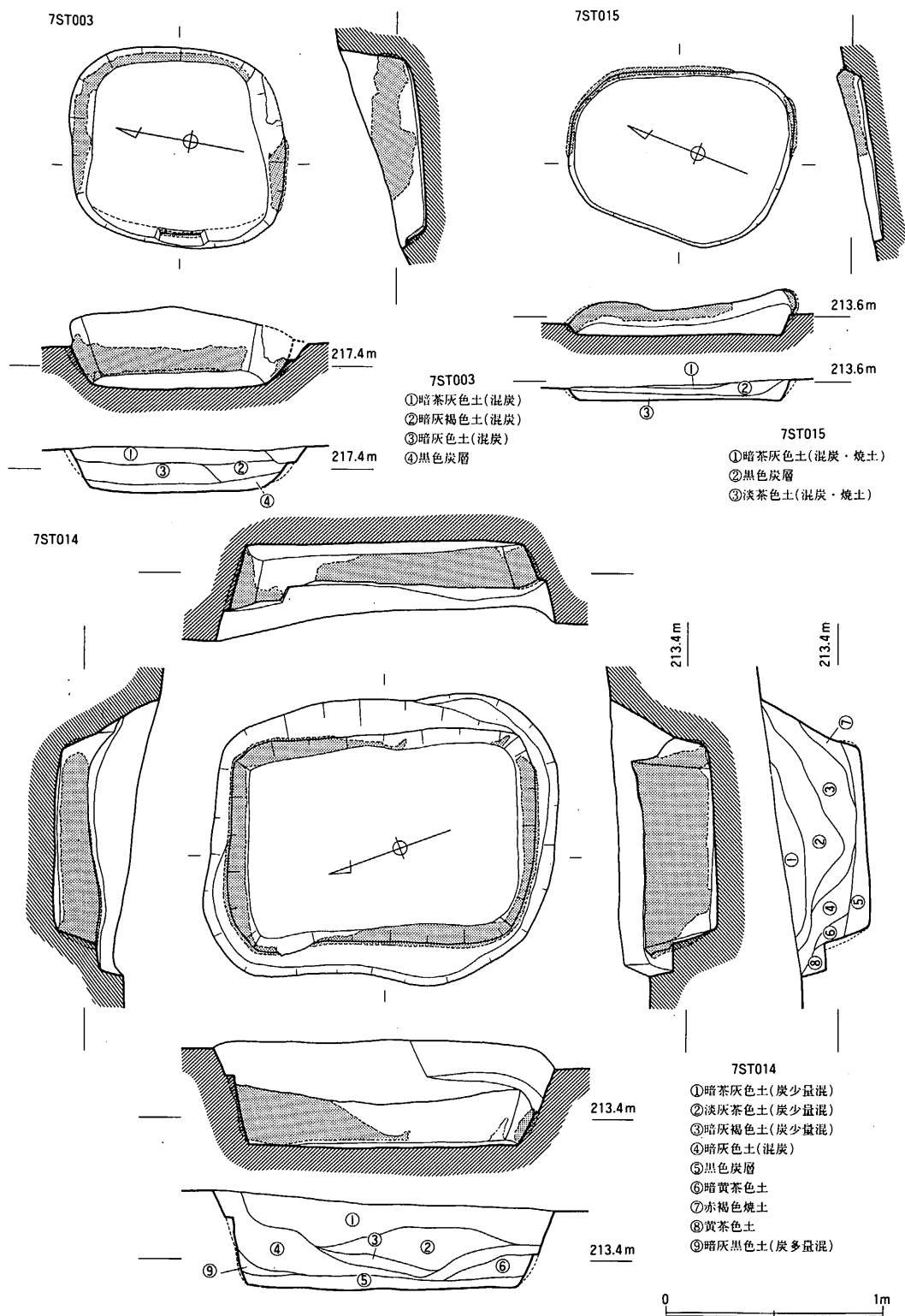


Fig. 29 火葬土壙実測図(Ⅰ)

7 S T 016

土墳の半分を山道で欠失しているが、長さ1.02m、幅0.80m、深さ0.3mの不整隅方形土墳である。埋土は土墳底に厚さ10cm程の炭・灰の堆積層がある。焼壁は北壁と東壁の一部に遺存している。土墳壁下位及び土墳底には焼痕は観察されなかった。

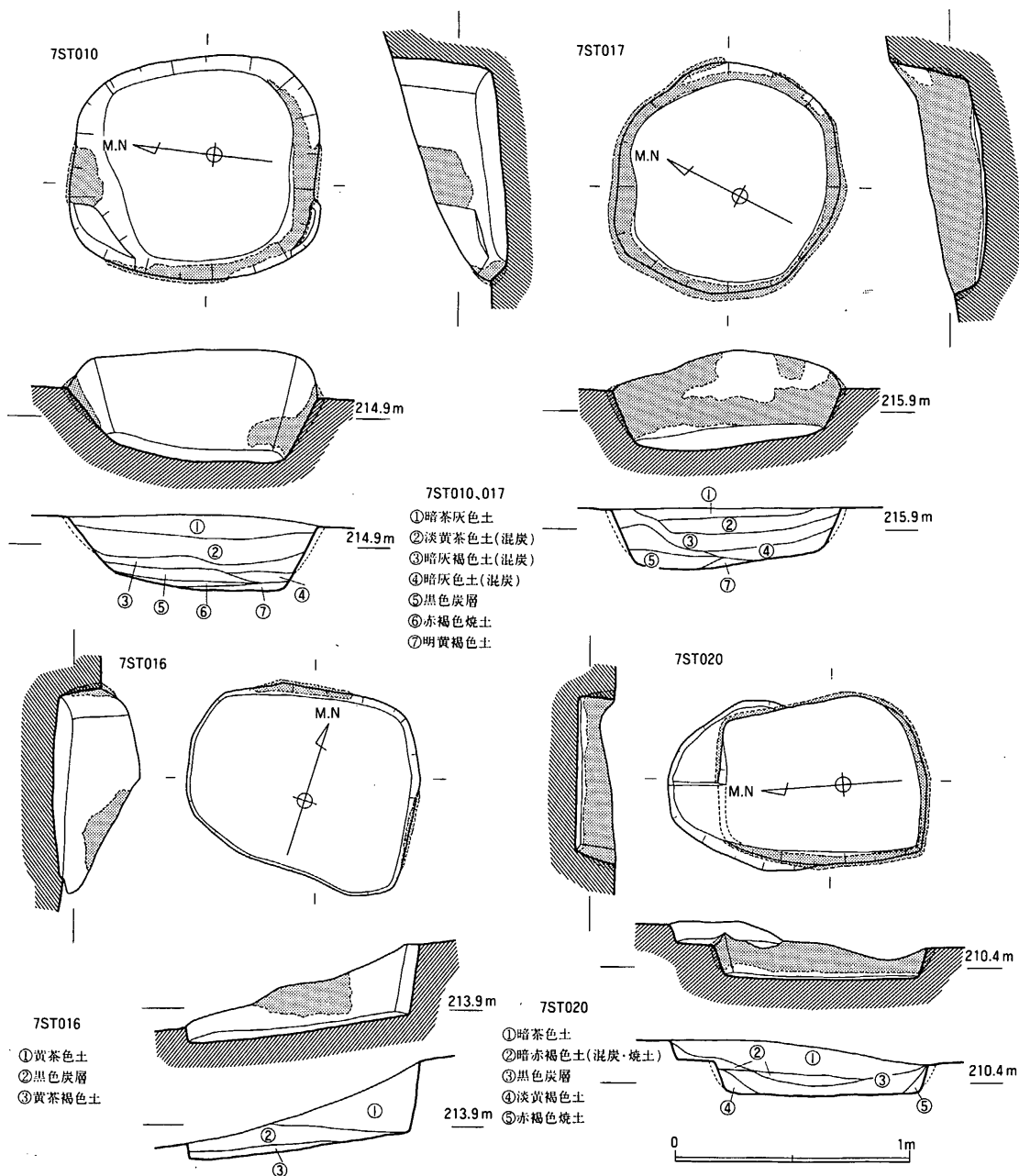


Fig. 30 火葬土墳実測図(Ⅱ)

7ST017

長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.3m内外のほぼ円形を呈する土坑である。埋土は細かく分層されるものの基本的には最下層にある炭・灰の堆積層と、それ以上の炭や焼土を混入する土層に分けられる。焼壁はほぼ全面に遺存し壁下位にまで及んでいる。土坑底に焼痕は認められなかった。

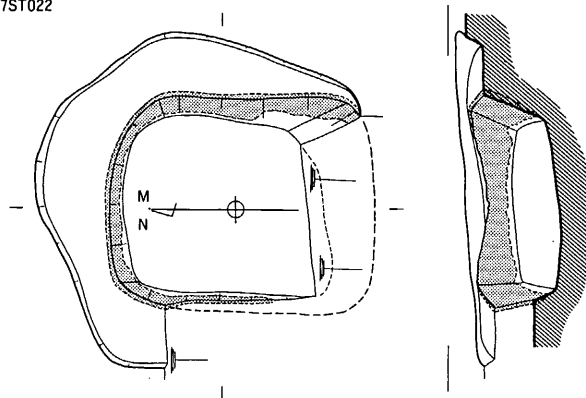
7ST020

平面において2段に掘削されたような形状を呈しているが、上段部分は焼壁剥落に伴う崩壊により形成されたものと判断される。土坑は一部攪乱によって失われるが、長さ0.9m、幅0.7m、深さ0.15m内外の隅丸方形形状を呈している。埋土は土坑底に厚さ5cm程の炭・灰の堆積層があり、上部は炭・焼土の混入する土で埋まっている。焼壁近くの最下部分の一部に焼土が堆積している。焼壁は攪乱部分を除きほぼ全周するが、壁下位数cmと土坑底には確認されていない。

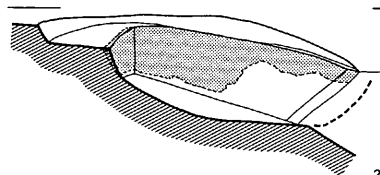
7ST022

道路造成により南と西の2辺を失っているため当初の規模は知り得ない。また壁の崩落に伴う段が上面に存在し、2段状を呈しているが本来の姿ではないと思われる。推定規模は、長さ1.05m内外、幅

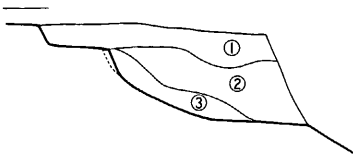
7ST022



210.9m



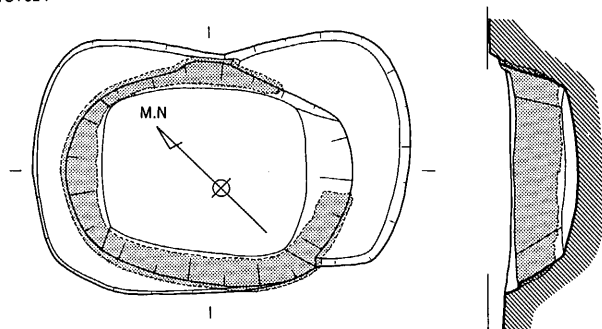
210.9m



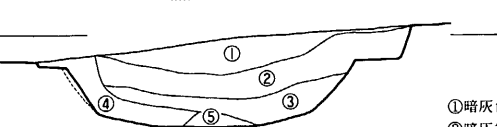
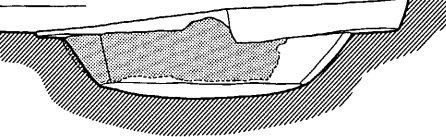
7ST022

- ①暗茶灰色土(混炭)
- ②黒灰色土(混炭・焼土)
- ③暗赤褐色土(混焼土)

7ST024



210.9m



7ST024

- ①暗灰色土(混炭)
- ②暗灰褐色土(混炭・焼土)
- ③黒灰色土(混炭・焼土)
- ④黒褐色土(混炭・焼土)
- ⑤黒色炭層

0 1m

Fig. 31 火葬土坑実測図(Ⅲ)

0.85m内外、深さ0.25m程度である。埋土は炭・灰・焼土を混入する土が10cm程、土壙底部付近に堆積している。焼壁は遺存する壁の全てにみられるが、土壙底には存在しない。

7 S T 024

複数の土壙が重複しているような平面形を呈しているが、上段部分は焼壁の崩落に伴うものであることが知られる。よって当初の土壙上面の規模は知り得ないが現状で記すと、長さ1.15m、幅0.88m、深さ0.25m内外である。埋土は土壙底から北側壁側面にかけて炭や焼土の混じる黒褐色土がやや不自然に堆積し、その上層に炭や灰によって形成される厚さ5cm程の層がみられる。それより上層は崩落時又はそれ以後の堆積と考えられる。焼壁は東隅の一部を除いてよく遺存しているが、各々の壁の最下部及び土壙底には認められない。

7 S T 026

長さ0.85m、幅0.75m、深さ0.1m内外のはほぼ円形を呈する土壙で、土壙の一部は焼壁の崩落によるとみられる段で2段になる所がある。埋土は多量の炭・灰を含んだ黒色土が土壙の大半を埋めている。焼壁はごく一部に遺存する他は崩落して現存しない。

以上報告したものは焼壁の遺存、炭・灰の堆積の点から火葬土壙と考えたものであるが、以下には焼壁を遺存しないものの形状と土層観察から火葬土壙と考えられるものをまとめて報告する。

7 S T 001

長さ0.75m、幅0.65m、深さ0.1mの隅丸方形の土壙である。上面の大半は流出したものと思われ、一般的に土壙底部に認められる炭・灰の堆積層もカットされた状況で検出された。その上層の埋土中には焼土が若干検出された。焼壁は確認されていない。

7 S T 002

長さ0.65m、幅0.6m、深さ0.2m内外の方形土壙である。埋土中から多くの炭や焼土が検出されており、他と一連のものである可能性を考え得る。

7 S T 011

現状では2段に穿たれたような形状を呈しているが、おそらく他の火葬土壙のように焼壁の崩落によるものと推量される。埋土は土壙底に炭・灰を堆積する層がみられ、それ以上は炭や焼土の混在する暗茶灰色土、淡黄茶色土である。この状況は他の火葬土壙の埋土に近似する。長さ1.05m、幅0.9m、深さ0.2m内外である。

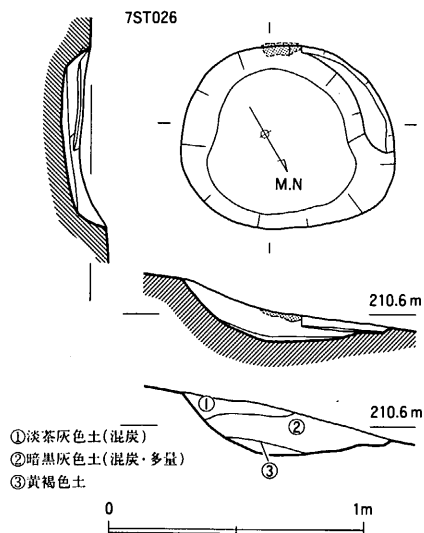


Fig. 32 火葬土壙実測図(Ⅳ)

7 S T 019

長さ0.77m、幅0.77m、深さ0.15m内外の長円形の土坑である。埋土中に焼土や炭・灰を多く含んでいると共に、火葬土坑の壁が崩落した状況を推定させる段が認められる。

7 S T 025

複数の土坑が重複したような形状を呈しているが、おそらく焼壁の崩落により生じたものと

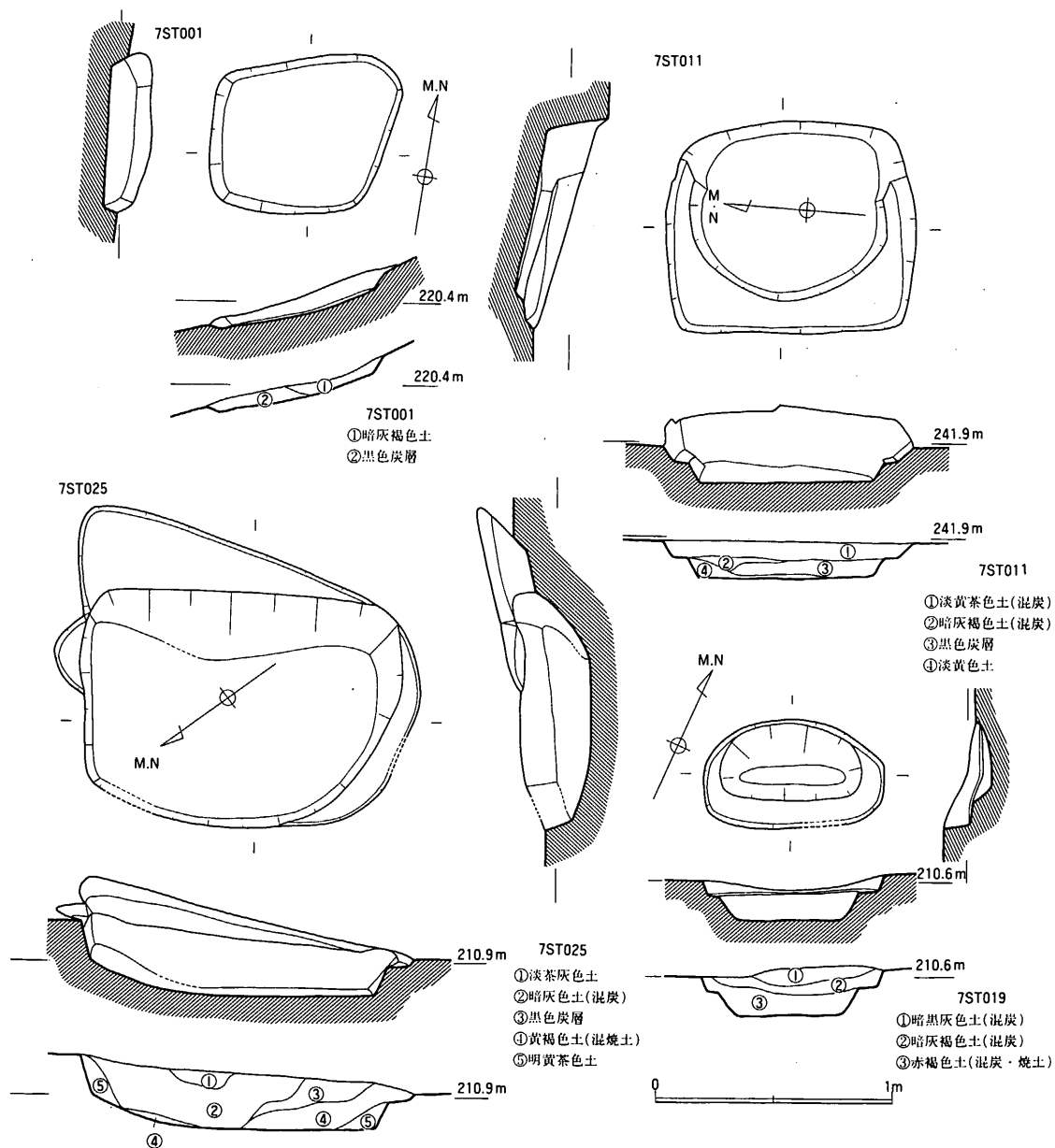


Fig. 33 火葬土坑実測図(V)

考えられる。長さ1.35m、幅0.98m、深さ0.3m内外で、土壙底部の北東側がやや浅くなっている。埋土は炭・灰・焼土を多く含む層が土壙底部にみられる。焼壁は遺存しないが、ここでは火葬土壙の一つとして捉えておくこととする。

土壙

7 SK 012 (Fig. 34)

中央及び北西隅に攪乱があり部分的に形状を損ねている。全体の検出状況は他の一連の火葬土壙に近似するが焼壁は全く遺存せず、また埋土の状況も異なっている。

上段面の長さ1.12m、幅0.78m、下段面の長さ0.88m、幅0.63mで全体の深さは0.25m内外である。埋土は2層認められ下層が黄褐色土、上層が暗茶灰色土であり、両層ともごく少量の炭と焼土を混入しているが、一連の火葬土壙のように炭・灰の集中する堆積は認められない。性格を異にするものと考えられ、ここでは土壙として報告することとした。

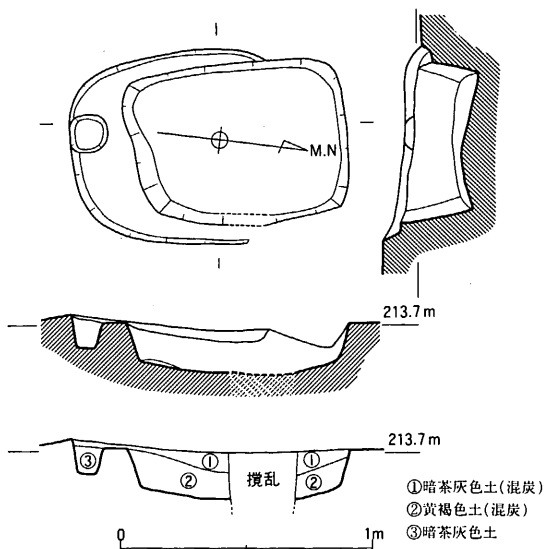


Fig. 34 7 SK 012実測図(1/30)

②出土遺物

表土中に数片の土器片を検出した他、遺構では7 S T 002で陶器片、土師器小片、7 S T 014で土師器小片、7 S T 024、025で須恵器の小片が少量みられた他は全く検出されていない。全て遺構の時期を推定する要素をもつものはない。 遺物実測図

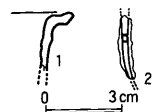


Fig. 35

第7次調査出土

7 S T 002出土遺物 (Fig. 35)

陶器

1は水注か壺の口縁部の破片である。胎土は灰色で細かい黑色粒子と白色粒子を含む。釉は暗緑灰色を呈し、一部黄灰色に濁化し、剥落している。

金属製品

釘 (2) 鉄製の角釘。両端部は欠損している。現存長2.6cm、幅2mm。

③小 結

第5次調査で検出した火葬土壙群の有り方とは様相を異にした有り方で展開されているのがこの調査地点である。第7次調査の場合、火葬土壙が緩やかな幅広い斜面中にいくつかの群を形成して設営されていることが知られる。すなわち、7 S T 019、020、022、024、025、026の

群、7 S T 014、015、016の群、7 S T 011、010の群の3群が認められる。7 S T 001と7 S T 017は地形観察の上から調査区外に一連となる遺構の存在を推定できることから、これらも未知の遺構と群を形成していた可能性を考えることができる。さらに7 S T 003は7 S T 002が火葬施設であったものとすればこの2者で群を形成するものと推定できる。

この場合、他の諸遺跡のように葬送の場の中心となる墳丘または墳丘状の隆起が調査地周辺にないことから、丘陵という広域全体を葬送のための「場」とし、何らかの要因をもって定められた一定の空間を利用して火葬を実施したものと推量される。未だ他の例が見出せないもののこうした形状も一つの葬地として捉える必要があろう。

また7 S K 012は埋土が異なる点で土壙として捉えているが、火葬土壙の群集する専用の「場」を持つ推定金光寺跡の例[※]をみると、火葬土壙を切って土壙墓が設営されている状況が報告されている。この場合、土壙墓は火葬土壙よりも後出することが指摘されており葬法の変化と併せて、各々の「場」の持つ意義が次第に変わってきていることを物語るものと思われる。仮にこの7 S K 012を土壙墓と解釈し得るならば、この地域においても推定金光寺跡に類似する傾向を求めることができるのではないかと思われる。

今後の調査例の増加をまって再検討を要する課題である。

※石松好雄他『大宰府史跡 昭和62年度発掘調査概報』1988（九州歴史資料館）

(8)鉄塔 No. 26地点の調査

愛岳山から西へ派生する丘陵の1つの先端近くが開発予定地である。地番は太宰府市大字内山字ジル谷1154-21、22、23である。開発対象面積は1,390㎡である。

調査は昭和61年7月31日に太宰府天満宮文化研究所小西信二氏に同行を依頼し、山本が担当した。現地における所見から本地点は工事実施時の立合調査とした。

立合調査の結果、若干の遺物を含む暗黄茶色土層下はすぐ地山となっており、顕著な遺構の検出はなかった (Fig. 36)。

(9)鉄塔 No. 32地点の調査

国土館大学体育館用地の北側隣接地にあたる。地番は太宰府市大字太宰府字冷林^{ひえべす}307-1の一部で、開発面積は1,661㎡である。

開発対象地は平地に臨む丘陵端部の西側斜面に位置しているが、国土館大学造成時に対象地の南側と西側の地形を改変しているため、現地踏査をするにとどめた。踏査は昭和62年7月30日に狭川が行った (Fig. 37)。

(10)鉄塔 No. 33地点の調査

宝満山山麓から御笠川の流れる谷を隔てて大城山（四王寺山）の東麓にあたり、南と北に派生する2つの小支丘に挟まれた狭小な扇状地に調査地点がある。調査前の現況は水田である。地番は太宰府市大字太宰府168-2番地で、調査対象地の面積は1,540㎡である。調査は昭和62年7月28日に実施し、狭川が担当した。

調査は谷筋に対して直行する2本のトレンチを設定し、重機により実施した。両トレンチ共に谷に堆積する砂層及び礫層が検出されたにとどまり、遺物や遺構の存在は確認されなかった (Fig. 38)。

(11)鉄塔 No. 34地点の調査

大城山から東へ派生する一支丘の先端に開発予定地があり、事前の踏査において墳丘状隆起2基が確認されたため、それを中心に試掘調査を実施することとした。地番は太宰府市大字太宰府80、139-87で、開発対象面積は1,413㎡、調査期間は昭和62年8月28日、29日の2日間実施した。調査は狭川が担当した。

調査は試掘トレンチを南側の墳丘状隆起の中央から北側のそれまでの中央にかけてかなり広範囲に設定して実施した。他に南斜面中にわずかな平坦地を見出したため、2本のトレンチを別に設定した。しかし、表土除去後すぐに地山が露出し、何らの遺構、遺物も確認されなかった。墳丘状隆起も人為的に成形されたものではなかった (Fig. 39)。

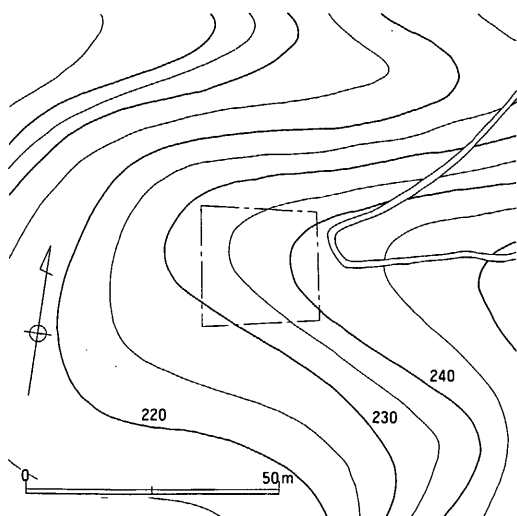


Fig. 36 鉄塔No.26地点周辺地形図

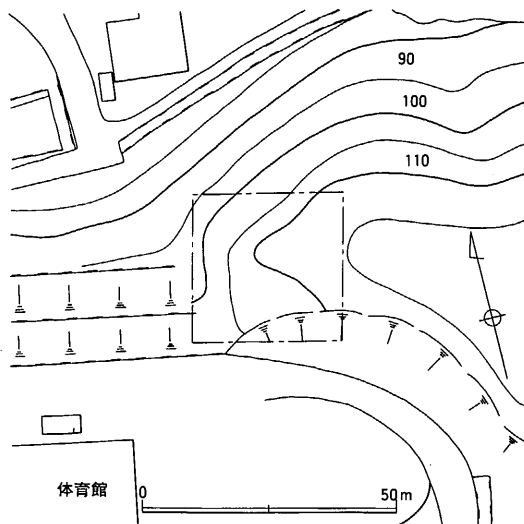


Fig. 37 鉄塔No.32地点周辺地形図

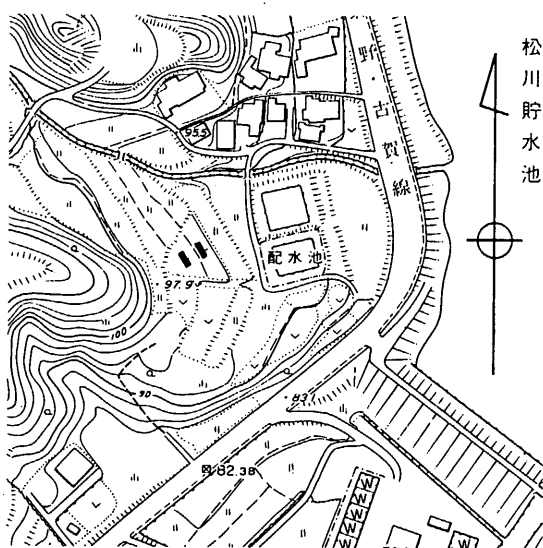


Fig. 38 鉄塔No.33地点トレンチ位置図(1/3500)

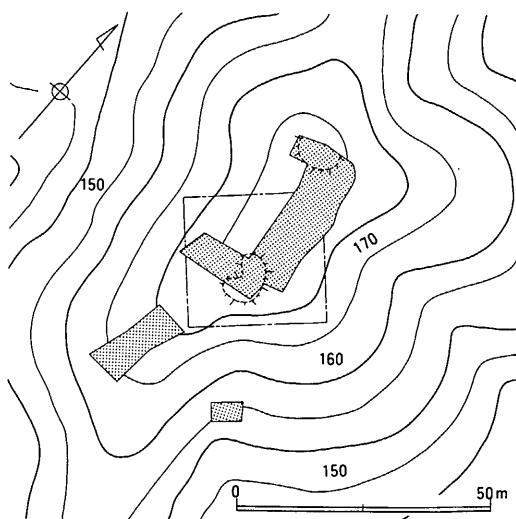


Fig. 39 鉄塔No.34地点トレンチ配置図

Ⅳ. 金銅製菩薩立像の保存修復研究

1. はじめに

本研究は、太宰府市教育委員会の依頼により、昭和62年度の受託研究として行なったものである。研究期間は、昭和62年8月27日から昭和63年3月31日である。研究対象になった遺物は、太宰府市宝満山遺跡出土金銅製菩薩立像である。

研究項目は、これらの遺物の錆の安定化処理と修復、材質調査、原料産地推定、美術史的調査で、修復技術部、保存科学部と美術部がこれを行なった。

研究の分担は、以下の通りである。

保存修復

修復技術部：青木繁夫

材質調査（蛍光X線分析）

保存科学部：平尾良光

原料産地推定（鉛同位体比の測定）

保存科学部：馬淵久夫・平尾良光

X線透視撮影

保存科学部：石川陸郎

修復技術部：青木繁夫

美術史的調査

美術部：三宅久雄・井上一稔

写真撮影

情報資料部：橋本弘次

2. 品質形状および保存状態

金銅製菩薩立像

法 量

総高10.5cm

本 体

像高8.9cm、髪際高（冠際）7.7cm、面幅1.3cm、耳張（冠帯を含む）1.7cm、面奥1.6cm、肘張2.2cm、胸奥1.0cm、腹奥1.0cm、天衣下端張2.3cm

台 座

全高1.6cm、仰蓮径左右2.2cm、前後2.0cm、高0.5cm、反花径左右2.3cm、前後2.1cm、高1.1cm

重量116.4 g

本体、台座一铸の铸铜製菩薩立像で鍍金が施されている。

本 体

髻（単髻）を結び、頭上に三面頭飾を戴き、冠帯をめぐらす。各側面の頭飾下方から冠帯が肩に垂れる。白毫、三道は不明、僧祇支、裳を着け、裳の上端を腰部で折返し、その下方から腰帯（？）が台座上面に垂下する。胸飾、臂釧は不明。天衣は背面から両肩を覆い、左方分は上膊内側を通り手首に懸って台座左側に垂下し、右方分は上膊前面を通り手首の外側から台座右端上面に垂下する。上体をやや反らせ、腰を右にひねり、頭部と上体をわずかに左方に向けてたつ。両手を体側につけ、左手屈臂、掌を前にして立て（指先は不明）、右手は伸ばして垂下する（手先および持物不明）。

台 座

蓮華二重座。仰蓮、反花から構成されると思われるが、蓮弁の状況の状態、最下段の框の有無など詳細は不明。

全体にかなり固い土が付着している。その土には鉄分が多いたく強い鉄色をしている。土が剥がれ落ちるとともに像の表面層も剥がれ落ち、黒褐色の荒れた肌が露出している。そのために像の細部の形状を分かりにくくしている。当初は、像全体に鍍金が施されていたらしく、その痕跡が所々に認められる。

3. 材質調査

これらの遺物の材質調査は、フィリップス社製蛍光X線分析装置 PW1404LS を使い、Sc ターゲット、60kV、50mA、LiF で10度から75度までを35分間の条件で行なった。

1) 測定部位

金銅製菩薩立像……台座裏側、額、顔の頬部分、後頭部の4ヵ所。

2) 測定結果

金銅製菩薩立像……測定部分の違いによって鍍の違いが原因と考えられる元素量の差が多少認められるが、ほぼ純銅に近い組成で微量の錫、鉛、ヒ素、銀、および金を含んでいる。金は、表面に施された鍍金に由来するが、検出された銀はその金に微量含まれていたものと思われる。

なお鉛については、原子吸光分析をした結果0.1%程度含まれていた。

4. 原料産地推定

菩薩立像から微量の鍍を採取した。それを試料として鉛同位体比を測定した。

菩薩立像は、鉛含量が極めて少なかったために鉛同位体比の測定が出来なかった。

5. 保存修復

今回の保存修復では、ブロンズ病の塩基性塩化銅が存在するとの前提のもとに処置を行い、ブロンズ病の安定化処理には、現在までのところ最も効果を上げているベンゾトリアゾール法を採用した。

1) クリーニング

菩薩立像の錆は、かなり進行しており、脆弱化していた。このような状態の錆や土を溶剤のブラッシングやエアブラシ装置などでクリーニングすると粉末状になった錆がとれ、図像やわずかに残っている鍍金が失われてしまう。そこで錆や土は、顕微鏡下で、メス、竹べら、針などを利用して機械的に取除いた。

2) 錆の安定化処理

ベンゾトリアゾール3%エチルアルコール溶液の中に20日間浸漬。

3) 強化処理

錆により脆弱になったこれらの遺物を強化するためにベンゾトリアゾールを3%含有したアクリル樹脂（インクラック）を含浸した。

6. おわりに

金銅製菩薩立像は、すでに述べたような品質形状をもち、その現状の作風から白鳳時代（7～8世紀）作のものと考えられるが、埋蔵環境にあったため損傷が著しく、そのため詳細な美術史的判定は困難である。

諸調査と保存修復処置は、以上述べたような方法で行なわれた。このようにして錆の安定化処理と保存修復がなされたとはいえ、相対湿度が高い環境に保存すれば、再度錆が発生する危険がある。今後は錆の原因となる水が露結しないように相対湿度40%以下の低い湿度の環境中で保存管理することが望ましい。

V. 結 語

宝満山の歴史の中に今回の調査で得た所見を当て嵌めてみると、今日まで知られている諸々の事項にはなかった側面を見出すことができた。それは宝満山の葬地化である。

宝満山麓周辺の葬地としては、花見ヶ丘火葬墓が知られているが、古代大宰府官人の墓所の一つとみられ、またその具体的な位置も明らかではない。出土位置の推定される地点は、現在の太宰府天満宮後背地の丘陵である。こうした古代官人の葬地は、大宰府では平野部を除き周辺の丘陵にいくつか見出されており、この花見ヶ丘火葬墓もその範疇で捉えられ、宝満山の歴史の上で位置付けることは避けた方がよさそうである。

今回発見された葬送に伴う遺構は全て宝満山中であり、宝満山の或一時点の姿を知る良い資料と言える。その遺構として第3次調査検出の火葬墓や第5、7次調査検出の火葬土壙が掲げられる。宝満山についての古記録には、山が葬地であったことを示すものは管見にない。

これらの遺構群は3ST001が14世紀ごろと推定される以外、時期を特定できる資料に乏しい。特に火葬土壙群については皆無に近い状況である。しかし、福岡県下における火葬土壙の類例を拾い集めると、今回検出した火葬土壙群は概ね14～16世紀を中心に形成されていたものと推定することができる。

この時期の宝満山に関係する記録は、ほとんど有智山城に関係する戦乱の記録であり、宗教色を帯びるものは建武四年(1337)の梵字仏(『筑前国統風土記拾遺』)と正平六年(1351)の一字一石経碑の建立(『竈門山旧記』)ぐらいである。しかし、この記録から山内の僧侶は全て武士化したのではなく、また散り散りに山を追われたのでもなく、一部には宗教的法統を存続させる者もいたことが知られる。

こうした僧侶達の手によって宝満山の所々に火葬墓や火葬土壙といった遺構が残されていたものと推量される。

葬送事業を僧集団が経営していた例は、摂津尼崎大覚寺文書にみえる。これによって知られる事は、16世紀前半頃の律宗寺院における斎戒衆の三昧の職掌である。ここには葬式の直接担当者としての聖方に葬式の形態ごとに支払われる金額が定められており、併せて墓所の管理も行っていたことが記されている*。

今、宝満山の例をそのままこの大覚寺例に該当させることは、僧集団の教団的背景や地域的、時間的問題などの点で難しいが、僧たちの生活の糧の一つとして葬送事業があったことは事実であり、山城化した宝満山に取り残された宗教的法燈を受け継ぐ僧侶たちの職掌の一つに葬送事業も存在していた可能性を考えておく必要はあると思われる。

未だ推定の域を出ず、今後の資料の増加によらねばならないが、中世宝満山における一つの姿を垣間見ることができたのではなかろうか。

※細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』1987 吉川弘文館

Ⅵ. おわりに

九州電力鉄塔建設に伴う今回の一連の調査は、昭和30年代に実施された上宮等の発掘調査結果や文献資料に基づく宝満山研究の成果ではあまり触れられなかった新たな宝満山の一側面を窺える機会となった。特に中世墳墓や火葬土壙といった葬地の発見は、中世という時代における宝満山の有り方を示唆するものと考えている。しかし、これによって宝満山の歴史が塗り替えられたというのではなく山全体が遺跡であり一つ一つの支丘のほとんどが何らかの形で各時代にわたって利用され続けてきたことが明らかになり、より一層宝満山の歴史的価値を認識させるものになったと言えよう。

壘峰宝満山の山麓には昔ながらの集落以外に数々の開発の波が押し寄せてきている。我々日本人にとって、宝とも言える緑と文化遺産の満つる山、宝満山を、いつまでも今の美しい姿のまま後世に伝えてゆく必要性を痛感させられる調査であった。

付表1 土師器の法量

○×
A. 番号 B. 挿図番号 C. 内底のナデの有無 D. 板状圧痕の有無
㊦. 須恵器 ㊧. 瓦器 単位cm

1次 表土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
㊦ 環 a	1	1	13.8	3.1	8.6	○	○
㊦ 環 c	1	2		2.2+	7.2		

2次 Gトレ黄灰土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
㊦ 環 a	1	1	13.0	3.3	10.1	○	×
㊦ 環 a	1		16.6	3.1+			

3 S T001

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
環 a (イト)	1	1	12.6	2.5	8.8	○	○
	2		12.8	2.2	8.0	○	?
	3		12.8	2.5	8.8	○	○
	4	2	12.8	2.9	8.8	○	○

3 S X002

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
環 a (イト)	1	11	12.8	2.7	8.6	○	?

3 S X004

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (イト)	1	3	7.6	1.5	6.5	○	?
環 a (イト)	1	4	12.6	2.2	7.8	○	○
		5	13.0	3.0	9.0	○	○
				2.2+	7.2	?	?
				3.0+	8.6	?	○
環 b (イト)	1	6		1.8+	5.2	?	×

3 S K006

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
環 a (イト)	1	7	12.4	2.3	10.0	○	○
	2	8	12.6	2.8	7.0	?	×
	3	9	12.8	3.1	7.6	○	○
	4	10	14.0	3.2	9.2	○	○

3次 上段表土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (イト)	1	12	7.6	1.0	7.4	○	○
	2	13	7.8	1.3	6.4	○	?
小皿 b (イト)	1	14	6.4	1.5	3.8	?	?
環 a (イト)	1		10.8	2.7	8.2	?	?
			11.8	2.7	7.6	○	○
		15	12.6	3.3	8.1	○	○
		16	12.8	2.4	9.0	○	○
		17	13.6	3.0	9.0	○	○
		18	14.0	2.4	9.2	?	?
				1.5+	5.8	?	?
				2.1+	6.0	○	○
				2.4+	7.0	?	○
環 b	1			1.2+	3.9		
	2			1.7+	4.4		
	3	19		2.1+	7.0		

3次 下段表土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
大環 a (イト)	1	20	15.2	3.6	10.2	○	○
環 a	1		12.2	3.0	7.0	○	○

4 S X010

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (イト)	1		7.0	0.9	5.0	?	?
	2		7.4	1.2		○	?
	3	10	7.8	0.8	6.6	?	?
	4	11	7.8	1.2	5.9	○	○
	5		8.0	1.2	6.6	○	○
	6		8.6	0.9	6.6	○	?
	7		8.6	1.1	7.0	?	○
	8		9.0	1.3	7.8	?	?
小皿 c	1				5.4	○	×
	2				5.8	?	?
	3				6.8	○	×
大環 c	1				11.0	?	×

4 S X015

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a	1	14	7.2	1.3	5.7	○	○

4 S K023

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
環 a (イト)	1		14.2	2.1	11.2	○	?

4 S K025

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
環 a	1	1	12.8	2.7	8.2	?	?
	2	2	12.6	2.8	8.4	?	○

4 S K030

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (イト)	1	3	8.2	1.1	6.8	?	○
	2		8.6	0.9	7.4	?	?
環 a (イト)	1		12.2	2.1	9.4	?	?
	2	4	12.8	2.1	8.0	○	?
	3	5	13.0	2.4	9.2	?	○
	4	6	13.6	2.4	8.9	?	?

4次 表土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (イト)	1		8.4	0.9	5.8	?	?
小皿 a	1		9.0	1.0	7.0	?	?

4次 茶黒色土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (ヘラ)	1		6.8	1.1	4.8	?	○
小皿 a (イト)	1		7.8	1.0	6.2	?	?
	2		8.0	0.8	6.6	?	?
	3		8.4	1.2	6.0	?	?
小皿 a (?)	1		8.0	0.7	6.4	?	?
	2		8.6	1.0	6.8	○	?
	3		9.8	1.3	7.6	?	?

4次 暗赤褐色土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (イト)	1		9.0	1.0	7.0	○	?
環 a	1		12.8	2.1	8.8	?	?

4次 暗茶黒色土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (イト)	1		7.0	1.0	5.2	?	?
	2		7.4	1.0	5.2	?	○
	3		7.4	1.0	5.6	?	○
	4		7.6	1.1	7.4	?	?
	5		7.6	1.2	6.0	?	○
	6	4	8.0	1.2	5.6	?	○
	7		8.6	0.9	6.6	?	?
	8	5	9.2	1.0	7.4	○	○
	9		9.8	0.8	8.4	○	?
	10	6	10.0	1.1	8.0		○
小皿 c	1	7	8.6	2.9	6.6	○	×
環 a (イト)	1	8	11.8	2.4	8.0	○	○
	2		12.6	2.3	7.4	?	?
	3	9	14.6	2.2	9.4	○	○

4次 暗茶色土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (イト)	1		8.0	0.9	6.4	?	○
環 a (イト)	1		12.6	1.9	8.8	?	○

4次 黄白色砂層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
小皿 a (ヘラ)	1		8.4	1.5	6.4	○	○
小皿 a (イト)	1		8.8	1.0	7.0	○	?
	2		9.0	1.1	7.0	?	?
	3		10.4	1.4	8.4	?	?
小皿 a (?)	1		8.8	0.7	6.2	?	?
	2		10.6	1.3	8.8	?	?
環 a	1		12.8	2.5	9.2	?	?
	2		—	—	9.9	○	×

4次 黒色粘土層

器種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a	1		9.2	0.9	7.6	?	?
	2		9.2	1.0	7.0	?	○
	3	2	9.2	1.2	7.7	?	?
	4	3	9.2	1.0	7.7	?	○
	5		9.6	1.2	7.0	?	○
	6		9.8	1.0	7.0	?	×
	7	4	10.8	1.2	9.0	?	?
坏 a	1	5	14.6	2.1	10.6		
	2		15.2	2.3	9.8	?	?
	3		15.2	2.5	10.8	?	○
	4	6	15.2	2.7	8.7	?	?
大 坏 c	1			3.3+	12.0	○	?

4次 灰茶色粘土層

器種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (ヘラ)	1		9.6	2.1	7.4	?	○
小皿 a (イト)	1	7	8.7	1.2	6.0	○	×
	2	8	9.8	1.5	7.9	○	○
	3		10.6	1.2	7.8	?	?
	4		11.8	1.9	7.6	○	○
小皿 a (?)	1	9	11.8	1.6	9.6	?	?
坏 a (イト)	1		16.0	2.2	12.0	?	?
	2	10	16.6	2.8	11.4	?	?
丸 坏 a	1		15.0	3.2			○
	2		15.8	2.8			

4次 黄茶色粘土層

器種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (ヘラ)	1		8.2	0.8	7.4	?	?
	2	13	8.2	1.0	6.4	○	○
	3	14	8.6	1.1	6.2	?	?
小皿 a (イト)	1		8.8	1.1	6.2	?	?
小皿 a (?)	1		9.0	0.7	7.6	?	○
坏 a (ヘラ)	1	15	15.6	2.7	10.6	?	○
丸 坏 a	1	16	14.8	2.8			
	2		15.4	3.5			
大 坏 a	1				19.6		

4次 暗灰色粘土層

器種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (ヘラ)	1		8.4	1.0	6.4	?	?
	2		9.0	0.8	7.2	○	?
	3		9.2	0.9	7.0	?	○
	4		9.2	1.0	6.8	?	?
	5		9.4	1.0	7.2	○	○
	6	1	9.4	1.0	7.3	?	?
	7		9.4	1.3	6.6	?	○
	8	2	9.6	1.1	8.0	○	○
	9		9.8	1.0	7.8	?	?
	10		11.6	1.3	9.0	?	?
	11	3	11.8	1.5	9.2	○	○
小皿 a (イト)	1		8.8	1.3	6.8	○	?
小皿 c	1		9.0	1.8	6.8	?	?
小 碗 c	1	4	9.4	2.9	5.8	?	?
	⑤	1	5	7.6	2.0	5.0	○

4次 暗灰色粘土層下層

器種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
小皿 a (ヘラ)	1	10	9.2	1.0	7.0	?	○
	2		9.4	1.2	7.4	?	○
	3		9.6	1.0	7.2	?	?
丸 坏 a	1	11	14.6	3.0			?

5次 Cトレ南側表土

器種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
坏 a	1	1	12.4	2.7	7.8	○	○

6次 表土

器種	A	B	口 径	器 高	底 径	C	D
碗 c	1	1	18.4	6.0	11.0		

付表2

凡例 [] 内容を示す [ヘラ] ヘラ切り

① = 1 個体 ③ = 同一個体 3 片 (3) = 別個体 3 片

a × b … a または b a ~ c a から c まで (a · b · c)

4 次 黒色粘土層

土 師 器	小皿 a [ヘラ・イト] 坏 a [ヘラ・イト] 丸坏 a 大坏 c
瓦 器	碗 c
白 磁	碗 II - 1 (1) IV (1) V 2 (2) V ~ VII (1) IV ~ VIII (1)
	皿 VI - 1 b (1) VII - 1 b (1)
	碗 × 皿 (1)
同安窯系青磁	碗 III × IV (1)
須恵質土器	鉢
陶 器	甕 [常滑] (1)
	Fa' [甕 IV ?] ②
石 製 品	石鍋 (1)
4 次 灰茶色粘土層	
土 師 器	小皿 a [ヘラ・イト] 坏 a [ヘラ・イト] 丸坏 a 小皿 c
白 磁	碗 IV ? (1) V 2 (1)
	皿 VII 1 b (1)
須恵質土器	鉢
陶 器	水柱 X (1)
	Gab [水柱 X × 鉢 I 3] (1)
土 製 品	生産関係?
石 製 品	滑石片 (1) 円形硯 (1)
瓦 類	瓦玉 (1)

4 次 黄茶色粘土層

須 恵 器	片
土 師 器	小皿 a [ヘラ] 坏 a [ヘラ・イト] 丸坏 a 碗 c 大坏 c 鍋
瓦 器	片
黒色土器 B	碗 c
白 磁	碗 II (2) II - 1 (2) II - 5 (1) IV (7) ② IV - 2 a (1) V (7) V - 2 (1) V - 2 a (1) V - 3 a (1) V - 4 b (1) V [内クシ] (1) V [外タテヘラ] (1) V - 1 b [内クシ] (1) VII - 2 [内クシ] (1) IV ~ VII (7)
	皿 II - 1 b (2) V - 2 (2) VI (1) VI - 1 (1) VI - 1 a (1) VII - 1 b (1) VII - 1 a (1)
	碗 II × 皿 VI (3) 碗 × 皿 (1) 前川 M [外タテヘラ] (1)
	龍泉窯系青磁 碗 I - 1 ~ 4 [高麗か?] (1)
同安窯系青磁	碗 I - 1 b (1)
高麗青磁	碗 II - 1 (1)
須恵質土器	碗 鉢 前川 6 類 (3)
瓦 質 土 器	
陶 器	鉢 C'a' [I - 4 ?] (1)
	Fa'' (2) F'a'' (1)
金属製品	鉄器 (1)
土 製 品	生産関係?
石 製 品	滑石片 (3) 硯 (1)
瓦 類	片

4 次 赤褐色粘土層

須 恵 器	甕片
土 師 器	小皿 a [ヘラ・イト] 丸坏 a 器台
瓦 器	火舎?
黒色土器 B	碗 c
	碗 II (2) II - 3 (1) II - 5 (1) IV (1) IV - 1 a (1) V - 2 (1) V - 4 × VII - 1 × 3 (1) IV ~ VII (1)
	皿 VI - 1 a (1) VI - 1 b [I]
	碗 ? (1)
須恵質土器	前川 6 類 (2)
陶 器	坏 Fa'' (1)
	甕 IV (1)
土 製 品	生産関係?
石 製 品	滑石片 (1)

4 次 暗灰色粘土層

須 恵 器	蓋 c 蓋 3 短頸壺 片
土 師 器	小皿 a [イト・ヘラ] 坏 a [イト・ヘラ] 丸坏 a 小皿 c 小碗 c 大坏 c 鉢 壺 器台
瓦 器	碗 c 鉢? 火舎?
黒色土器 B	碗 c
白 磁	碗 II (7) II [段 1] ④ II - 1 (3) II - 3 (3) II - 5 (1) II ? (1) IV ⑧ ④ IV - 1 a (1) ② IV - b (1) V (1) V - 2 b ② V [外タテヘラ] (1) [内クシ] (1) IV × V (1) IV ~ VII ② 片 (2)
	皿 II (2) V - 2 (1) VI (1) VI - 1 b (3) VII (1) V × VI (1) II × IV × VII (1)
	青磁 × 白磁 壺 × 水柱 (1)
	龍泉窯系青磁 碗 I (1)
同安窯系青磁	碗 I - a (1)
龍泉 × 同安	0 (2)
高麗青磁	碗 II - 1 ② III (2) III a (2)
青 磁	片 (1) [混入]
須恵質土器	甕 前川 6 類
土師質土器	鍋
瓦 質 土 器	大型品
灰釉陶器	山茶碗 (1) 片 (2)
陶 器	水柱 X [I]
	壺 甕 F ⑦ [甕 IV ?]
	鉢 I (1)
	片 Bab (1) c - a (1) A'ab (1) A'a (1) 無釉 (1) 李朝 × 唐津 (1) [混入]
金属製品	鉄器片 (3)
石 製 品	滑石片
瓦 類	瓦玉 片
4 次 暗灰色粘土層	
須 恵 器	蓋 片
土 師 器	小皿 a [ヘラ] 丸坏 a 碗 c 大坏 c 壺
瓦 器	碗 c
黒色土器 B	碗 c
白 磁	碗 II (8) ② II - 1 (1) II - 5 (1) IV (3) ⑥ IV - 1 a (2) ② IV ? (1) V (3) V - 2 ② V - 2 b (1) V [外タテヘラ] (1) IV × V (1) ② V × VII (1) IV ~ VII (7)
	皿 II ② VI (1) 片 (1)
	片 (1)
龍泉窯系青磁	碗 I - 5 b ? (1)
	龍泉 × 越 (1)
同安窯系青磁	碗 片 (1)
高麗青磁	碗 片 (4)
須恵質土器	鉢 甕
緑釉陶器	盤 (1)
金属製品	鉄器片 (1) 鉾滓
土 製 品	生産関係?
石 製 品	滑石片
4 次 淡茶色粘土層	
土 師 器	片 [イト]
土師質土器	鉢 ③
白 磁	皿 XI ? (1)

図 版



第3次調査地点（調査前・東から）



第3次調査地点（調査前・南東から）



第3次調査全景（航空写真）



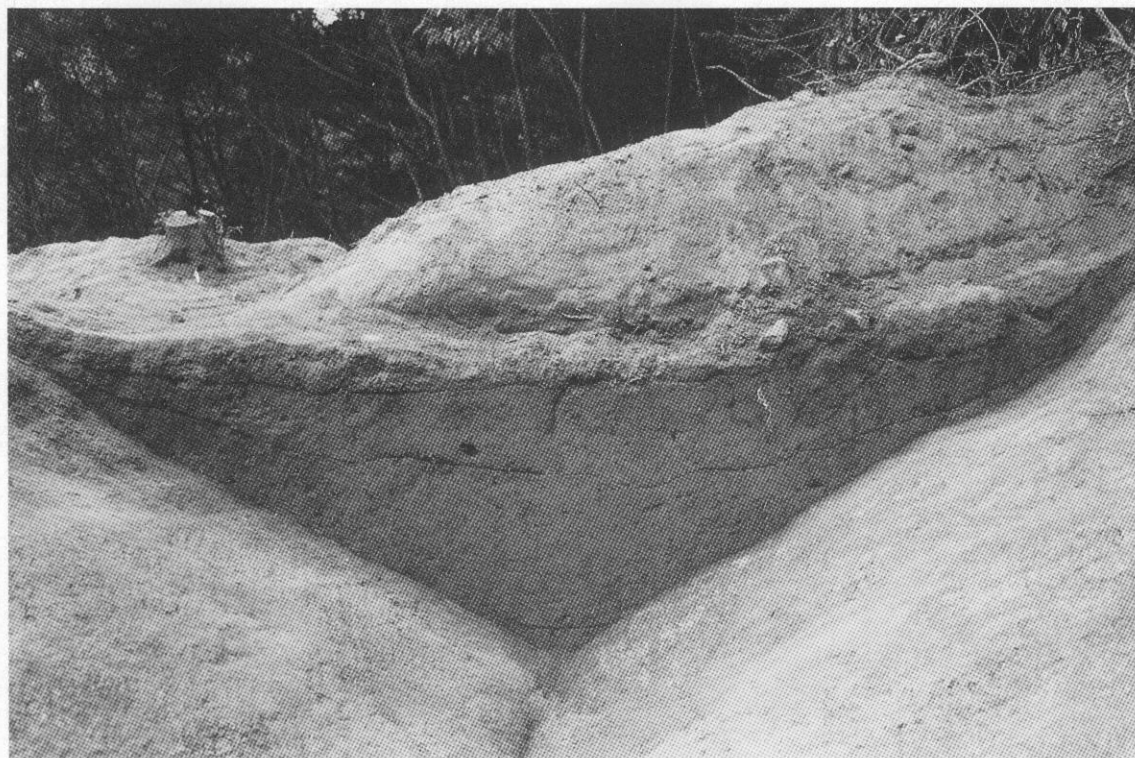
3ST001 検出状況



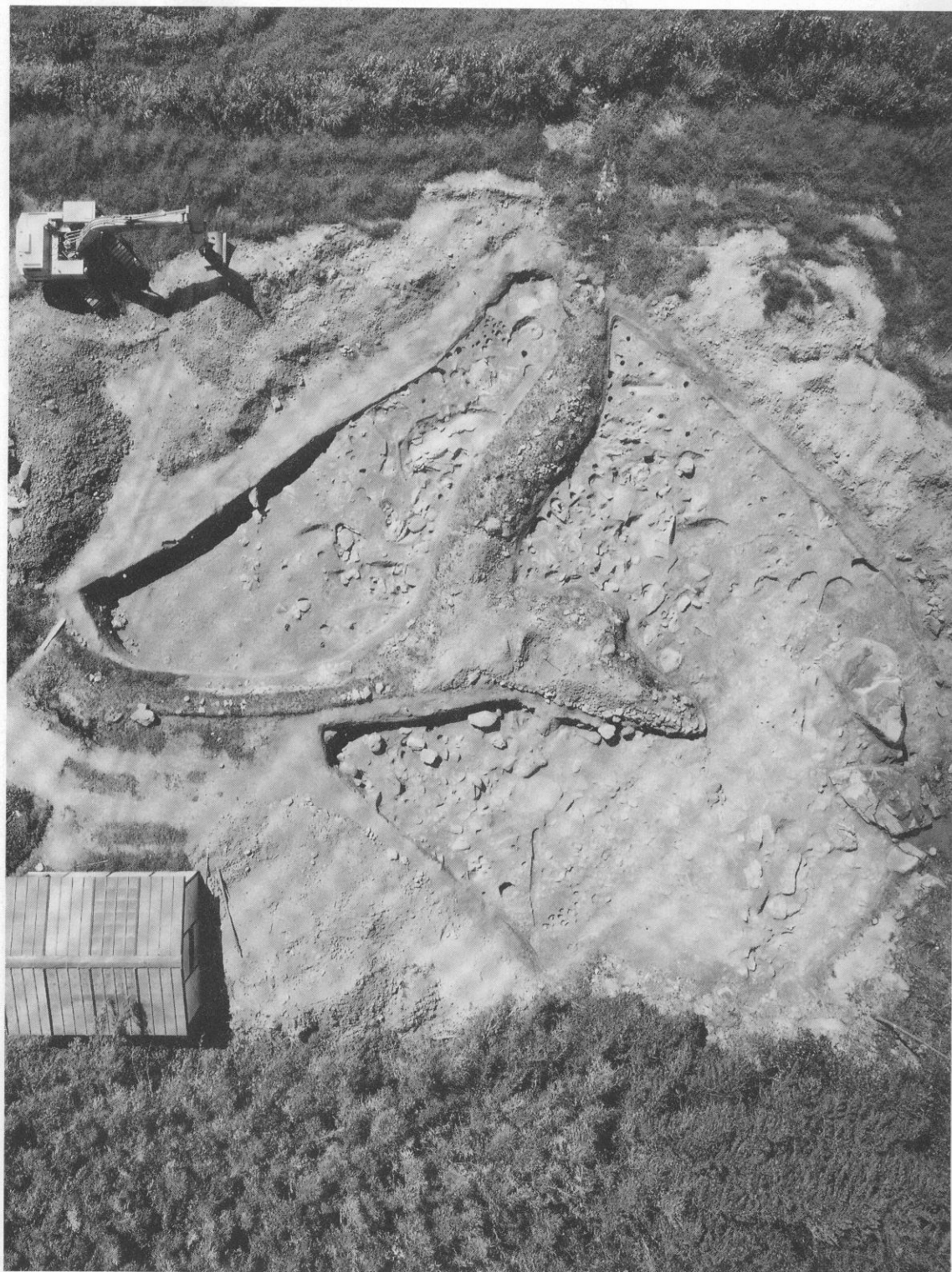
3ST001 完掘状況



3 SX 002完掘状況



3 SD 004 土層観察状況



第4次調査全景（航空写真）



第4次調査地点（調査前）



第4次調査 B区



第4次調査 A・C区



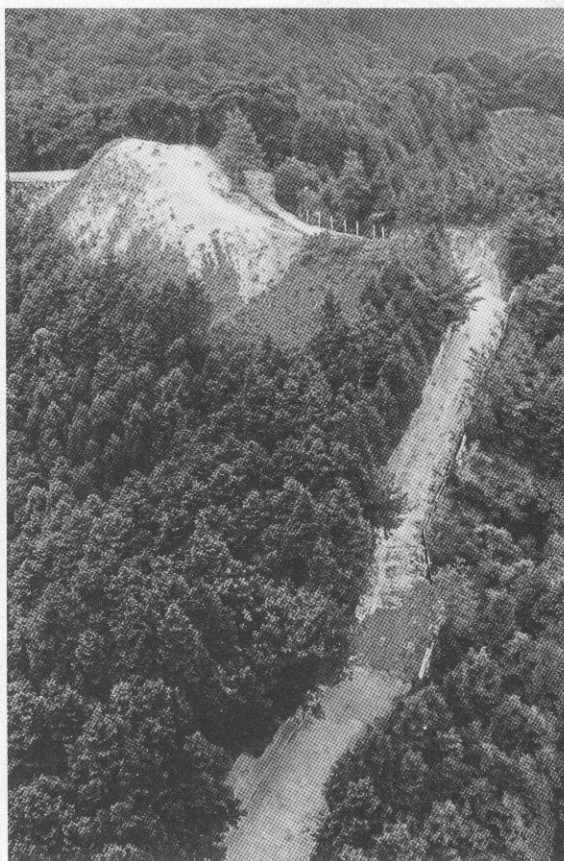
第4次調査 D区



第5次調査地点（調査前）



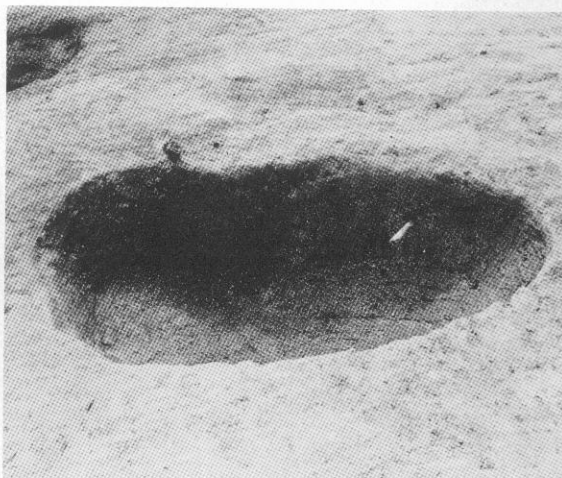
第5次調査全景（空中写真）



第5次調査遠景（空中写真）



5 ST 001



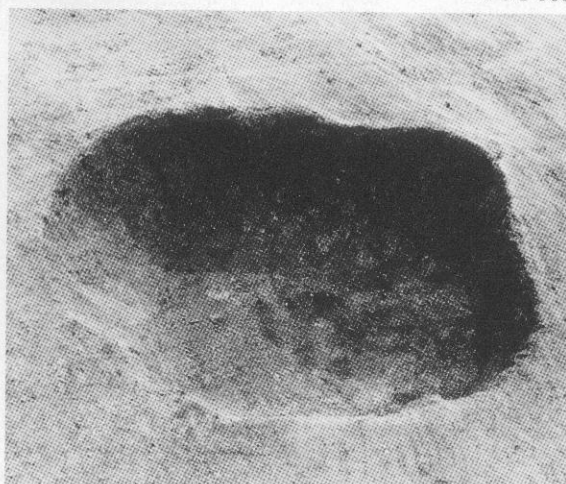
5 SK 002



5 ST 003



5 ST 009



5 ST 006



5 ST 010



第7次調査全景（空中写真）



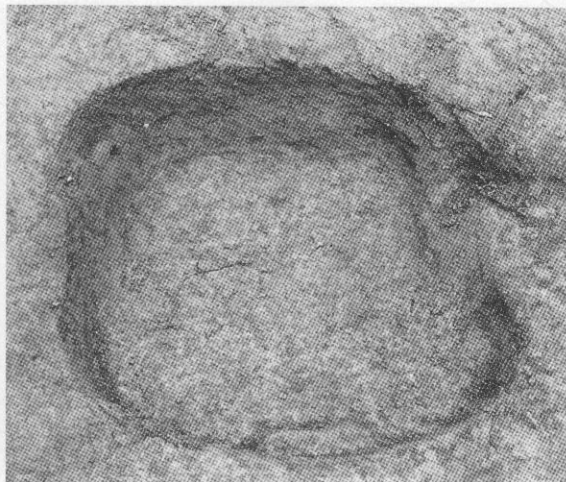
第7次調査（空中写真）



7ST014他火葬土墳群（空中写真）



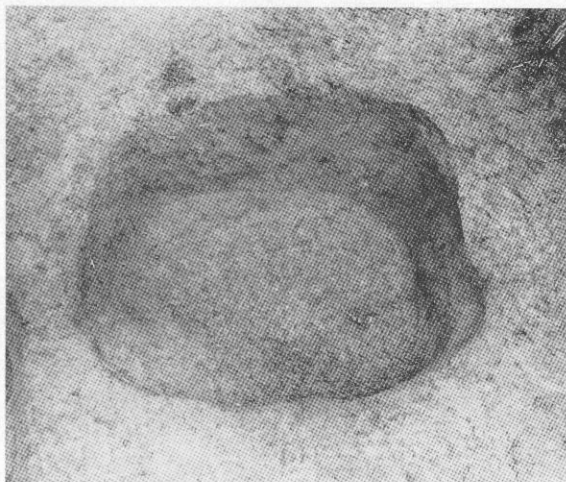
7ST022他火葬土墳群（空中写真）



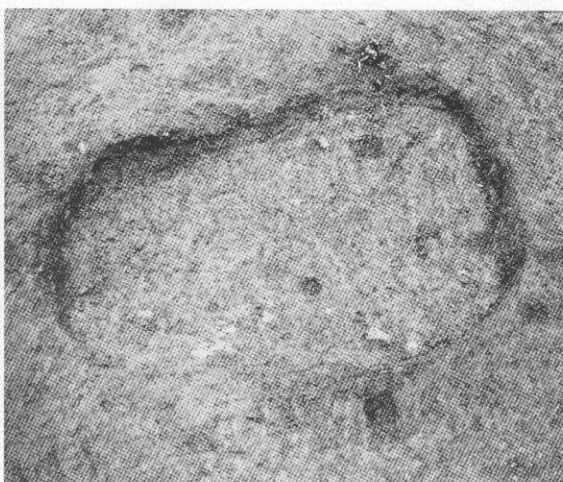
7 ST 003



7 ST 015



7 ST 010



7 ST 016



7 ST 014



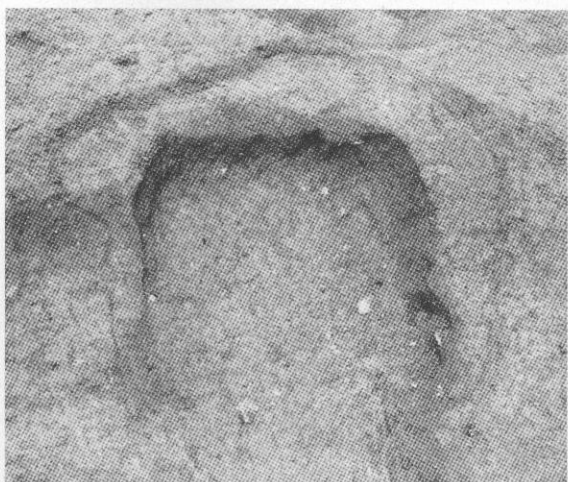
7 ST 017



7 ST 020



7 ST 026



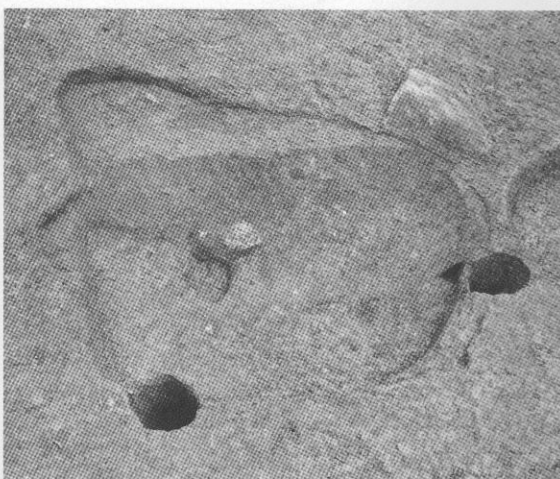
7 ST 022



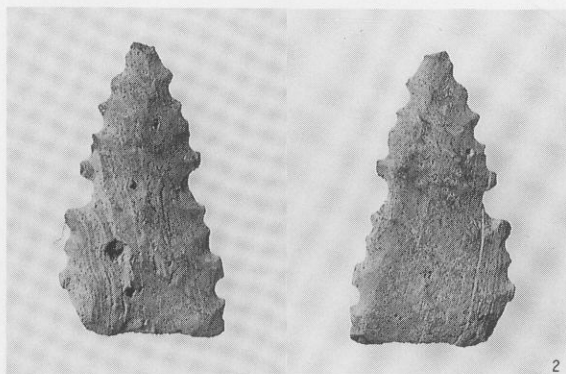
7 ST 011



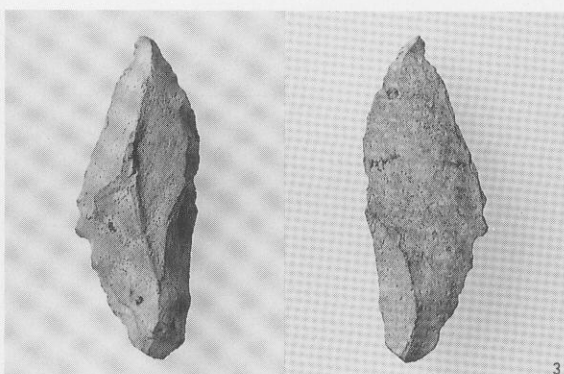
7 ST 024



7 ST 025

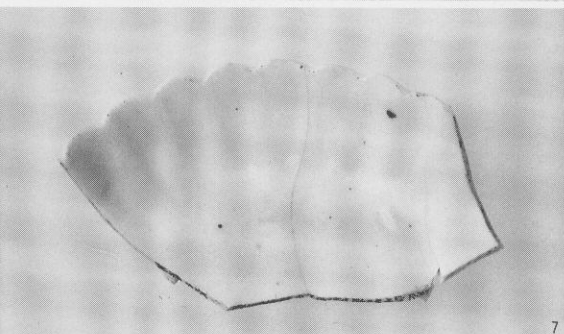
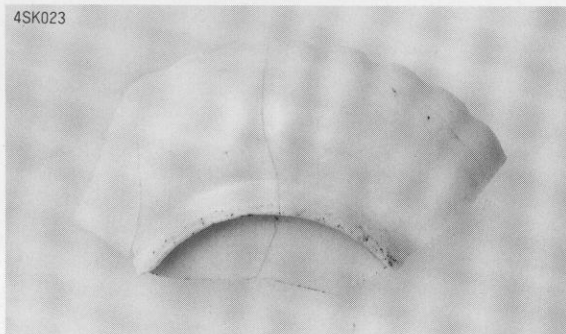


2

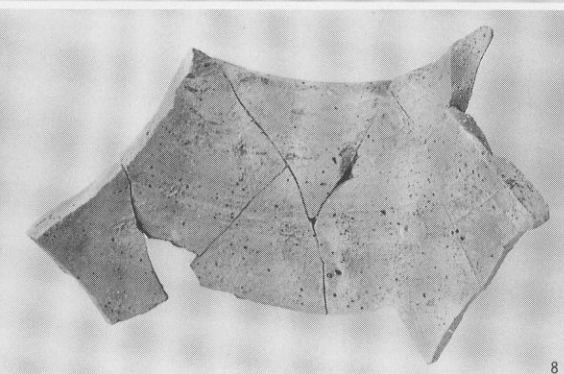
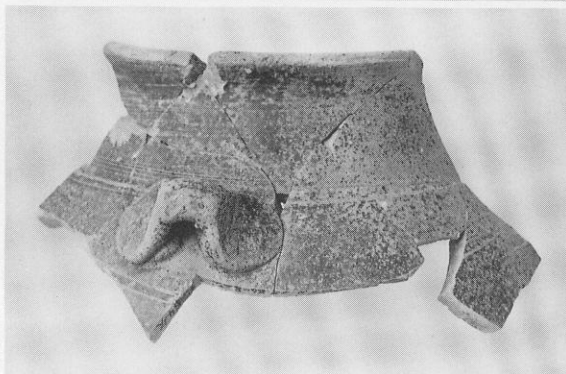


3

4SK023

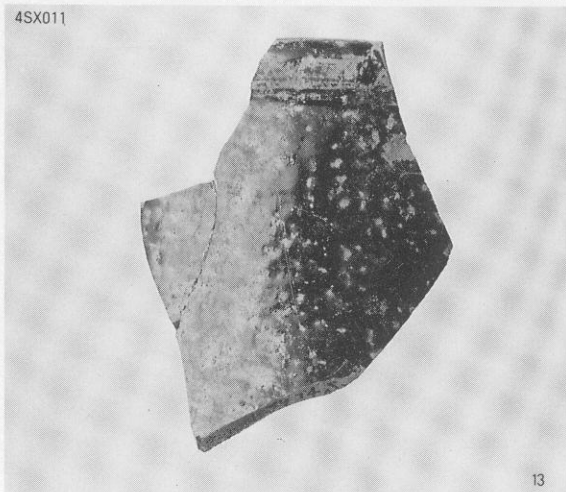


7

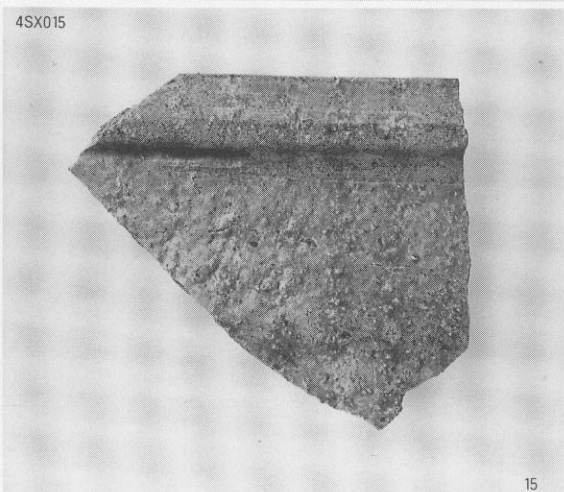


8

4SX011



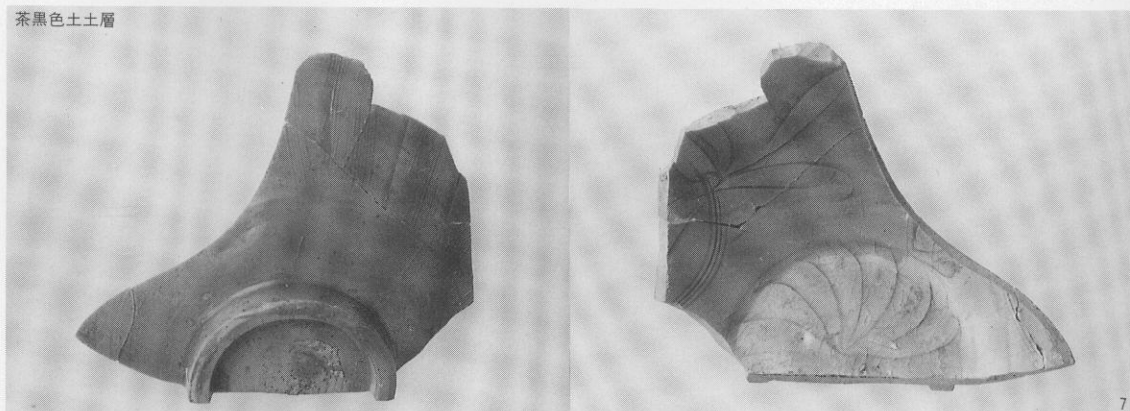
13



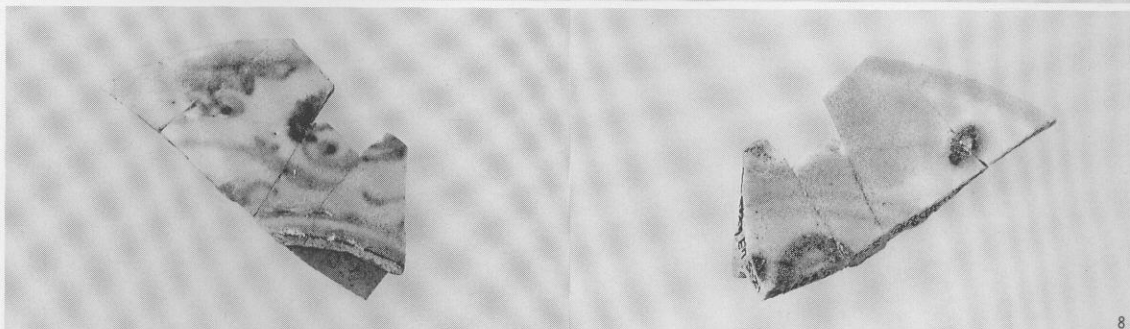
15

4SX015

茶黑色土土層



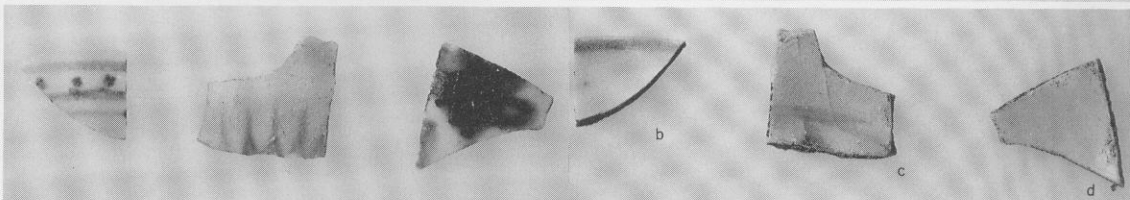
7



8



a

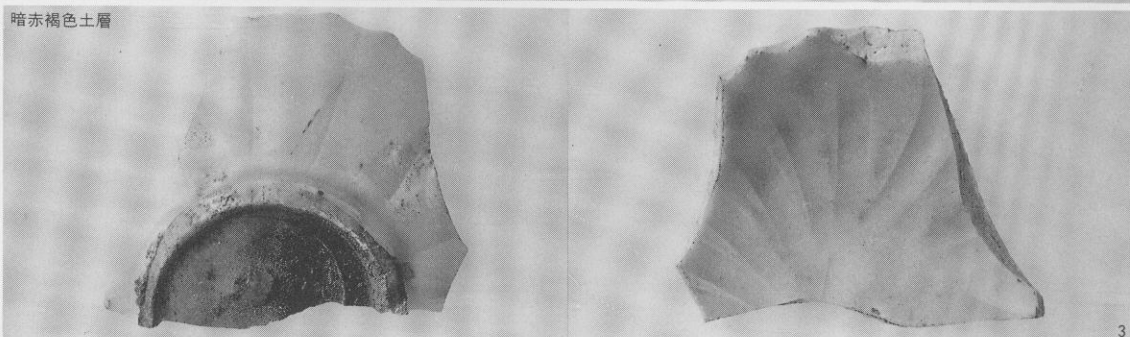


b

c

d

暗赤色土層



3

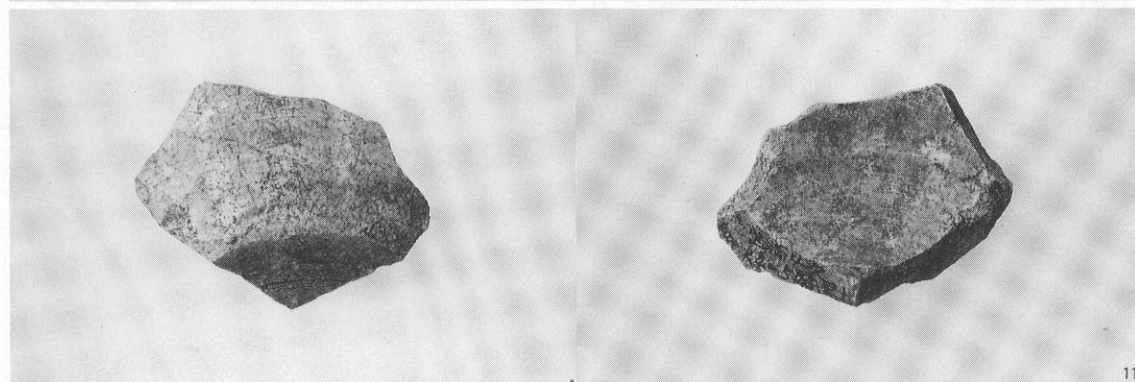
暗茶黑色土層



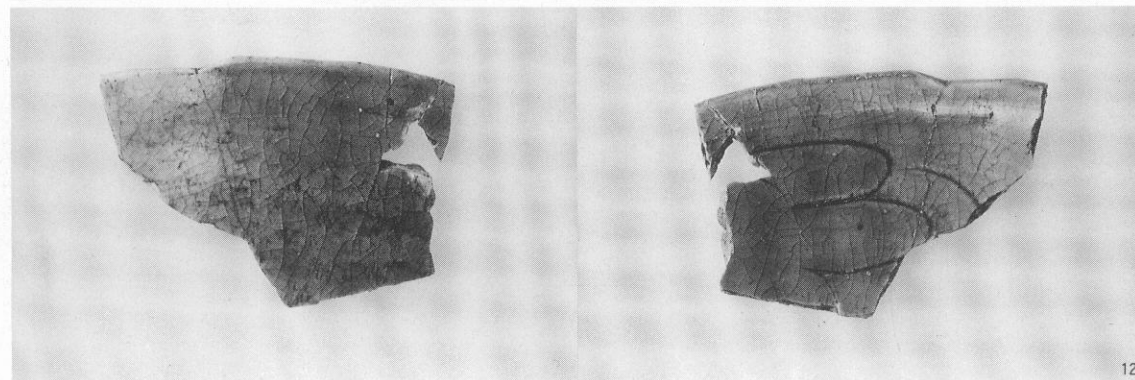
a



10

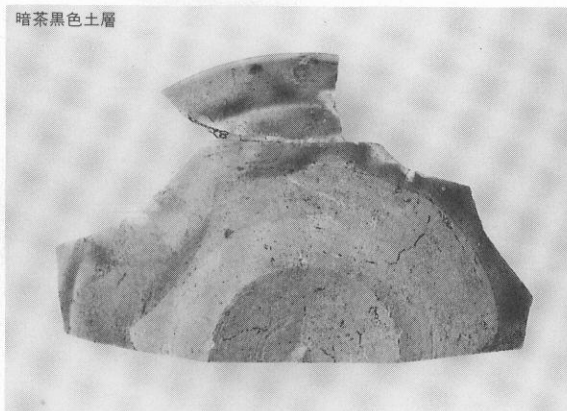


11

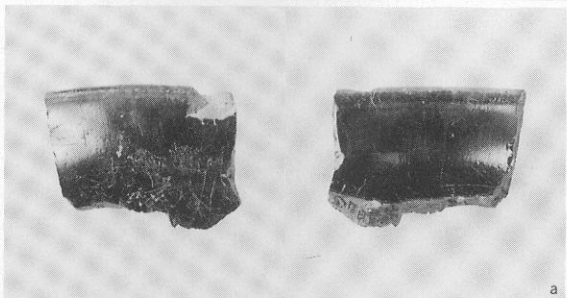


12

暗茶黑色土層



13

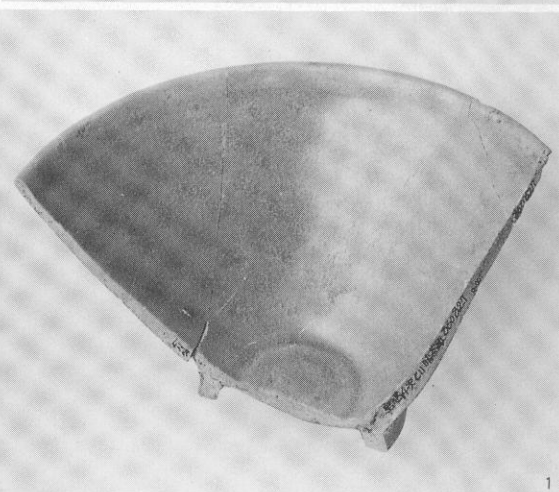


a



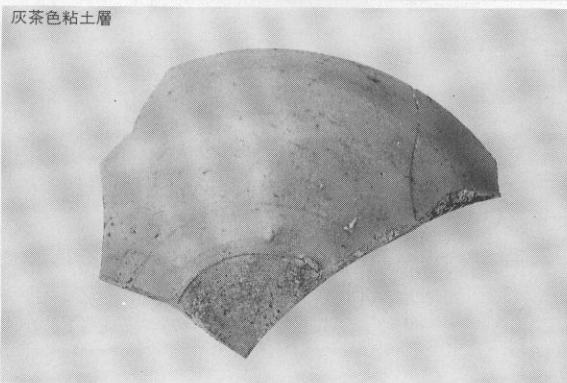
b

暗茶色土層



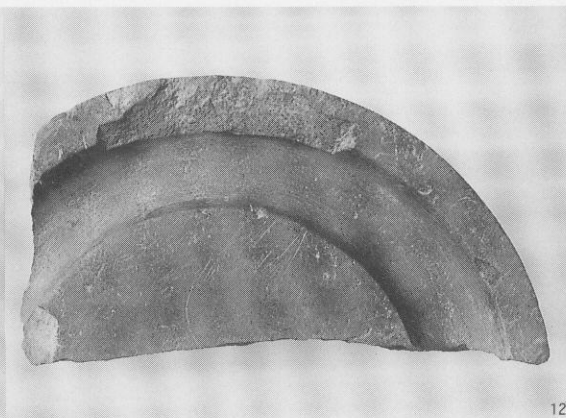
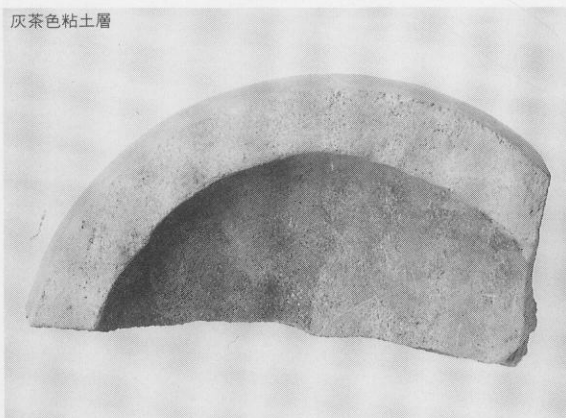
1

灰茶色粘土層



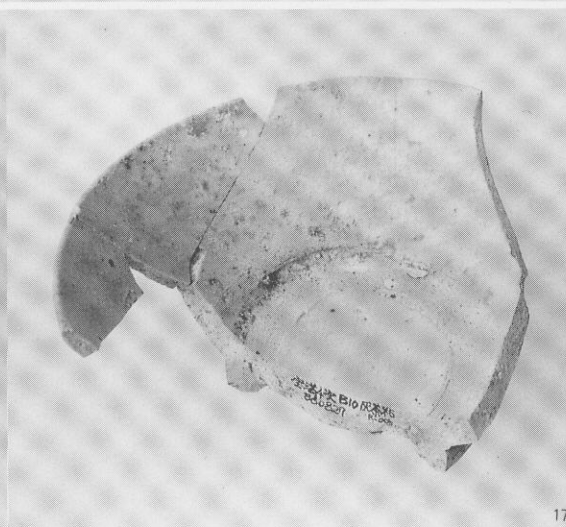
11

灰茶色粘土層



12

黄茶色粘土層



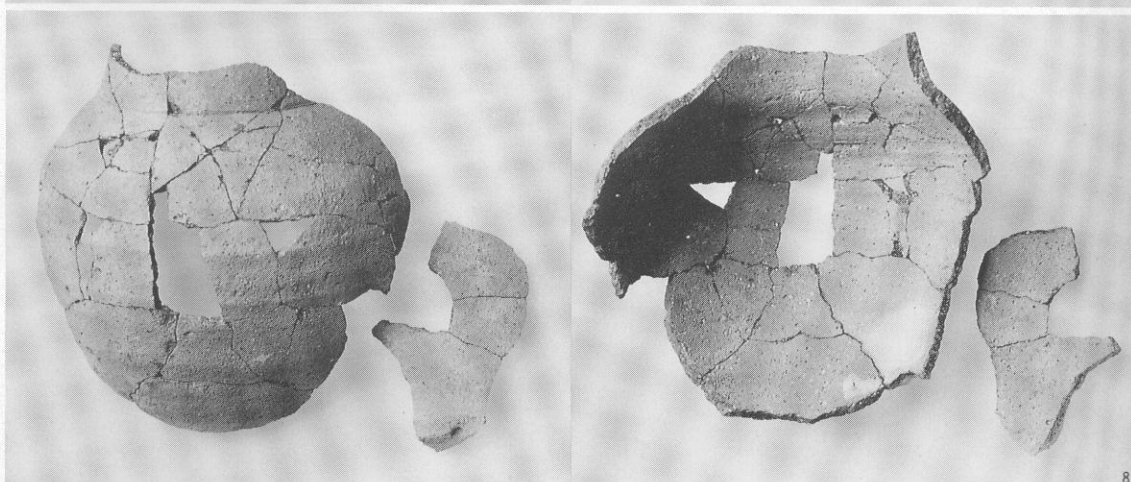
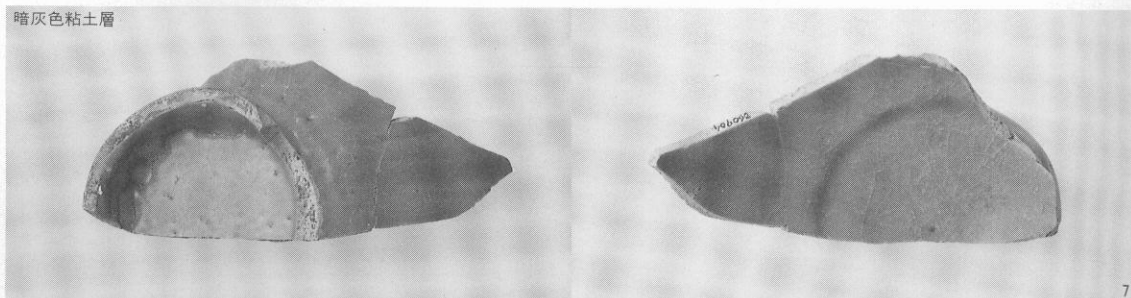
17

暗灰色粘土層

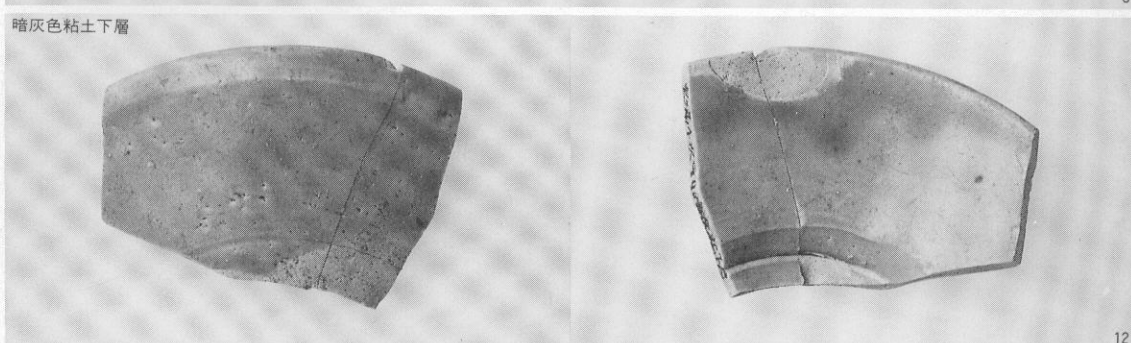


a

暗灰色粘土層



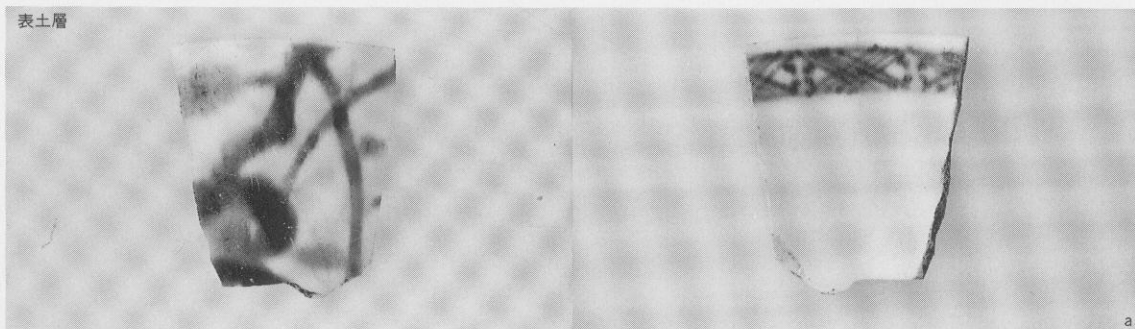
暗灰色粘土下層



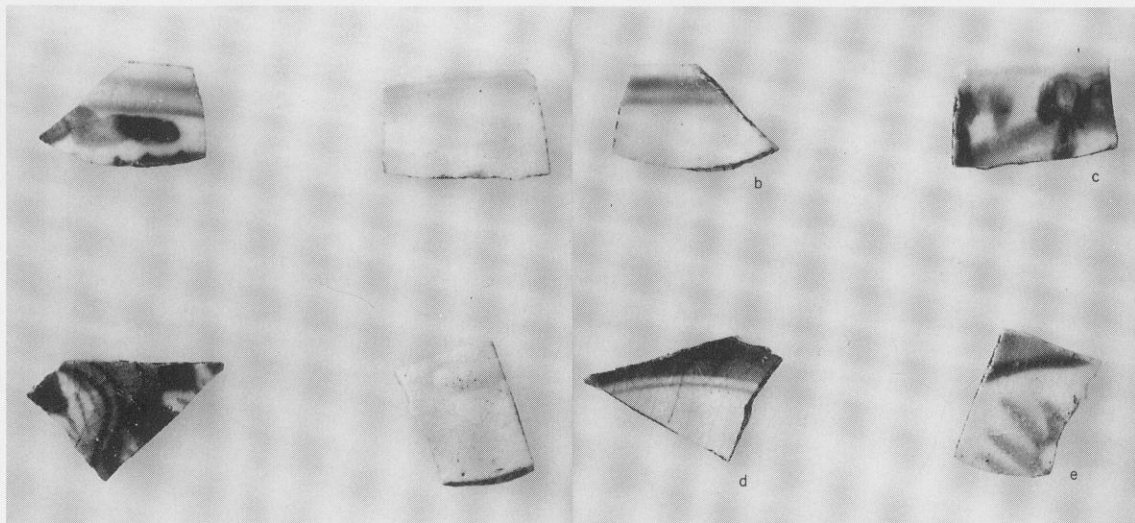
表土層



表土層



a



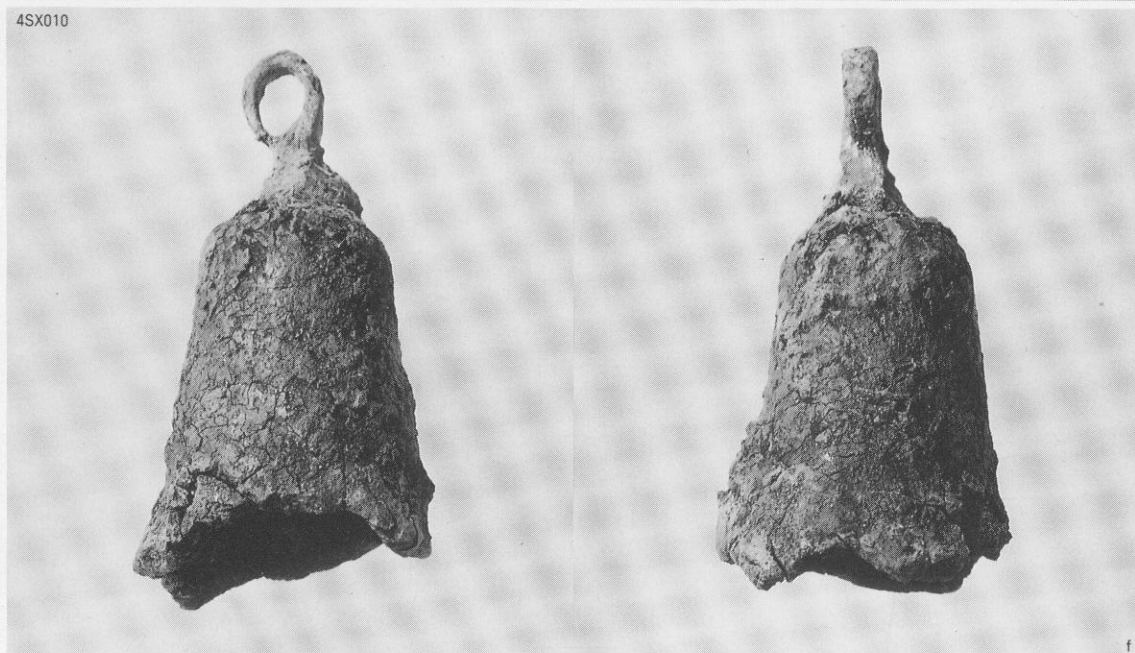
b

c

d

e

4SX010



f

宝満山遺跡

— 太宰府市の文化財 第12集 —

平成元(1989)年3月28日

編集
発行

太宰府市教育委員会

太宰府市大字観世音寺86番地

印刷

福岡印刷株式会社

福岡市中央区天神三丁目4番3号